538
144

トルストイ作
米川正夫譯

戰爭と平和

第一卷

岩波書店刊行

大正
14. 4. 24
內交

538-144

序

一、拙譯『戰爭と平和』は曾て十年前新潮社から出版を計畫したが、やむを得ぬ事情のため前半で譯筆を措いて、後半は他の譯者によつて完成される事となつた。その後わたしは春秋社刊行の『トルストイ全集』(大正八年版)の爲めに後半をも譯了したが、同全集は豫約出版の方法に據つた爲め、期日に制限せられて充分推敲する餘裕がなく、遺憾の點が多かつたが、今回右兩書肆の諒解を得て、舊譯全部を廢棄し、この改訂譯を定本として世に問ふ事が出來たのを欣ぶ。本書を出版するに當り、わたしは譯文の彫琢、語句の解釋等に出來得る限り注意を拂つて、舊譯の缺點を補ふ事に努力した。無論、完璧は望むべくもないが、兎に角以前のものと比較して、より多く原作に接近した事は斷言し得る思ふ。偉大なる原著者に對して、多少良心の安らかなるを感じる次第である。

一、原文には非常に多くの佛蘭西語が挿入されてゐるが、印刷の關係その他の考量のため、舊譯に於てはその全部を割愛して、單なる譯文に留めるべく餘儀なくされた。今度もそれと同樣の事情に制肘されながら、併し原作の含む氣分をせめて暗示なりとする必要を感じたので、程度に於て極めて些々たるものに過ぎないが、歐文の組み込みに努めた事を斷つて置く。

一、なほ本書は人名の發音に於ても舊譯と異る點が大分ある。例へば舊譯のバルコンスキイ、ラストフが、新譯に於てボルコンスキイ、ロストフとなつてゐるが如き類である。これは露西亞語の母音Oが、力點を有せざる場合Aの如く發音せられる爲めに、舊譯に於ては實際の發音に據つたのであるが、一般諸外國では綴字の儘に移されてゐるので、固有名詞の唱へ方が人によつて區々となり、結局混亂を惹起する虞れがある爲めに、改譯に際し文字通りの發音に據ることとした。疑惑のないやうに一言辨明する。

一、本譯の臺本としたビリュコフ編『トルストイ全集』には、『戰爭と平和』第一卷の前身『千八百五年』の中から、その後著者自身に抹殺削除された部分が集成されて附錄となつてゐるが、書册が餘り浩翰なものとなるので、極めて興味に富んだ資料であり讀物であるにも拘らず、遺憾ながら譯載を見合せることとした。

一九二五年三月

譯者

解題

『戰爭と平和』が量に於ても質に於ても、はたまた取材の範圍に於ても、世界文學中ホーマーの『イリアッド』と比肩するに足る一大叙事詩である事は、今更異議をさし狹む餘地もない既定の事實である。この作は千八百五年から千八百二十年に亘る、ロシヤ歴史上重要な時期を再現したもので、ボロヂノの戰、ナポレオンの莫斯科占領、莫斯科の炎上、佛蘭西軍の退却など、ロシヤ國民に取つて忘れる事の出來ない記憶すべき大事件が、極めて詳細に描寫されてゐるのみならず、アレクサンドル一世、ナポレオンの二皇帝の外、幾多の史上の人物が物語の舞臺面に現れて、讀者の眼前に活躍するなど、スケールの雄大なことは眞に匹儔を見出す事が出來ないほどである。

トルストイが此の創作に着手したのは、彼が莫斯科の醫師ベルスの娘ソフィヤ・アンドレーヴナと結婚して、自家の領地ヤースナヤ・ポリャーナに新家庭を作り、上もない幸福と、輝かしい希望と、明るい平靜な心境を樂んでゐた千八百六十四年、卽ち文豪が三十六歳の時であつた。靜かな田園の風光、若く美しい賢明貞淑な妻、充ち足りた生活、長い放浪と摸索の後に到達した心の安定、かうした條件の下に置かれた彼が、何か大きな勞作に筆を染めたいと云ふ要求を感じたのは、極めて當然な事である。

併し『戰爭と平和』の大作は偶然の機會から生れ出たものである。外でもない、最初トルストイは、自家の親戚トルベツコーイ公爵などが連座した、十二月黨の革命運動に興味を感じて、この運動を主題とした長篇小說『十二月黨員』に着手したが、この事件に關する種々な文獻や歷史を調べてゐる中に、彼の興味はいつしかその革命家達の過去に溯つて、そこにより多くの藝術的感興を發見し、遂に最初の計畫を放擲して、ナポレオン戰爭時代を取り扱つた長篇歷史小說の創作に移つた。彼は最初この物語を『千八百五年』と題して一八六五年から六六年へ掛けて、雜誌『露國報知』へ連載したが、その後次第に感興が增して、次へ〳〵と事件を押し進めて行つた。かうして一八六九年愈々彼の勞作は終りを告げ、題も『戰爭と平和』と改められた譯である。

併し若しこの作が單なる歷史小說として終始したならば、若しトルストイがこの國家の歷史の中に自分の家庭の歷史を編み込まなかつたならば、この作品の魅力は大部分失はれて了つたかも知れない。實際『戰爭と平和』には戰爭や皇帝や將軍や外交官などが、他の所謂歷史小說などに見る事の出來ない、透徹した鋭利な觀察と、現實的な人間味の溢れた描寫に依つてまざ〳〵と生かされてゐるとは言へ、作の重心を形作つてゐるのはこれらの歷史的要素ではなくて、ボルコンスキイ公爵及びロストフ伯爵兩家の私生活なのである。それ所かトルストイは、歷史上の英雄傑士は寧ろ名聲や榮譽の空しい傀儡であり、虛僞な外面的慾望や目的に支配されてゐる哀れむべき

不具者として、讀者の眼前に照し出してゐる。この點がホーマーの叙事詩などに表はれた、絕對的英雄崇拜と正反對の極に立つものと言へる。

現在に於てこの『否定的叙事詩』(これは卓越せる文學批評家兼社會學者たる故オフシャニコ・クリコーフスキイの下した定義である)の興味の中心を成してゐるボルコンスキイ公爵家及びロストフ伯爵家の二家族が、文豪トルストイを生み出した二家族、卽ちヴォルコンスキイ公爵家及びトルストイ伯爵家に外ならぬ事は、洽く世に知れ渡つた事實である。我家の歷史に深甚な興味を抱いた作者は、種々な文書や周圍の人々から蒐集した事實を、歷史の背景の上に再現しようと決心したのである。

『戰爭と平和』に描かれた諸人物と、實在のモデルとを比較して見るのも、あながち無用の業でなからうと思ふ。文豪の父ニコライ・イリッチは、トルストイの小說中のニコライ・イリッチ・ロストフと同樣、輕騎兵の將校として千八百十二年の戰役に從ひ、平和締結後退職した人で、單純で快活な熱情的の好士官であつた。青年時代カルタの勝負に耽溺して家產を傾けたといふ事實も作中に描寫されてゐる通りだし、自家の財政を恢復するために、年の若くない醜いヴォルコンスキイ公爵令孃と結婚した事も、小說のニコライ・ロストフと全然符節を合してゐる。

文豪の母方の祖父ヴォルコンスキイ公は、卽ち作中のボルコンスキイ老公爵である。彼はエカ

チェリーナ女帝の寵臣として、飛ぶ鳥も落す程の權勢を恣にしてゐたが、一朝事にふれて失脚した爲め、父祖の領地ヤースナヤ・ポリャーナに隱棲して、たつた一人切りの愛娘マリヤ（作中の公爵令孃と同名）と共に晩年を送つた。但し小說に描かれたやうな、戰亂の渦中に於ける傳奇的な死に方はしなかつた。彼は非常に峻嚴な、時として殘忍な位な性格の所有者であつたが、その冷靜な頭腦と合理的な領地の支配振りは、周圍の人々や農民の間に深い尊敬を呼び醒した。併し全體に於て生活の基調をなしてゐたものは、自分の家柄は古く且つ尊いものであつて、自分及び自分の一族は特に優れた惠まれたる人種である、と云ふ牢乎として拔くべからざる根强い意識であつた。この貴族的意識は程度の相違こそあれ、『戰爭と平和』の重立つた人物全體に認められる特徵であつて、その爲めに前に名前を擧げたクリコーフスキイは、この小說をロシヤ國民歷史の重要なる一時代を如實に再現したものとして、『貴族地主的叙事詩（バールスカヤ・エポペーヤ）』なる別名を與へてゐる位である。

トルストイの母は彼が二つの年に亡くなつた上に、何ういふものか寫眞や肖像畫が一枚も殘らなかつたので、彼は全然母を記憶してゐなかつたのである。併し彼は人々から傳へ聞いた想ひ出に依つて、美しい精神的な母の俤を心に描いてゐた。その一部を彼は既に處女作『幼年時代』に於ても表現したが、『戰爭と平和』のマリヤ令孃に於て始めて完全な肖像が出來上つた譯である。トルストイの母マリヤは、作中の公爵令孃と同じく醜い容貌の持主であつたが、その當時の時世と

しては優れた教育を授かつてゐて、四つの外國語を自由に驅使し、ピヤノに堪能で藝術的天禀をも備へてゐた。その外に彼女は非凡な話術の名人で、四方山の世間話に自分の創り出た架空談（そらごと）など取り交ぜて、いつまでも聽者を倦ましめない珍しい才能を有つてゐた。トルストイ自身も、母が父よりも精神的に卓越してゐた事を認めてゐる。この點も『戰爭と平和』の描寫と一致してゐる譯である。トルストイの優れた資性才能が、母方のヴォルコンスキイ家の血を引いてゐる事は疑ひを入れない。

トルストイの母はヴォルコンスキイ公爵家の一人娘で兄弟がなかつたが、彼は藝術家的直感によつて、マリヤ令孃に兄を持たせる事を、叙事詩の構成上必要と感じたので、アンドレイ公爵なる人物を創造して、ピエール・ベズーホフと共に、小說中の最も重要なる位置を與へたのである。この二人の主人公は作者トルストイの性格の、相反せる二つの面（めん）を具象化したもので、殆ど全部トルストイの創造と言つてもいゝ位であるが、アンドレイ公爵の方には部分的に實在の人物との類似點を發見する事が出來る。外でもない、アンドレイがアウステリッツの戰場で負傷して捕虜となり、ナポレオンに親しく面接する機會を得たと云ふ一條は、ヴォルコンスキイ公爵家の親戚の一人、ニコライ・グリゴーリエヴッチの閲歷にヒントを得たらしく想像せられる。なほ生の權化とも云ふべき驚嘆に價する近代文學の一典型たる女主人公ナターシャのモデルとなつたのは、トルストイ

夫人の妹タチャーナであるが、作者自身の證言に依れば、伯爵夫人自身の特質もその中に春き交ぜられてゐるとの事である。

この浩瀚な『戰爭と平和』一篇を玩味し研究するには、假りに藝術的要素と、思想的要素とに分け、更に後者を一般的人生觀と、小說中の重大な部分を形作つてゐる、戰爭哲學の二つに細別するのが便宜であらう。

先づ第一の分類たる作の藝術的價値については、今更事新しく述べるまでもあるまい。トルストイはこの大作に着手する以前、自分の描かんとする時代に關して、ありとあらゆる書籍や記錄を涉獵して嚴密な取捨選擇を施し、親しく史上の古蹟を訪れて細心な觀察考究を遂げ、尙その上に自身の內部經驗や、クリミヤ戰爭從軍當時の見聞に、自由で豐富な想像を加へたものを素材とし、且つ表現に於ても不世出の天才が彫心鏤骨の苦心を重ねて、稿を革める事數回に及んだ努力の結晶であるだけに、(實際藝術的良心の極度に發達したトルストイは、自分の草稿に完膚なきまで抹殺、改正、記入を施して、殆ど彼自身さへ判讀に苦しむ程推敲を重ねたものを、ソフィヤ夫人に與へて淸書させた後、更にまたそれを元の俤のない位修正する。これが常に數回、甚しきに到つては、六七回に及ぶと云ふのは世人周知の有名な逸話である)十九世紀の初葉に於ける大きな露西亞の社會生活が、動き躍る無限の繪卷物となつて眼前に展開せられ、讀者は巨匠の筆の力

に依つて、いつしか一世紀前の貴族や、農民や、無名の少女の生活に同化し、彼等と共に泣き且つ笑はずに居られない。眞に寫實主義文學の到達し得る極致である。我々は何等の誇張なしにこの小說を、十九世紀が生んだ最大の藝術品と云ふに躊躇しない。

『戰爭と平和』に於ける作者の人世觀は、作中の重要な二人の主人公、アンドレイ公爵とピエールの研究によつて大體を窺ふことが出來よう。この二人の人物は先に述べた如く、トルストイの內面生活の相反せる兩極を具象化したものであつて、生れながらの貴族であり特權階級の一員であるトルストイは、アンドレイ公爵に體現せられ、空想家であり眞理の探求家である彼の半面は、ピエール・ベズーホフに鮮かな力强い表現を得てゐる。アンドレイ公爵は古い名門の家に生れた生粹のアリストクラートである。從つて數世紀に亘つて純化し洗練された肉體と智能の所有者であり、且つその當時に於ける最高敎育を受けた人である事は云ふまでもない。そして前に述べた遺傳的な優越感と矜持の念、引いては一切の他人に對する侮蔑感が、根强い本能となつて內部に働いてゐる。併し貴族的な潔癖と、訓練せられた理智や意志の力に制せられて、決して暴虐や不合理を他に加へるやうな事がないばかりでなく、新時代の思潮に影響されて、極めて進んだ人道的な理想すら抱いてゐる。それ故彼は政府の農奴解放令に約半世紀も先立つて、自己の領地の農奴解放を計畫し、數代の國務鞅掌と領地經營に依つて作り上げられた、明晰冷靜な事務的才能を以て

この計畫を實行したのである。けれども一切の感傷的な空想に緣のない、理智的觀察家たる彼には、早くもその當時から萠芽を見せ始めた人民崇拜（ナロードニチエトラ）の分子などは微塵も存しなかつた。彼が農奴を解放したのは、單にそれを教養ある進んだ人間の精神的義務と感じたに過ぎないので、農民に對して何等の愛をも感じなかつたばかりでなく、彼等を人間とさへも見なさなかつた程である。彼がこの改革を斷行したのは、農民に對する同情のためではなくて、農奴制のために道德的に頽廢して行く地主自身を救ふためだ、といふエゴイスチックな言葉を放つてゐるのは、全然反抗的な誇張ばかりとは言へない。

翻つてピエールの方を見ると、彼は同じく露西亞有數の大地主でありながら、アンドレイ公爵に見られるやうな特權階級的心理が、全然皆無であると云つてよい。なぜと云ふに、ボルコンスキイ公爵家が建國以來の由緒ある貴族（ボヤール）の家柄であるに反して、ピエールの父ベズーホフ伯爵は、エカチエリーナ女帝時代に輩出した成上り者の一人で、而もピエールはその庶子だからである。その上彼は並々ならぬ善良な心をもつた、眞摯で單純で無邪氣な子供のやうな青年であると同時に、優れた教育を受け、且つ智的感受性に富んだ代表的知識階級の一人であつた。かう云ふ條件を備へたピエールが特權階級的本能を藏して、他人を蔑視したり、自己の優良卓越を意識したりする傾向に缺けてゐるは、寧ろ當然であらう。ピエールとアンドレイ公爵を比較すると、二人があらゆ

る點に於て相反せる極に立つてゐるのを發見する。アンドレイが解剖と批評に長けた觀察者なら、ピエールは常に自己の內部生活に沒頭し切つて、一種の霧を通して外部の世界を眺めてゐる放心家であり、アンドレイが現實派（リアリスト）であるなら、ピエールは理想派（イデアリスト）である。アンドレイが事務の人で實行家であるに反して、ピエールは抽象的な永遠の問題に頭を惱ます、典型的な露西亞の知識階級である。アンドレイは名譽心が强くて、社會的活動家としての資格を十分に備へてゐるが、ピエールはこの方面に於ては全然無能力者で、農奴解放の失敗の如きその顯著な例である。最後のエピローグに、社會革命を目的とする祕密結社に關係したのも、社會的活動に對する要求の爲めではなく、むしろ內部的思想の開展によつて導かれたのである。

ピエールはその當時の人心を動かした、あらゆる思想的誘惑を經驗した。マソンの教義、神祕的人生觀、ナポレオン侵入當時の愛國心の發作、博愛主義、急進主義、かうした多くの stadia（スタディア）を經過する間に、彼は屢々烈しい精神的危機に遭遇したけれど、彼の健全な直觀力は常に深い迷路から彼を救ひ出した。この間に於て最も注目に價する興味ある出來事は、ピエールのプラトン・カラターエフとの邂逅であらう。カラターエフは『戰爭と平和』の本筋から言へば挿話的な意味しか持たない人物であるけれど、その描寫の藝術的に完成してゐる點に於て、驚嘆すべき偉大なる創造である。彼は軍隊に取られた一農夫であるが、些かの軍隊臭味をも有しないで、露西亞農民に

固有な素質をその儘純粋に保存してゐる。彼は單純と眞率と、何物を以ても傷つける事の出來ない圓滿と快活の具象化であつた。そこには勿論幾分の理想化の痕も窺はれるが、併しその理想化は低級な作品に見られるやうな、調子外れの響きや安價な讃美を含んでゐない上、尙ピエールの目を通して見たと云ふ所に、背定（ジャスティフィケーション）を見出し得る。

實際虛僞に充ちた空虛な上流の社會に生活し、而も抽象的な智的探究と自己反省に苦んで、精神的危機に遭遇して居つたピエールに取つて、運命に對して飽くまで從順な、ナィーヴなほど善良なこのカラターエフの出現は、彼の生活に一轉期を劃する大きな出來事だつたに相違ない。この人民崇拜（ナロードニチエストヲ）の傾向はトルストイ初期の作にも現れてゐる。『コサック』が卽ちそれである。併し彼の人民崇拜（ナロードニチエストヲ）は廣い意味に於けるそれと少し異つてゐて、つまり貴族的と云ふ形容言を附すべき一分派に屬するものである。西歐の教育と上流社會の儀禮に食傷して、一切の人工的約束的なものに飽滿した人は、自然の數として全然新しい世界たる農民生活の無技巧さ、單純さに魅了されざるを得ない。從つてその人民崇拜（ナロードニチエストヲ）は主義信念から發したものと言ふより、心理的感傷的分子が殆ど全部を占めてゐるのである。それが爲めに『コサック』の主人公は性急に過去の絕緣、人民との同化、自然との融合を焦慮（あせ）つて、間もなく慘澹たる幻滅を經驗しなければならかつた。併しピエールはかうした人民崇拜が一代の風潮とならなかつた、十九世紀初葉の人であるだけに、さう

云ふ無鐵鉋な努力はしなかつた。彼はカラターエフに體現された農民精神の美と力の前に跪拜しながらも、堅實な足取りで自分自身の歩みを續けて、遂にカラターエフの無抵抗の教へと正反對の極に立つ、社會革命の道へ出たのである。つまり人民との接觸は彼の爲めに、民主的教育の活きた學校の役目を勤めた譯である。

既に前に述べた如く、アンドレイ公爵は作者トルストイの素質（テムペラメント）、智性、階級心理を鮮明に具象し、ピエールはその氣分、內的經驗、思索を體現した人物として、トルストイ研究者に深甚な興味を與へるものである。

最後に彼の歷史哲學を簡單に述べると、すべての歷史上の事件は少數の爲政者や、外交官や、軍隊指揮者などに左右されるものでなくして、その事件に關與した無限小の分子、卽ち民衆の意志や出來心の總和による、とかう言ふのである。彼は數百萬の基督教國の民が、單に皇帝の意志や將軍の命令に依つて、互に殺し合ふといふやうな事が、有り得べき筈がないと論斷して、目に見えぬ群集の力を滔々數萬言を費して高唱力說してゐる。かうした解釋はあながちトルストイが最初に發見した新說ではないけれど、思想を最後まで押し詰めなければ措かぬ、トルストイ獨特の猪突的な（これはドストエーフスキイの評語である）論法は、天才的な譬喩や豐かな引證の助けによつて、竝外れた力强い印象を與へるために、この作の發表當時四方から——特にナポレオン戰

爭に參加した武官から、烈しい非難攻擊の狼火が上つた。併し屢々極端なパラドックスに墮したトルストイの說の中にも、常に半面の眞理は存してゐるのである。無論戰爭に於ける指揮官參謀官の價値を全部否定するのは、極端に走つた矯激な言葉であるけれど、部分的にはトルストイの主張する通り、激戰中上官の指揮が徹底的に傳へ得るものでないとか、或ひは所謂軍の士氣が指揮官の無能に拘らず、屢々戰局に決定的な影響を與へる、と云ふやうな事實は到底否定することが出來ない。

全體として、彼が名もない下級の士官や兵卒の、素朴で純眞なヒロイズムを高調する事に努めて、歷史上の偉人や英雄の價値を否定し減殺し乍ら、ナポレオン戰爭中の功勞者中たゞ一人クトゥゾフのみには、この老將軍が積極的に何事もしないで、只人民の要求を感得してそれに順應したが爲めに、容赦ない峻烈な抹殺の筆を加へなかつたと云ふ事は、露西亞的人間觀の發顯として意味深く感じられる。

ツルゲーネフなどは『戰爭と平和』の藝術的半面の價値を極力稱揚すると同時に、この歷史哲學を先入見に囚はれた錯誤であり、作品全體の調和を破る邪道であると言つて否定してゐるが、併し、『戰爭と平和』が家庭內の私生活のみを取り扱つた單なるローマンスでなくして、それと並行して眞の歷史を描く事を目的としてゐる以上、この戰爭論も萬人周知の史實を小說として發展

させる上に、單調を破り變化を與へる有力な手法であると言へる。

兎に角歷史と評論とローマンスを組み合せて、幾つにも分岐した筋を巧みに繰りながら、些かの混亂をも示さずに、この雄大豐麗多彩な大交響樂を築き上げたトルストイの天才は、眞に文學上に於ける一箇の奇蹟である。

米川正夫

戰爭と平和

第一卷

第一編

『Eh bien, mon prince（ねえ、如何でございます、公爵）ジェノァもルッカも（両者共イタリヤの地名）ボナパルト家の領地同様になつて了ひましたよ。宜しうございますか、わたくし前以てお斷り申して置きますが、若しあなたが今別に戰爭といふやうなものは無いと仰しやつたり、又はあの反基督（アンチクリスト）の（えゝ全くでございますわ、わたくしさう信じて居りますの）色んな忌はしい恐しい所業を辯護したりなさると――わたくしもうあなたと絶交いたします。あなたはもう御自分で仰しやるやうに、わたくしの親友でもなければ、忠實なる奴隷（エールクライヴ）でもありません。でも、まァよくいらつしやいました、よくいらつしやいました。わたしは何うやらあなたを吃驚おさせ申したやうでございますね。さ、坐つてお話し下さいませ。』

千八百五年六月、皇太后マリヤ・フョードロヴナのお傍近くに仕へて、世に知れ渡つた女官アンナ・パーヴロヴナ・シェーレルは、自分の夜會へ第一番に乘り付けた時の顯官ワシーリイ公爵を出迎

へ乍ら、流暢な佛蘭西語でかう言つた。アンナはもう此の四五日咳ばかりしてゐた。彼女は所謂インフルエンザに罹つてゐたのである。(インフルエンザといふのは當時の新しい言葉で、少數の人にしか用ひられてゐなかつた。)今朝金モールの侍僕が配つて歩いた手紙には、悉く一樣に佛文で次のやうな事が書いてあつた。

『伯爵(或は公爵)、もし御許樣にさしたるよきお遊び所もこれなく、又其の上貧しき病女が許にて一夜を過すてふ事も、さして忌はしからず思し召し候はゞ、妾は今夕七時過ぎより十時頃迄、御許樣の御來駕を待ち詫び申すべく候。アンネット・シェーレル。』

『Dieu, quelle virulente sortie!! (おゝ、何といふ猛烈な攻撃でせう!)』かうした出迎への仕方にたぢろぐ色もなく、入つて來た公爵はかう答へた。刺繍をした宮中の制服、長い靴下、小さな靴、數々の勳章、晴れ晴れした平つたい顏の表情。

彼は我等の祖父が單に話すばかりでなく、考へるにさへも使つたといふ、かの優雅な佛蘭西語で話した。其の靜かな對手を庇ふやうな音調は、上流の交際社會や宮中で年取つた、高位顯官の人々に特有のものであつた。彼はアンナ・シェーレルに近寄つて、香水の薫り高い、てら〳〵光る拔け上つた額を差し出し乍ら、女主人の手を接吻した後、悠々と長椅子に腰を下した。

『先づ何より先に伺ひますが、お體の加減は如何ですか。どうぞ友達に安心させて下さい。』と

彼は語調を變へないで言つた。その調子には禮儀と同情の陰から、無關心といふより寧ろ嘲笑の響きさへ聞えた。

『何うして加減がよくて居られませう……かうして精神的に苦しんでゐるんですもの。若し誰でも感じといふものを持つてゐたら、今の世の中に平氣でゐられる筈がございません。』とアンナは言つた。『あなたは今晩ずつと終ひまで、わたくし共に居て下さいますでせうね?』

『では英吉利公使の祝典を何うします? 今日は水曜日ですよ。わたしは其の方へも顏を出さなくちやなりません。』と公爵は言つた。『娘が後からお伺ひして、わたしと一緒に行く筈になつてゐます。』

『わたくし今日のお祝は沙汰止めかと存じてゐました。實を申すと、あんなお祭騷ぎや花火などと云ふものが、すつかり厭になつて了つたのでございます。』

『若しあなたのお望みが分つてゐたら、此のお祝ひも沙汰止みとなつたでせうにね。』公爵は自分でも本當にして貰ひ度くない事を言ふ時の癖として、螺線を卷いた時計のやうにかう答へた。

『Ne me tourmentez pas. (わたくしを苛めないで下さいまし) 時にノヴシーリツェフ(伯爵、有名な政治家一七六一—一八三六)の急報事件は何う決りまして? あなたはすつかり御存じなのでございませう。』

『何と申しますか?』と公爵は冷やかな退屈らしい調子で言つた。『Qu' a-t-on decidé? (何う決つたかと仰有るんですね?)

ボナパルトも背水の陣を敷いたから、露西亞でも矢張り背水の陣を敷く覺悟で居よう、とこんな風に決つたらしいです。』

ヴシーリイ公爵は何時も役者が古い脚本の臺辭でも言ふやうに、大儀さうな口の利き方をした。所がアンナ・シェーレルは、年こそもう四十だが、反對に活氣と熱情に充ちてゐた。

熱情家――これが彼女の社交界に於ける役割となつて了つた。で時々自分で餘り乘氣がしない時でも、彼女は自分を知つて居る人達の期待を裏切らない爲めに、強ひて熱情家を粧ふのであつた。いつもアンナの頰邊に躍つてゐる控へ目な微笑は、其の盛りを過ぎた顏の輪廓に似つかはしくなかつたけれど、丁度甘やかされた我儘な子供によくあるやうに、常に我が缺點の愛す可き事を自覺してゐる氣持が表れてゐた。彼女に取つて其の缺點を匡正する事は厭でもあり、不可能でもあり、又不必要でもあつた。

政治談の中頃にアンナは急に熱くなつた。

『あゝ、もう墺太利の事は仰しやらないで下さいまし！　わたくし何にも分らないのかも知れませんけれど、墺太利は決して戰爭を望んだ事もありませんし、又現に望んでも居ません。あれはわたくし共を裏切つたのでございます。只露西亞だけが歐羅巴の救主でなくちやなりません。陛下は御自分の尊い使命を御存じの上、其の使命に忠實でおありなさるに相違ございません。わたくしの信じゐるのはこれだけでございます。我が善良にして叡聖なる皇帝陛下は、世界中で何よりも偉大な役目を控へてゐらつしやいます。そして陛下はお德が高くて善良なお方でいらつしやいますから、神樣も陛下を見捨てゐやうな事はございません。今あの人殺しの惡黨に體現された爲めに猶一倍恐しく見える、革命の九頭蛇を退治すべき天の使命を、陛下は立派にお遂げ遊ばすこと、存じます。我々露西亞人だけは必ず無辜の血を贖はなければなりません。……一體わたくし共は誰に望を掛けたら宜しいのでせう、一つお訊ねし度いものでございます……あの商人根性の英吉利は、我がアレクサンドル皇帝の高遠なお志を、多分理解しないでせう、いえ理解する事が出來ないでございませう。英吉利はマルタ島から撤兵する事を拒みましたが、つまり我國の行動に隱れた底意を見附けようとして、探りを入れてゐるのでございます。まあ一體イギリスはノヴシーリツェフに何と申しました？……何にも申しません。御自分の爲めに何物も望まれないで、只々世界の福祉のみをお希ひ遊ばす、我が皇帝陛下の獻身的な精神を、悟る事が出來なかつたのです、いえ今でも出來ないのでございます。それに英吉利は何を約束しましたでせう？　何にも致しません。たとへ約束したにしても、實行などする事ではございません！　普魯西亞はもう到底もボナパルトを征服する事は出來ない、歐羅巴全體かゝつて行つても、何一つ仕出かす譯に行かないと宣言致しました……わたくしはハルデンベルグ（公爵、プロシヤの政治家一七五〇―一八二二）やガウギッツ（伯爵、同上一七五二―一八三二）

のいふことなんか、一言だつて本當にしやしません。Cette fameuse neutralité prussienne, ce n'est qu' un piège.（あの喧ましいプロシヤの中立なんぞは只の陷穽に過ぎませんわ）。わたくしの信じるのは只神樣と、そして我皇帝陛下の高大な御運命ばかりでございます。陛下は屹度歐羅巴を救つて下さいます？・・・』

アンナは突然自分で自分の熱中した事を、嘲けるやうな微笑を浮べながら、言葉を切つた。

『わたしの考へでは、』と公爵はほゝ笑み乍ら『若しあなたがあの愛すべきギンツェンゲローデ（ウエストフアリヤの男爵ロシヤの將軍一七七〇―一八一五）の代りに出掛けて行かれたら、無理にも普魯西亞王の盟約を得なすつたでせう。あなたは實に雄辯ですからね。時にお茶を一杯頂けませんか？』

『たゞ今。A propos（ですが時に）』彼女は再び落ち着き乍ら言ひ足した。『今日私共へ大變面白い方が二人お見えになります。一人はモルテマール子爵といつて、ロハン家を通じてモンモランシイ家（フランスの名族）と親戚に當りますの。佛蘭西でも名家の方なんでございます。亡命客の中でも隨分立派な人で、本當の意味の亡命客ですの。それからモリヨ憎正。あなたあの名知識を御存じでゐらつしやいますか？　あの方は皇帝の拜謁を許されましてすよ。御存じでゐらつしやいますか？』

『はゝあ！　それは大變愉快ですね。』と公爵が言つた。『時に一寸お伺ひしますが、』と彼はたつた今何やら想ひ出したやうに、妙に碎けた調子で附け足した。其の癖今彼の訊ねようとしてゐる事が、今日の訪問の重なる目的なのであつた。『あれは本當の事ですか、皇太后がフンケ男爵を、維

納の一等書記に任命なさるお考だといふのは？　C'est un pauvre sire, ce baron, à cequ 'il parait（あれは何も能の無い男らしいですね、あの男爵は）』

ヴシーリイ公爵は目下人々がマリヤ皇太后を通して、フンケ男爵を推薦しようと努めてゐる此の位置に、自分の息子を坐らせ度かつたのである。

アンナ・シェーレルは目を閉ぢた。それは敢て自分ばかりでなく誰一人として、皇太后陛下のお心に適ふ事を、論らふ譯に行かぬといふ意味なのである。

『フンケ男爵は姉宮殿下から皇后陛下に推薦されたお方でございますからね。』と彼女は沈んだそゝけない調子で、僅かにかう言つたばかりである。

アンナが皇后陛下の名を言つた時、彼女の顏は俄かに深い僞りならぬ信服と、尊敬の表情を示したが、その表情には一種の憂愁が交つて居た。それは彼女が談話の際に、自分の高貴なる保護者の事を口にする時、いつも決つて出す癖なのであつた。彼女は國母陛下がフンケ男爵に、多くの尊敬を拂ひ給へる由を語つたが、其の眼ざしは又もや憂ひの雲に蔽はれた。

公爵は無關心な態度で默つてゐた。アンナは皇后陛下に推薦された人に對して、あゝいふ大膽な批評を敢てしたヴシーリイ公爵を輕くたしなめもし、又同時に慰めてもやり度くなつたので、彼女獨特の女らしい、而も宮廷式に巧妙で機敏な技巧を振ひ乍ら、

『Mais à propos de votre famille（ときにあなたの御家族の事でございますね）』と彼女は言つた。『御存じでもありませうが、お宅のお孃さまは社交界へ出るやうにおなんなすつてから、社交界の感嘆の的になつてお了ひになりました。みんなお孃さまの事を太陽より美しいと申してゐます。』

公爵は尊敬と感謝の心を見せて會釋した。

『わたくしよくさう思ひますの、』束の間の沈默の後に、アンナは公爵の方へ摺り寄つて言葉を續けた。其の優しいほゝ笑みの中には、もう政治や社交界の話は終つたから、これからしんみりした打明け話を始めませう、といつた風な調子が見えた。『わたくしよくさう思ふのでございますが、人生の幸福といふものは何うかすると、大變不公平に頒たれるものでございますね。何の爲めに運命はあゝした立派なお子さんを二人迄、あなたに授けたのでございませう？——尤も弟のアナトーリさんは別ですの、わたくしあの人を好きません（と彼女は眉を上げて容赦なく附け加へた。）——本當にあのお二人は立派なお子でございます。それだのにあなたは、あの方達の値打を認めてお上げにならないんですもの、あなたはあの方達の親たる資格がお有んなさらない。』

彼女は持前の勝誇つた樣な微笑を浮べた。

『Que voulez vous？（何うしろと仰有るんですか？）ラファテル（ヨハン・カスパル、瑞西の文學者にして傳道者、一七四一—一八〇一、オと德の力を以てマリヤ皇太后の崇拜を贏ち得たり）なら、我に父の愛てふ瘤なし、とでも言ふ所でせうな。』公爵はかう言つた。

『冗談は止して下さいまし。わたくしは眞面目にあなたと、お話し度いと存じてゐるのでございますが、（彼女の顏は沈んだ表情を帶びて來た。）アナトーリさんの噂は皇太后樣のお耳にも入りまして、みんなあなたを氣の毒がつて居られますよ：：：』

公爵は答へなかつた。アンナは無言の儘意味ありげに對手を眺め乍ら、答を待つた。ヴシーリイ公爵は顏をしかめた。

『一體何うすればあなたのお氣に入るんです！』到頭彼は言ひ出した。『わたしがあれ達の敎育の爲めに、父として出來るだけの事を盡したのは、あなたもよく御存じでせう。ところが二人とも de imbeciles（馬鹿）に出來上つて了つたのです。イッポリトの方は少くとも柔順しい馬鹿ですが、アナトーリは亂暴な馬鹿者です。違ふのはそれ切りです。』いつもより餘計不自然に、元氣のい、微笑を浮べ乍らかう言つたが、其の時何かしら思ひ掛けなく粗野で不愉快な或物が、口の邊りに疊つた皺の中に特に鋭く現れた。

『何うしてあなた見たいな方に、お子さんが出來るんでせうねえ？　若しあなたがお父さまでゐらつしやらなかつたら、わたくし何一つあなたを非難する事は出來なかつたでせうに。』とアンナは物思はしげに瞳を上げ乍ら言つた。

『わたしはあなたの忠實なる奴隷です。あなた一人だけは打ち明けてお話が出來ます、わたしの子供等は――les entraves de mon existence(わたしの存在の重荷です)。わたしの十字架です。わたしはかう自分に說明してゐます……一體何うしろと仰しやるのです。』

彼は慘酷な運命に對する諦めを仕方で示し乍ら、暫く言葉を切つた。アンナは一寸考へ込んでゐたが、『あなたはあの不身持なアナトーリさんを結婚させようとは、今迄一度もお考へになりませんでしたか？　人はよく、』と彼女は言つた。『老孃(オールドミス)は人を結婚させ度がるのが病ひだと申しますね。わたくしはそんな弱點を自分は感じませんけれど、丁度わたくしの心當りに一人可愛い娘さんがゐましてね、お父さまと一緒に不仕合せな日を送つてゐますの。わたくし共の親戚に當るボルコンスキィ公爵の令孃なんですの。』

ワシーリィ公爵は答へなかつた。とは言へ、世馴れた人々に獨特の敏活な想像と記憶を以て、只頭を一寸動かしただけで、此の報告を參考として取り入れたといふ事を現した。

『あなたは御存じないかも知れませんが、あのアナトーリには年四萬留(ルーブリ)からかゝります。』彼は悲しい思想の流れを止める力が無い樣子でかう言つた。彼は暫く言葉を切つた。『若しこの儘で行つたら、五年後には何うなる事でせう？　Voila l'avantage d'être pére (親たるの利益はこれ位のものです)。C其の人は金持ですか、その公爵令孃は？』

『お父さんは非常に金持でそして吝嗇漢(けちんぼ)でございますの。今田舍に住んでゐますが、御存じでございませう、あの有名なボルコンスキィ公爵を？　もう先帝の時分から退職になつて、普魯西亞王など、譯名を唱はれた人ですの。大變賢い人ですけれど、奇妙な癖の多い重苦しい人でございます。La pauvre petite est malheureuse comme les pierres. (可哀想な娘さんは石の樣に不仕合せです)。此の令孃の兄さんは、ほら、此の間リーザ・マイネンと結婚したクトゥゾフ將軍(有名なる大元帥一七四五―一八一三)の副官でございますの。此の人も今日わたくし共へお見えになる筈でございます。』

『Ecouter chère Annette (ねえ、親愛なるアンネットさん。)』と不意に對手の手を取つて、何故かそれを下の方へ引つ張り乍ら、公爵はかう言つた。『何卒此の話を纏めて下さい、そしたらわたしは永久にあなたのエールヌイ・ラーブ(忠實なる奴隷)になります。尤もわたしの領地の百姓頭が報告を書く時には、何時でもラーブですがね。あの方なら生れも立派だし、お金も十分にあるし、わたしに必要な條件をすつかり備へて居るんですからね。』

かう言つて公爵は彼の持色たる自由な、馴々しい、而も優美な身振でアンナの手を取つて接吻し、安樂椅子に身を投げ掛けるやうに坐り乍ら、そつぽを向いて女官の手を輕く振るのであつた。

『Attendez (待つてください)』何やら思ひ廻らしつゝ、アンナはかう言つた。『わたくし今夜にも直ぐリーザさん、la femme du jeune Bolkonsky (ボルコンスキイの若夫人) に話して見ませう。多分巧く纏るだらうと存

じます。一つあなたのご家庭を草紙にして、オールド、ミスの仕事を修行致しませう。』

二

アンナ・シエーレルの客間は次第に客で一杯になつて來た。年齢性質こそ異にしてゐるが、共に住む社會を同じうした彼得堡の上流の人々が、續々と車を乘り附けて來た。ヴシーリイ公爵の令孃なる美人エレンもやつて來た。彼女は父を誘つて、共に英國公使の祝宴へ赴く爲めに立ち寄つたので、皇后陛下の頭文字を組合せた飾を附け、夜會服を身に纏うてゐる。それから又 la femme la plus seduisante de Petersbourg（ペテルブルグ一番のチヤーミングな婦人）として知られてゐる、若い小柄のボルコンスキイ公爵夫人も來た。これは昨年の冬嫁いだばかりであるが、今紙振中なので立派な社交の席へは出なかつたけれど、一寸した夜會には未だ顏を出してゐた。やがてヴシーリイ公爵の長男イツポリート公爵が、モルテマール子爵を連れて來て、一座に紹介した。續いてモリオ僧正その他多くの人がやつて來た。

『皆さんは未だ私の伯母（マフタント）にお會ひになつた事はございませんか、お近附ではございませんか？』

アンナは入つて來る客人達にかう言つて、大きなリボンを附けた小柄の老婆の方へ、大眞面目で連れて行つた。此の老婆は客人達が次第に集まり初めた頃、次の間からよろ〳〵と出て來たので

ある。アンナは來客の名を一々呼び上げて、靜かに客人から『私の伯母（マフタント）』の方へと視線を轉じた後、其の場を去つて他（ほか）の人達の所へ行つた。

客人達は誰一人として知る者もなければ、又興味も必要もない此の伯母さんに對して、みんな式（かた）の如く挨拶の言葉を陳べなければならなかつた。アンナは沈んだやうな、勝ち誇つたやうな興味を以て、無言の儘機嫌よく此の挨拶を見守つてゐた。『私の伯母（マフタント）』はすべての人に向つて、少しの相違もない同じ文句で、對手の健康や自分の健康の事から、此の頃難有い事に善い方へ向はれた、皇太后樣の健康のことなどを話した。此處へ連れて來られたものは、悉く禮儀を重んじる爲めに、勇み立つた樣子こそ見せないが、苦しい義務を果してほつとしたやうな氣持で、此の老婆の傍を離れるのであつた。そして今度もう二度と再び、此の人の傍へ近附いては來なかつた。

ボルコンスキイ公爵の若夫人は、金で刺繍をした天鵞絨の袋に、編物の仕事を入れて持つて來た。薄い髭で稍黝ずんで見える可愛い上脣は、短くて齒とすれ〳〵であつたが、その脣が一寸開いたり、又何うかして伸び加減になつて下脣まで下るのが、却つて一層あどけなく見えるのであつた。非常に愛らしい女性にはよくある事だが、上脣が短くて口が半ば開いてゐるといふ彼女の缺點が、却つて一種特別な獨特の美點のやうに感じられた。かうして自分の身重な體を苦にする樣子もない、健康と活氣に充ちた未來の母親を眺めてゐると、誰でもみんな愉快な氣分になつて

來た。彼女を眺めてゐる老人連や、退屈さうに浮かぬ顏をしてゐる若い人達は、暫く此の人と同坐して話してゐる中に、自分迄が此の人に似て來るやうな氣がした、此の若い公爵夫人と話をして、其の一言々々に輝く微笑みや、絶えずちら〳〵現れる白い齒並を見た者は、自分が此の時取り分け愛嬌のある人間になつたやうな氣がした。而も一人々々皆さう考へるのであつた。

小柄な公爵夫人は仕事の袋を手にした儘、體を搖ぶるやうにし乍ら、小刻みな足取りで卓(テーブル)を一廻りして、樂しげに着物の襞を正しつゝ、銀製の湯沸(サモヴール)の傍らなる長椅子に着いた。それはまるで自分のする事は何んな事であらうとも、みんな自分に取つても又傍の人に取つても、partie de plaisir（樂しみの一部）になると言つたやうな風附であつた。

『J'ai apporte mon ouvrage（わたくしお仕事を持つて參りましたの）』彼女は袋を擴げながら、一時(いつと)に皆の者に向つてかう言つた。

『ねえアンネットさん、わたくしに悪い洒落をしないで下さいましな。』と今度は女主人に話し掛けた。『あなたが本當に一寸した夜會だと書いてお寄越しなさるものですから、わたくしこんな粗末な服裝(なり)をして參りましたわ。』

と彼女は兩手を擴げて、胸の少し下の邊を廣いリボンで縛つた、レースの澤山ついた優美な鼠色の服を示した。

『Soyez tranquille, Lise, vous serez toujours la plus jolie（御心配なさいますな、リイズさん、あなたは何時でも一番お綺麗でゐらつしやいますよ）』とアンナは答へた。

『あなたは御存じでゐらつしやいますか、主人はわたしを捨て、行かうとしてゐますの。』彼女は依然たる調子で或る將軍に向いてかう言つた。『主人は死に、行かうとしてゐるのでございます、ねえあなた、一體何の爲めにあんな厭な戰爭が始つたのでせう。』と今度はヴシーリイ公爵に話し掛けて、答も待たずに美人の公爵令孃エレンの方へ向いた。

『何といふ美しい方でせう、この小さな公爵夫人は！』とヴシーリイ公爵は低い聲でアンナに言つた。

小柄な公爵夫人が來てから間もなく、よく肥えた堂々たる若い男がはいつて來た。頭を短く刈り込んで眼鏡を掛け、當時流行した薄い色の洋袴(ズボン)に、頸飾(ネクタイ)を大きく結び、鳶色の燕尾服を着込んでゐた。此の肥つた青年は今莫斯科で瀕死の床にあるベズーホフ伯爵——有名なエカチェリーナ女帝時代の貴族の庶子ピエール（ピヨートルの佛國風の呼び方）である。彼はこれ迄何處にも奉職した事がなく、始終外國で教育を受けてゐたが、つい先頃歸朝した許りで、交際社會に顏を出すのは今が初めてであつた。アンナは自分の客間の中でも、一番低い階級の人に使ふ會釋を以て此の青年を迎へた。併し彼女一流の分類で粗末な迎へ方をしたにも拘らず、入り來るピエールの姿を見ると均しく、ア

ンナの顔には不安と恐怖の陰が浮んだ。それは何か非常に大きな、場所柄に不似合な物を見付けた時、よく人が顔色に出すやうな表情に似通つてゐた。事實ピエールは此の部屋に居合す男連中より、幾分大柄な方であつたけれど、此の恐怖は只々その悧口さうな、同時に臆病らしい、ぢつと觀察するやうな、極めて自然な眼附に起因したのかも知れぬ。全く此の眼附こそ客間に於ける他の人達と彼とを分つ、最も著しい相違點であつた。

『ピエールさん、よくこそまあ御深切に此の病人を訊ねて下さいました。』アンナは彼を伯母の傍へ連れて來て、ぴつくりしたやうな顔附で伯母に目交ぜをし乍ら、かう言つた。

ピエールは何やら分らない事を口の中でぶつ〳〵言つたが、矢張り何か探し出さうとするやうに目を働かしてゐた。彼は小柄な公爵夫人に會釋したが、まるで近しい知人でもあるやうに、嬉しく愉快さうににつこりした。それから彼は伯母さんの方へ近寄つた。が果してアンナの心配は故ない事でなかつた。伯母さんが皇太后樣の健康を了ひ迄言ひ終らぬ中に、ピエールは不意に其處を離れて了つた。アンナはぴつくりしたやうに話し掛けた。

『あなたはモリオ僧正を御存じですか？　あの方は大變面白い人でございますよ……』

『え、僕はあの人の永久平和策といふのを聞きました。大變面白いものですが、併しさあ果して……』

『さうお考へになりますか？』とアンナは言つた。それは只申譯に何か言つて置いて、更に夜會の主人としての務めに就かんが爲めであつた。

併しピエールは前とは反對の無作法を演じた。先には對手の話を終ひまで聞かずに行つて了つたが、今度は對手が他へ行かなければならない時に、自分の方から話し掛けて引き留めたのである。彼は首を曲げ兩足を大きく擴げ乍ら、何故僧正の考を單なる空想と見做すか、といふ事をアンナに說明し始めた。

『又後程お話し致しませう。』アンナはほゝ笑み乍らかう言つた。

生活を知らぬ青年を體よく振り放して、彼女は主人役としての務めに戻つた。そして絕えず耳を聳てたり邊りを見廻したりし乍ら、何時でも會話の調子の弛んだ所へ、助力を與へるやうに心構へしてゐた。それは丁度紡績工場の主人が職工をそれ〴〵位置に着かして、場内を歩き廻つてゐるやうな工合であつた。機械の運行が止つたのや、聞き馴れぬ騷々しい紡錘の軋みに氣がつくと、急いで其の方へ行つて機械を止めたり、或は尋常な運動に戻したりする。丁度そんな風にアンナは客間の中を歩き廻り乍ら、妙に默り込んだ所や又は餘り話の多過ぎるサークルに近寄つて、一寸一口言葉を挾むか、それとも席を入れ替へるかして、再び調子正しく作法に適つたやうに、會話の機械を運轉させるのであつた。併しかういふ氣配りの間にも、彼女の額には矢張りピエー

ルに對する不安の色が讀まれた。彼がモルテマール子爵の周りで交換されてゐる談話を聞きに立ち寄つて、又更に僧正が何やら話してゐる方へ去つた時、アンナは心配さうに其の樣子を見守つてゐた。外國で人となつたピエールに取つて此のアンナの夜會は、彼が露西亞で見た最初の交際社會であつた。此處に彼得堡の全知識階級が集つてゐる、といふ事は彼も知つて居た。彼の眼は玩具屋に立つた子供のやうに、絶えずきよろ〳〵してゐた。彼は氣を附けてさへゐれば聞く事の出來る高尚な談話を、ひよつと聞き落しはせぬかと始終心配なのであつた。此の席に集つた人々の自信ありげな、優雅な顔附を見守り乍ら、彼は何か賢明な意見を絶えず期待してゐた。遂に彼はモリオの傍へ近附いた。話の樣子が面白さうだつたので、彼は其處に足を止めて、すべて若い人の癖として、自分の思想を發表する機會を待つてゐた。

三

アンナ・シェーレルの夜會は運轉を初めた。紡錘はあらゆる方面で規則正しく、止み間なしに音を立てた。マア・タントの傍には只一人頰の削けた、泣き出しさうな顔附をした、可成りな年配の婦人が坐つてゐたが、此のきらびやかな席には少々不釣合であつた。此の二人を除けて一座は三組に分れてゐた。比較的男の多い組では僧正が中心となつてゐるし、又若い人達の集つた組にはヴシーリイ公爵の令孃エレンと、艶やかで血色のいゝ、年の若い割に少し肥り過ぎた、ボルコンスキイ公爵の若夫人が交つてゐるし、第三の組にはモルテマール子爵とアンナ・シェーレルがはいつて居た。

子爵は愛くるしい顔をした擧動のしとやかな青年であつた。見受けたところ明らかに、自分は名士だと確信してゐるらしかつたが、同席の人に柔順しく利用されるだけの、上品な躾けを受けてゐた。アンナは又此の人を來客に對する饗應にしよう、とかう考へてゐるらしかつた。腕の優れた膳部長は、汚い厨で見たらとても食べる氣にならぬやうな牛肉の一片を、まるで超自然なほど見事なものにして膳へ進めるものである。それと同じく此の夜會でも、アンナ・シェーレルは最初子爵を、次に僧正を何か超自然に都雅な物として、客人達にすゝめるのであつた。モルテマールの組では直ぐにエンギエン侯爵の殺害事件が話題に上つた。エンギエン侯爵は彼自身の任俠心の爲めに死んだので、又ボナパルテの恣慾には特殊な原因があつたのだ、などゝ子爵は語つた。

『Ah! voyons! Contez-nous cela, viccomte』(あゝ! さうですか、子爵、それを何うぞお聞かせ下さい) とアンナは言つた。彼女は此の文句が、何か路易十五世時代の感じを持つてゐる樣な氣がして嬉しかつたのである。『何うぞそれをお聞かせ下さい。』

子爵は承諾のしるしに會釋をして、愛想よく微笑した。アンナは子爵の周りに一つの組を作つ

て、彼の話を聞くやうにと人々を誘づた。

『子爵は個人としてあの侯爵にお近附だつたのでございます』とアンナは一人の者に囁いた。そして、『子爵は全くお話上手でゐらつしやいます』と又一人に言つた。『ね立派な社會のお方だといふ事がよく分りますでせう』と今一人の人にかう言つた。かくして子爵は、青物をあしらつて熱い皿に載せたローストビーフのやうに、此の上もなく都雅な而も有利な光に照されて、一座の膳に上されたのである。

子爵はもう話を初めようとして、華奢な微笑を洩らした。

『此方へいらつしやいませんか・シエル・エレン』別な一組の中心となつて離れた所に座つてゐる・美しい公爵令嬢に向つてアンナはかう言つた。

エレンはにつこり笑つた。彼女は入つた時と同じやうに、飛び放れて美しい女の常として、始終變らぬ微笑を含んで立ち上つた。常春藤や苔などで飾つた、長い尾のついた白い夜會服をさらさらと鳴らしつゝ、肩の白さ、髪や金剛石の輝きを目立たせ乍ら、彼女は左右に道を讓る男達の間を分けて、眞直に進んで來た。特に誰に目を注ぐでもなく、すべての者に一樣にほゝ笑み掛け乍ら、恰も自分の姿——丸つちい肩や、當時の流行で思ひ切つて擴げた胸や脊中の美しさを、十分に眺める特權を各々に與へるものの如く、夜會の光輝を一身に集めて運び乍ら、彼女はアンナの

方へ近寄つた。エレンの樣子に媚を賣るやうな表情は陰ほども無く、寧ろ反對に人の心を征服し盡すやうな、餘りにも烈しい力を持つた自分の水際立つた美しさに、幾分氣が退けるらしかつた。それ程彼女は美しかつた。彼女は自分の美貌の作用を減じ度くても、それが出來ないと言つたやうな風であつた。

『Quelle belle personne!』(何て美しい人だらう)と彼女を見た人は屹度かう言つた。エレンが子爵の前に腰を下して、例の常に變る事なきほゝ笑を以て彼を照した時、子爵は何か異常な物に打たれやうに、兩の肩をすくめて眼を落した。

『マダム、わたしはかういふ聽手の前に出ると、全く自分の技倆が心配になりすま。』と彼は微笑し乍ら首を傾けてかう言つた。

エレンは露はな肥えた手を卓についた儘、別に何か言はうともしなかつた。彼女は只ほゝ笑み乍ら話の始りを待つてゐた。物語りの間中彼女は眞直に座つたまま、卓に押し附けて形の變つた、肥えた美しい自分の手を時々見詰めたり、又それより一層美しい胸を眺めて金剛石の頸飾を直したり、幾度も着物の襞を正したりした。そして物語が一座に感動を與へた時にはアンナの顔を見て、直ぐにそれと同じ表情を自分の顔に取つて附けた。それから安心して輝くやうなほゝ笑を漲らすのであつた。

エレンに續いて小柄な公爵夫人も茶の卓から移つて來た。

『Attendez moi, je vois prendre mon ouverage』（待つて下さいまし、わたくし今仕事を取つて參りますから）と言つて、『あなた何を考へてゐらつしやいますの？　わたくしの手提袋（リチュール）を持つて來て下さいませんか。』彼女はイッポリート公爵に向つてかう言つた。

公爵夫人は一同に向つてほゝ笑んだり、話し掛けたりしてゐる中に、不意に席の轉換をして了つた。そして座に着くと樂しげに居ずまゐを直した。

『さあこれでよくなりました。』とかう言つて話を始めるやうに頼みながら、仕事に懸つた。

イッポリート公爵は手提袋（リチュール）を持つて來て、夫人に續いて席を變へ、安樂椅子を夫人の傍近く引き寄せて腰を下した。

Le charmant Hyppolite（愛す可きイッポリート）は驚くばかり美しい妹とよく似てゐたが、それよりも猶不思議に思はれたのは、非常に似てゐる癖に恐しく容貌が惡いといふ事であつた。顏の道具は妹とすつかり同じであるが、妹の方はすべてが生を樂しむやうな、自足した、若々しい、何時も變りのない生き〳〵した微笑と、それから竝々ならぬ古代的（アンチック）な肉體美とに照し出されてゐる。所が兄の方はそれと正反對に、同じ顏立が愚鈍の霧に藏はれて、何時も思ひ上つたやうな氣むづかしい表情を呈して居るし、それに體も瘠せて弱々しかつた。目も鼻も口も、みんな一つ所に抓み寄せ

られて、漠とした退屈さうな顰みつ面となつて、手足は常に不自然な位置におかれてあつた。

『それは幽靈の話ぢやありませんか。』公爵夫人の傍へ坐つて、まるで此の道具がなくては話を始める事が出來ないかのやうに、柄の付いた眼鏡を目の邊へ押しあて乍ら、イッポリートはかう言つた。

『Mais non, mon cher（決してそんな事ぢやありません）』子爵はびつくりして肩を縮め乍らかう言つた。

『つまりわたくしは幽靈の話が大嫌ひだつてことなんですよ。』と彼は言つた。其の調子はまるでこの言葉を言つて了つてから、初めて其の意味を了解した、とでもいふやうな風であつた。

その思ひ上つた調子の爲めに、彼の言つた事が非常に氣が利いてるのか、それとも非常に馬鹿けてゐるのか、誰にも想像が附かなかつた。彼は暗綠色の燕尾服を着て、彼の所謂 Cuisse de nymphe effrayée（怯かされた水精の腿）色をした洋袴（ズボン）に長い靴下、それに小さな靴を穿いて居た。

子爵（ヒコント）は當時行はれた次の逸話を、非常に面白く物語つた。エンギエン侯爵（ブルボン朝の皇族、一七七二—一八〇四、ナポレオン謀殺の嫌疑を受け、銃刑に處せらる）はジョルジ孃と會ふ爲めに巴里へ微行でやつて來て、其處で兼々同じく此の有名な女優の情に預つてゐた、ボナパルトと出會つた。ナポレオンは偶然此の時持病の卒到で人事不省になつた。侯爵は思ひ掛けなく戀仇の生殺與奪の權を得たが、それを利用しようとしなかつた。然るにボナパルトは後に此の義俠に對して、死を以て侯爵に報いたのである。

物語は實に氣が利いて興味深かつた。殊に二人の競爭者が不意に互の顏を見分ける邊が、何とも言へぬ程よかつた。婦人達は昂奮したらしい樣子である。

『Charment』(ようこさい)と、アンナは促すやうに小柄な公爵夫人を見乍らかう言つた。

『Charment』(ようこさい)と、小柄な公爵夫人は針を編物に突き刺しながら呟いた。その樣子は丁度物語の面白さ美しさが、仕事の續きを妨げるといふやうな風附であつた。

子爵はこの言葉少ない賞讃の價値を知つて、感謝するやうに微笑しつつ話を進めた。併しアンナは自分に取つて恐しい靑年を始終注視してゐたが、ふと彼が僧正を對手に何やら熱心に、大きな聲で話してゐるのに氣が附くと、此の危險な場所へ救助に急いだ。全くピエールは政治上の權力平均について、僧正と談話を交換することに成功したのである。僧正は靑年の朴直な熱心に興味を感じたものと見えて、自分の得意な思想を披瀝し始めた。二人の者が餘りに元氣よく、餘りに自然な調子で話し合つてゐるのが、アンナの氣に入らなかつたのである。

『方法は歐羅巴の權力平均と國際公法です。』と僧正は言つた。『それは只露西亞のやうな實力のある、野蠻(バーバリズム)を以て聞えてゐる國が、何等の私慾も抱かずに、全歐羅巴の勢力平衡を目的とする同盟の、盟主になりさへすれば澤山です――それで露西亞は世界を救ふ事が出來ます。』

『一體あなたは何處にそんな勢力の均衡を發見なさるお積りです？』

併し此の時アンナが近寄つて、嚴しい眼附でピエールを睨んでから、伊太利の僧に向つて、何んな風にして此處の氣候を凌いでゐるかと訊ねた。伊太利の僧の顏は急に變つて、人を馬鹿にしたやうな、わざとらしく甘つたるい表情を帶びて來た。それは彼が女と話すときの癖らしい。

『わたしは幸にも、かうして出入さして頂いてゐる社交界の人達の――殊に御婦人方の勝れた知識と教育に、すつかり感心させられて了ひましたので、未だ氣候の事など考へる暇がありませんでした。』と答へた。

もうアンナはピエールと僧正を手放さないで、監視の便宜上皆と一緒の組に入れて了つた。

四

此の時一人の新しい顏が客間へ入つて來た。此の新顏の人はボルコンスキイ家の若公爵アンドレイ、卽ち小柄な公爵夫人の良人であつた。ボルコンスキイ公爵は餘り脊の大きくない、極めて美しい靑年であつたが、顏の表情は固まつて乾き切つてゐた。その疲れた退屈らしい眼附から、靜かな規則正しい足取りに至る迄、彼の體つきの一切が快活で小柄な夫人に比べて、烈しい對照(コントラスト)を呈してゐる。見たところ此の客間にゐるすべての人が、彼に取つて知り合であるばかりでなく、顏を見るのも聲を聞くも厭な程飽々してゐるらしい。其の厭な顏の中でも取り分け自分の可愛い

妻の顔に、一番飽々してゐるやうに見受けられた。彼はあたら其の美しさを害ふ顰み顔をして、夫人を避けるやうに外方を向いて了つた。そしてアンナ・シェーレルの手を接吻して、目を細め乍ら一座を見廻した。

『Vous vous enrôlez pour la guerre, mon prince? (公爵、あなたは戰爭へいらつしやるお積りなんですの)』とアンナが言つた。

『ル・ゼネラル・クトゥゾーフ』とボルコンスキイは佛蘭西人のやうに力點を語尾に附け乍ら、『クトゥゾフ將軍がわたしを副官にし度いと仰しやるものですから。』

『Et Lise, votre femme? (ちやりイズさんは、奥樣は?)』

『あれは田舍へ行きます。』

『まあ、あなたはあの立派な奥樣を、わたし達から奪つて了ふなんて、本當に罪でございますよ!』

『アンドレイ、』リーザ夫人は他の人に對すると同じ媚びるやうな調子で、かう良人を呼び掛けた。『今子爵がジョルジ孃とボルナバルトの事で、面白い話をして下すつたんですよ!』

アンドレイ公爵は眉をひそめてわきを向いた。ピエールはアンドレイ公爵が客間へ入つた時から、嬉しく懐しさうな眼を放さなかつたが、此のとき近附いて彼の手を取つた。アンドレイ公爵は振り返らうともせずに、自分の手を觸つたりする者に對する忌々しさを、顰めた顔に現したが、

ふとピエールのにこ〳〵顔を見ると、思ひも寄らず人の好い快げな微笑を浮べた。

『やあこれは!....君も到頭社交界へ出たのかい?』彼はピエールに向つてかう言つた。

『僕はあなたが來られる事を知つてたもんですから。』とピエールは答へた。『僕あなたの所へ晩餐に行きますよ。』矢張り物語りを續けてゐる子爵の邪魔をせぬやうに、小さな聲で彼はかう附け加へた。『いいですか?』

『いや、いけません。』とアンドレイ公爵は笑ひ乍ら言つたが、じつとピエールの手を握り緊めて、そんな事を聞くには當らないといふ意を知らせた。

彼は未だ何か言はうとしたが、此の時ヴシーリィ公爵が令孃と共に立ち上つた。すると二人の青年が道を讓る可く席を立つた。

『あなた何うぞお許し下さい、子爵。』と公爵は愛想よくこの佛蘭西人に言つて、立たないで呉れといふやうに其の袖を下の方へ引いた。『何うも折惡しく公使の祝宴が有るものですから、わたしも折角の興は醒すしお話の腰は折るし....わたしはお宅の面白い夜會を棄てゝ行くのが實に殘念なのですよ。』彼はアンナにかう言つた。

令孃のエレンは着物の襞をちよいと抓んで椅子の間を歩いた。ほゝ笑みは更に明るくその美しい顔に輝いた。ピエールは殆どびつくりしたやうな歡喜に溢れた眼附で、傍らを通り過ぎる此の

美人を眺めた。

『實にいゝ。』とアンドレイ公爵が言つた。

『全くね。』とピエールも言つた。

ヴシーリイ公爵は通りすがりにピエールの手を取つてアンナに向ひ、

『わたしの爲めに此の熊を教育して下さい。もう一月からわたしの所に居るんですが、かうして交際社界で會ふのは始めてです。いや、若い男に取つて賢い御婦人方にお附合を願ふ程、ためになる事はありません。』

アンナはほゝ笑んでピエールの面倒を見るやうに誓つた。彼女は此の青年が父方の關係で、ヴシーリイ公爵の親戚に當る事を承知して居た。以前『私の伯母』の傍に坐つてゐた年配の婦人は、忙しげに立ち上つて、控室でヴシーリイ公爵に追ひついた。彼女の顔からは、以前の故意とらしい興味の表情は消え去つた。人の好い、泣き出しさうな顔は、たゞ不安と恐怖を現はすのみであつた。

『公爵、うちのボリースの事は何うなりましてございませう?』と彼女は言つた。(ボリースといふ名を發音する時『ボ』の字に特殊な力點を附けた)。『わたくしはもう此の上彼得堡に居る事が出來ません。あの可哀さうな子に、何んな知らせを持つて歸つて遣れるのでございませう?』

ヴシーリイ公爵が厭々さうに、殆ど失禮な位の態度で老婦人の言葉を聞き乍ら、自烈たさうな心持を見せ付けるにも拘らず、老婦人は愛想のいゝ、對手を感動させるやうな微笑を浮べつゝ、歸つて了はれない用心に公爵の手を取つた。

『たつた一言陛下に申し上げて下さるのが、あなたに取つて何れだけのお骨折でございませう。それだけであの子は近衛へ廻されるのでございます。』と頼むのであつた。

『いや全くの所公爵夫人、わたしは出來るだけの事をします。』とヴシーリイ公爵は答へた。『併しわたしから皇帝にお願ひするのは困難ですから、いつそゴリーツィン公爵を通して、ルミャーンツォフに頼んで御覽になつたら如何でせう。寧ろその方が利口でせう。』

此の老婦人はドルベツカーヤ公爵夫人といつて、露西亞でも名門の中に數へられる家の姓を名乘つてゐたが、すつかり零落して交際社會からも出て了ふし、以前のひきも失くして了つた。今度彼女は自分の一人息子を、近衛へ入れるやうに運動する爲め、わざ〳〵やつて來たのである。唯々ヴシーリイ公爵に會ひ度いがために、彼女は招待もないアンナの夜會へ押し掛けて來て、子爵の物語を傾聽してゐたのである。彼女はヴシーリイ公爵の言葉を聞いてぎくりとした。曾ては美しかつた彼女の顔が、俄に怒りの色を表はしたが、それも只の一瞬間であつた。彼女は又ほゝ笑んで、更に強く公爵の手を握つた。

『まあお聞き下さいまし、公爵。』と彼女は言つた。『わたくしは今迄一度もあなたに御無心申した事もありませんし、今後も決して申しますまい、又是迄とても、あなたに對する父の友誼など一度だつて口に出した事はございません。併し今といふ今こそ、わたくしは神樣にかけてあなたにお願ひします。何うか息子の爲めに此の願を叶へて下さいまし。わたくしはあなたを恩人として崇めます。』と彼女は急き込んで附け足した。『いゝえ、あなた腹をお立てにならないで、わたくしに誓つて下さいまし。わたくしはゴリーツィンさまにもお願ひしたのですが、あの方は撥ね附けてお了ひになりました。Soyez le bon enfant que vous avez été（ね、何うぞ昔の樣ないゝお子さんになつて下さいまし）』彼女は强ひてほゝ笑まうとしたが、其の眼には涙が浮んでゐた。

『お父さま、遲れますよ。』戸口で待つてゐたエレンが、古代的な肩の上で美しい首を此方へ向け乍らかう言つた。

社會に於ける勢力は一種の資本であつて、無くせぬやう大切に保存しなければならぬ。ヴシーリィ公爵はそれを知つてゐた。若し乞はれる儘に多くの人達に代つて皇帝に哀願したなら、やがて自分の爲めに裁可を乞ふ事が出來なくなる、とかう思ひ定めた後、彼は極く稀にしか自分の勢力を使はなかつた。併しドルベツカーヤ公爵夫人の件に就ては、何か一種良心の咎めとでも言ふ可きものを感じた。彼女がそれとなく公爵に仄めかしたのは、本當の事であつた。彼の官吏生活

の第一歩は、夫人の父に負ふ所が多かつた。のみならず彼女の態度に依つて見ると、夫人は一旦かうと考へたら、其の希望を達しない中は何處迄も附き纏つて、若し事が叶はぬ場合には、毎日否一分毎に押し掛けて來て、果は一騒動持ち上げもし兼ねない典型の女――殊に母親の一人であると云ふことが分つた。此の一騒動云々の想像は遂に公爵を動かしたのである。

『親愛なるアンナ・ミハイロヴナ。』例の馴々しい厭々したやうな響を聲に含ませながら、彼はかう言つた。『あなたのお望みは私に取つて殆ど不可能な事です。併しわたしがあなたを愛し、且つ御尊父の記念を尊敬してゐる事を證明する爲めに、わたしは不可能を可能にします。御子息は必ず近衛に轉じられませう。これはわたしが誓ひませう。これでご滿足ですか？』

『ほんとにあなた、あなたはわたくしの恩人でございます！　わたくしはそれより他の御返事を伺はうとは存じませんでした。わたくしはあなたの深切なことをよく承知してゐました。』

公爵は立ち去らうとした。

『待つて下さい、もう一言：：Une fois passé gardes（今度近衛へ入れたら：）』と彼女はもじ〳〵した。『あなたはミハイル・イラリオーノヴィッチ・クトゥゾフとお心易いのでございますから、ボリースをあの方の副官に紹介して下さいませんか。さうしたらわたくしも安心でございます、さうしたらもう：』

ヴシーリィ公爵は微笑した。

『それは何うもお約束出來ませんね。あなた御存じないか知りませんが、クトゥゾフ將軍は總司令官になつてから、みんなの包圍攻撃を受けてるんですよ。將軍も自分でさう言つてます、莫斯科(クワ)の奥さん達がみんなで申し合して、自分の子供達を俺の副官に押し附けようとするつて。』

『いゝえ約束して下さいまし。わたくしお放ししませんよ、もし公爵、あなたはわたくしの命の親でございます…』

『お父さま、』とエレンは又例の調子で繰り返した。『遲れて了ひますよ。』

『では au revoir (又お目に掛りませう) 左樣なら。宜しうございますか?』

『それでは明日陛下に上奏して下さいますか?』

『是非共。併しクトゥゾフの方はお約束しませんよ。』

『いゝえ、誓つて下さい、バジイル(ワシーリイ佛蘭西讀み)』ドルベッカーヤ公爵夫人は若い娘のやうな媚に充ちたほゝ笑みを以て、彼の後からかう話し掛けた。そのほゝ笑も曾ては彼女にうつりがよかつたに相違ないが、今の痩せ衰へた顔には何うも不似合であつた。

察する所彼女は自分の年を忘れて、昔から癖になつてゐる女性の武器を使つたのであらう。けれども公爵が出て行くと同時に、其の顔は再び元のやうに冷やかな、わざとらしい表情を呈した。彼女は子爵が未だ物語を續けてゐる席へ戻つて來て、今は只立ち去る可き時が來るのを待ち兼ね

ながら、聞いてゐるやうな振をした。彼女の用事はこれで片附いたのだからである。

五

『けれどあの最近に演ぜられた du sacre de Milan (ミラン卽位式) の新しい喜劇を何うお考へでございますか?』とアンナ・シェーレルが言つた。『新しい喜劇といふのはかうなんですの、ジェスアとルッカの人民が、自分達の希望をボナパルト氏に述べると、ボナパルト氏は玉座に坐つた儘其の希望を充たしてやる。本當に難有い事でございますねえ! いゝえ、こんな話を聞くと氣が違ひさうでございますわ。ね、考へても御覽なさいまし、世界中の人がみんな狂氣(きちがひ)になつたのでございます。』

アンドレイ公爵は眞直にアンナの顔を見詰め乍ら、薄笑ひを洩した。

『Dieu me la donne, gare á qui la touche (神は我に王冠を與へたり、之に觸るゝ者は禍なり)』と彼はボナパルトが戴冠式の時に述べた言葉を引いた。『かう言つた時の彼の態度は實に立派だつたさうです。』と附け足したが、又更に今の言葉を伊太利語で繰り返した。『Dio mi la dona, gai a qui la tocca』

『J'espére enfin (つまりわたくしは)』とアンナは語を次いだ。『何うかこれがコップの水を溢れさす最後の一滴であればよいと思ひます。各國の元首もかうしてすべての物の安定を脅やかす人間を、もう

此の上勘忍する事が出來なくなりました。』

『Les souverains?（各國の元首ですつて?）』子爵は鄭重ではあるが、絶望したやうにかう言つた。『わたしは露西亞の事は申しません。併しマダム、各國の元首と仰しやるんですか？　一體彼等は路易十八世や王妃エリサベートの爲めに、何れだけの事をしましたか？　何もしやしません。』と彼は昂奮し乍ら語を次いだ。『全くの所、彼等はブルボン朝事件に關する背信の爲めに、今天罰を蒙つてるのです。各國の元首！　彼等は王座を掠奪した人間に使臣を送つて、祝辭を述べてゐるぢやありませんか。』

彼は輕蔑したやうに吐息をついて、又しても居住ひを變へた。長い間柄付眼鏡（ロルネット）で子爵を眺めてゐたイッポリート公爵は、此の言葉と共に不意にくるりと、小柄な公爵夫人の方へ向き變つた。そして夫人から針を借りて、それで卓の上に繪を描いて見せ乍ら、コンデー家（エンギエン侯爵家）の徽章を說明し始めた。彼はまるで公爵夫人から賴まれでもしたやうに、恐しく物々しい顏付で此の徽章の說明をするのであつた。

『紫と赤の細い線でぎざぎざの緣を取つた桶――これがコンデー家の徽章です。』

公爵夫人はほゝ笑み乍ら聞いてゐた。

『若しもう一年ボナパルトが王位に止つてゐるなら』と子爵はしかけた話を續けた。彼は他の

人の言ふ事など耳に入れないで、誰よりも一番よく心得てゐる問題に關した、自分自身の思想の開展より外、何にも注意を向けないやうな態度であつた。『其の時はもう取り返しの附かぬことになるでせう。策略や暴力や追放や處刑などで以て、社會は――といつても無論佛蘭西の勝れた社會の事を言ふのです――永久に撲滅されるでせう。その時は……』

彼は肩を縮めて兩手を擴げた。ピエールは此の會話に興味を唆られたので、何か言はうとしたが、彼を見張つてゐたアンナは直ぐに抑へた。

『アレクサンドル陛下は、』語一たび皇族の上に及ぶ毎に、必ず彼女の語氣に伴ふ憂愁の調子を帶びて、アンナはかう言ひ出した。『佛國自身に政體を選擇するの權利を與へる、とかう仰せられました。わたくしの考へでは、佛國民は掠奪者の手から免れるや否や、正當な王の腕に投じて來るに違ひございません。』アンナは此の王黨員たる亡命の客に對して、出來るだけ愛想よくしようと努め乍らかう言つた。

『それは何うも疑はしいですね。』とアンドレイ公爵は言つた。『子爵が仰しやるのは本當です、事態はもう取り返しの附かない程進行しました。わたしは今更舊に復するのは困難だらうと思ひます。』

『僕の聞く所では』と顏を赤くし乍ら、再びピエールが口を入れた。『殆ど全貴族階級がボナパ

ルト側に移つたさうぢやありませんか。』

『それはボナパルト派が言ふ事です。』と子爵はピエールの方を見ないで言つた。『目下佛蘭西の輿論を知るのはむづかしいですよ。』

『Bonaparte l'a dit』(それはボナパルトが言つたことです)。とアンドレイ公爵は冷笑するやうに言つた。

察する所彼は子爵が氣に入らないらしい。で子爵の方を見てはゐなかつたが、彼と反對に〳〵言葉を向けようとするらしかつた。

『Je leur ai montre le chemin de la gloire; ils n'en ont pas voulu; je leur ai ouvert mes antichambres, ils se sout precipités en foule』(余は彼等に榮譽の途を示したれど、彼等欲せざりき。余前室の戸を開きしに、彼等は群をなして爭ひ入りたり)暫く無言の後、彼は再びナポレオンの言葉を繰り返した。『尤もわたしは如何なる程度迄、彼にかう言ふ權利があつたか知りません。』

『Aucun』(少しも有りません)と子爵は抗言した。『彼が侯爵を殺した後は最も熱心な崇拜者さへも、彼を英雄として見なくなりました。』と言つて彼は更にアンナに向ひ、『假りに彼が若干の人に取つて英雄であつたとしても、侯爵の死刑後は天國に於て一人の受難者が增え、地上に一箇の英雄が少くなつた譯です。』

アンナや其の他の人々が微笑を以て、子爵の言葉に敬意を示す暇もない中に、又もやピエール

が割つて入つた。彼が何か無作法な事を言ひはしないかと心配してゐたアンナも、今はもう遮ることが出來なかつた。

『エンギエン公爵の死刑は、』とピエールは言つた。『國家的必要でした。僕はナポレオンが何等の疑懼も無く、自分一人で此の行爲の責任を引き受けたといふ事に、偉大なる精神を發見する事が出來ます。』

『Dieu! mon Dieu!』(神よ! 我が神よ!)とアンナは恐しげに囁いた。

『何ですつて、ピエールさん、あなたは虐殺の中に偉大な精神を發見なさるんですか?』小柄な公爵夫人は微笑し乍ら、仕事を傍へ引き寄せてかう言つた。

『あらまあ! おや〳〵!』などゝいふ聲々が聞えた。

『Capital!』(大出來!)と英語で言つて、イッポリートは掌で膝を打ちに掛つた。

子爵は只肩を縮めたのみである。ピエールは得意らしく眼鏡越しに人々を眺めた。

『僕がさういふのは他でもありません。』と彼は自暴半分の調子で續けた。『ブルボン家の人々が革命を避け恐れて、國民を無政府主義者の手に委ねた時、只ナポレオン一人のみが革命の何たるやを理解して、それを征服したのです。それ故彼は一般の幸福の爲めには、一人の生命の前に停歩躊躇する事が出來なかつたのです。』

『あなた彼方の卓へいらつしやいませんか？』とアンナが言つた。

併しピエールは返辭もせずに語を次いだ。

『さうですとも。』と彼は愈々昂奮の度を増し乍ら言つた。『ナポレオンは偉大です。何故といふに彼は革命より一段上に立つて、其の濫用を抑壓しました。そして市民の同權、言論印刷の自由など、すべての善なるものを保留しました。只それが爲めに彼は實權を得たのです。』

『さうです、若し實權を握つてから、それを殺戮の爲めに利用しないで、正當の王に引き渡したなら。』と子爵は言つた。『そしたらわたしも彼を偉人と呼んだでせう。』

『彼はさうする事が出來なかつたのです。國民が彼に實權を與へたのは、只彼に依つてブルボン朝から免れようと思つたからです。それに國民は彼の中に於て偉大なる人間を發見したからです。革命は偉大なる事業でした。』とピエールは續けた。彼は此の自暴半分の挑戰的な前提に依つて、自分の偉大なる青春と、何もかも十分言つて了ひ度いといふ慾望を露はに示したのである。

『革命や主殺しが偉大なる事業ですつて？……そんな事を仰しやるなら……あなた本當に彼方の卓へいらつしやいませんか？』とアンナは又繰り返した。

『Contrat social』（社會的契約ですね）つゝましやかな微笑を浮べながら子爵はかう言つた。

『僕は主殺しの事を言つてるんぢやありません。僕のいふのは思想の事です。』

『えゝ、強盜、人殺し、主殺しの思想です。』と又皮肉な聲が遮つた。

『それは無論極端な場合でした。併しそんな物の中に一切の意味があるのではありません。意味の存する所は人間の權利、偏見よりの解放、市民の同權などです、そしてナポレオンはすべて是等の觀念を完全に保持しました。』

『自由とか同權とかいふのは、』愈々此の青年に其の言說の愚かしさを、眞面目に證明してやらうと決心したものゝ如く、子爵はさげすむやうな調子で言ひ出した。『要するに聲ばかり大きくて、今ではすつかり價値を失つて了つた空な言葉に過ぎませんよ。そりや誰だつて自由同權を好かないものはありません。我が救世主でさへずつと昔に自由同權を說いて居られます。併し一體革命の後に人間が少しは幸福になりましたか？　まるで反對です。我々は自由を欲したのに、ボナパルトがそれを撲滅して了ひました。』

アンドレイ公爵はほゝ笑み乍ら時にピエール、時に子爵、時に女主人を見較べてゐた。ピエールが突然あんな事を言ひ出した最初の瞬間は、世間馴れたアンナ・シェーレルでさへ膽を冷した。が、ピエールの發した冒瀆的な言辭にも拘らず、子爵が夢中になつて怒らないのを見、かつ又此の話を揉み消す事は到底も出來ないと確信すると、彼女は勇を鼓して子爵と力を協せ乍ら、ピエール攻擊に掛つた。

『Mais, mon cher m. Pierre』（併しね、我が親愛なるピエールさん）とアンナが言つた。『あなたはあの罪もない侯爵を――いえ單に人といつた方がようございますね――裁判もしないで處刑するやうな人間が偉大なる英雄だなんて、何うしてそれを説明なさいますか？』

『わたしはお訊ねしますが、』と子爵も言ひ出した。『あなたは露月（ブリュメール）の十八日を何う説明なさいます？　あれが騙し討でありませんか？　あれはぺてんです、偉人の行動らしい所は少しもありやしません。』

『それに阿弗利加でナポレオンに殺された俘虜は？』と小柄な公爵夫人は言つた。『全く恐しいこつてすわ！』と彼女は肩を竦めた。

『C'est un roturier, vous aurez beau dire』（あなたが何と仰有つてもあれは香具師です）イッポリート公爵がかう言つた。

ピエールは誰に答へていゝか分らないで、一同を見較べて微笑した。彼の微笑は他の人に見受けるやうな、微笑と『非微笑』とごつちやになつた物ではなかつた。それ所か、微笑の浮んで來ると同時に、不意に眞面目くさつた、幾分氣むづかしくさへ見える表情が消え失せて、子供らしく人の好さゝうな、少々間の抜けた、許しでも乞ふやうな、まるで別な顔附になつたのである。

初めて彼に會つた子爵は、此の過激的（ジヤコビン）民主黨も決して甘程には恐しい人間でない、といふ事を直ぐに見拔いて了つた。一同は暫く口を噤んでゐた。

『一體あなた方は此の人が一時に、皆さんに返事が出來るとお思ひですか？』とアンドレイ公爵が言つた。『それに國士としての行爲の中から、私人として――卽ち武人若しくは皇帝としての行爲を擇り分けなくてはなりません。わたしにはさう思はれます。』

『さうですとも、さうですとも、勿論さうです。』ピエールは味方の現はれた嬉しさに隙さずがう合槌を打つた。

『わたしはかう認めざるを得ません。』とアンドレイ公爵は語を續けた。『アルコーラ（伊太利ベロナ附近の村落、一七九六年ナポレオン墺軍を破りし所）橋上に於けるナポレオン、又ヤッファ（地中海に面した土耳古の港）に於て黑死病（ペスト）患者に手を差し伸したナポレオンは、人間として偉大なものでした。けれども……けれども其の他に辯護の出來ない行爲も無論あります。』

アンドレイ公爵はピエールの拙ない言葉を補はうとしたものらしいが、つゝと立ち上つて歸り支度に掛り乍ら、妻に目配せした。

――――――――――――

突然イッポリート公爵が立ち上つて、手振で人々を押し止め、も一度席に着くやうに賴み乍らかう言ひ出した。

『いや今日わたしは莫斯科で有つたとかいふ、面白い話を聞いたのです。一つ皆さんに此の話

を御馳走しなくちやなりません。子爵、何うぞお許し下さい、わたしは露西亞語で話します。でないと此の話のやまが臺なしになりますから。』

とイッポリート公爵は、まるで漸つと一年ばかり露西亞に逗留した、佛蘭西人のやうな口調で話し出した。一同はちよつと足を止めた。それほどイッポリートは元氣よく而も强請的に、自分の物語に對する注意を求めたのである。

『モスクーに一人の奥さん――ユーヌダームあります。此の人大變けちんぼです。此の人の馬車に二人の Valets de pied（從僕）が要ります。大變脊が高いの要ります。それが奥さんの趣味あります。此の人は一人の小間使持つてゐました、これも大層脊が高いです。奥さん言ひました：……。』

此處でイッポリートは一寸苦心するらしく考へ込んだ。

『奥さん言ひました……その言ひました。娘や四季施（リブレエ）をお着なさい、馬車で私と一緒に行きませう faire des visites（訪問をしに）』此處でイッポリート公爵は聽手よりも先に立つて、噴き出して笑ひ初めた。それが當人に取つて頗る不利な印象を與へた。とは言へ多くの人は（其の中に彼の老夫人、もアンナ・シェーレルも交つて）微笑を浮べた。

『奥さん出掛けました。所が突然酷い風が出來ました。娘は帽子を失くして、長い髪とけて了

ひました……』

此處迄言つて彼はもう我慢し切れなくなつて、引つ千切るやうに笑ひ出した。そして此笑ひ聲の隙間（すきま）からかう言つた。

『そこで世間の人みんな知りました……』

これでお話は終つた。何の爲めに彼がこんな話をしたのか、何故又必ず露西亞語で話さねばならなかつたのか、その譯が分らなかつたけれど、兎に角アンナ其の他の人々は、ピエールの不愉快で無愛想な言葉を、氣持よく揉み消して了つたイッポリート公爵の、世間馴れた態度を感謝した。此の物語の後で會話は細々（こまぐ）した無意味な雜談――何處で何時誰々が出會ふだらうか、何時何んな舞踏會があつたとか、何々の芝居は何時催されるだらうとか、そんな風の噂に落ちて了つた。

六

客人達はアンナに charmante soirée（愛すべき夜會）の禮を述べて立ち去り始めた。

ピエールは何處迄も無骨であつた。肥つて、脊丈が普通よりも高く、肩幅が廣く、大きな赤い手をした此の青年は、所謂『客間へ入ること』も下手であつたが、又出る事も劣らず下手であつた。つまり出て行く時何か特別に、氣持のよい事を言ふことが出來なかつたのである。其の上彼

（はぼんやりしてゐた。立ち上る時に自分の帽子と間違つて、羽毛の附いた將官の三角帽を取つて將軍が返して呉れといふ迄、羽毛を引つ張り乍ら抱へてゐた。併し其のぼんやりしてゐる事も、客間へ入つて話す事の下手なのも悉く、人の好さうな遜つた素直な表情に依つて、優に贖はれたのである、アンナは彼の方へ振り向いて、基督教徒らしい謙虚の表情を浮べつゝ、今夜の彼の非禮を許すといふ意を見せ乍ら、一寸點頭いてかう言つた。

『又今度お目に掛りませうね。けれどもそれ迄に御意見を變へて頂き度いものですね、モッシュウ・ピエール。』と彼女は言つた。

彼女にかう言はれた時、彼は何にも答へないで貝腰を屈めて、もう一度例の微笑を一同の者に示した。それは『意見も意見ですが、まあ御覽なさい、僕はこんなに人の好い可愛い男なんですよ』とのみ言ふやうに見えた。アンナも一同の者と同じく、自然それを感じない譯に行かなかつた。

アンドレイ公爵は控室に出て、マントを着せ掛ける從僕に自分の肩を任せ乍ら、同じく控室に出て來たイッポリート公爵と、自分の妻とのお喋りを無關心な顔附で聞いて居た。イッポリート公爵は美しい身重な夫人の傍に立つて、柄付眼鏡越しにしつこく瞶めるのであつた。

『あちらへ行らつしやい、アンネット、お風をお召しますよ。』小柄な公爵夫人はアンナに別れを

告げ乍らかう言つた。『C'est arrêté』（あの事はもう決つてゐます）と低い聲で附け足した。

アンナはアナトーリと小柄な公爵夫人の義妹の間に企てられた緣談を、もゾリーザに相談して了つたのである。

『わたくしあなたを當にしてゐますよ。』とアンナも同樣に小さな聲で言つた。『何うぞあの女にお手紙を上げて下さい。comment le père envisagera la chose（そしてお父さんが此話を何んなに見ていらつしやるか）、わたしに知らして下さいまし。Au revoir』（左樣なら）と彼女は控室から出て行つた。

イッポリート公爵は小柄な公爵夫人に近附いて、近々と顏を寄せ乍ら、半ば囁くやうに何やら話し出した。二人の從僕は（一人は夫人ので今一人はイッポリートのであつた。）二人が話し了るのを待ち兼ねて、襟卷と上衣を手にして立ちながら、彼等に取つて譯の分らぬ佛蘭西語の會話を聞いて居た。それは『なあに、ちやんと分つてゐるんですが、それを素振に出さないだけなんですよ。』と言つたやうな顏付であつた。公爵夫人はいつものやうに微笑を浮べながら語り、笑ひ乍ら對手の言葉を聞いてゐた。

『わたしは公使の方へ行かなかつたのを、大變嬉しく思つて居ます。』とイッポリート公爵は言つた。『退屈ですからね……全くい、夜會でした、さうぢやありませんか、い、夜會でせう？』

『でも大層立派な舞踏會ださうでございますよ。』と小柄な公爵夫人は薄い鬚のある上唇を反ら

し乍ら答へた。『社交界の美しい御婦人は、みんな彼方へいらしやるさうでございます。』

『みんなではありません。何故つてあなたが彼方へいらつしやらないから。みんなぢやありません。』

イッポリート公爵は嬉しげに笑ひ乍ら言つた。そして從僕を突き飛ばさないばかりにしてショールを引つ奪ると、それを公爵夫人に着せ始めた。

無器用な爲めか、それとも故意とか(それは誰にも分らない)、ショールはもうちやんと肩に落ち着いて了つたのに、彼は長く手を下さないで、此の若い婦人を抱くやうな恰好をした。

彼女はしとやかに、絶えず微笑を浮べた儘身を退いて、良人の方を振り向いた。アンドレイ公爵の眼は塞がつてゐた。彼は恐ろしく疲れて眠さうであつた。

『お前もう支度はい、のかね?』やがて彼はじろりと妻を見廻しながらかう訊ねた。

イッポリート公爵は新式で踵よりも長い上衣を忙しさうに着込むと、足縺れのする樣子で夫人の後を追ひ乍ら、入口の階段へ走り出た。夫人は從僕に助けられて馬車に乘つてゐた。

『Princesse, au revoir』(公爵夫人左樣なら)と彼は叫んだ、足と同じ位に舌を縺らせ乍ら。

公爵夫人は服を抓み上げ乍ら馬車の暗に腰を下した。良人は佩劍(サーベル)を正してゐた。イッポリート公爵は手傳ひを名目にして皆の邪魔をした。

『御免なさい、公爵』アンドレイ公爵は、通り路の邪魔をするイッポリートに向つて、露西亞語でそつけなく不愉快さうにかう言つた。

『僕待つてゐるからね、ピエール君、』同じアンドレイ公爵の聲が愛想よく、優しさうにかう言つた。

馭者が鞭をくれた。馬車は轍(わだち)を鳴らしはじめた。イッポリート公爵は階段に立つて、引き千切つたやうな笑ひ聲を上げながら、自分の家まで連れて行く約束になつてゐる、子爵の出て來るのを待つて居た。

『Eh bien, mon cher (ねえ公爵)、あの小さな公爵夫人は實に可愛いですね、實に可愛い』子爵はイッポリートと一緒に馬車に乘り乍らかう話し掛けた。『いや全く可愛い。』と彼は自分の指の端を接吻した。『Et tout-a-fait francaise』(そして全然佛蘭西式ですね)

イッポリートはぷつと噴き出した。

『時にあなたは恐ろしい人ですね、其の可愛らしい罪の無い顏に似合はない。』と子爵は語を次いだ。『わたしはあの亭主が可哀さうですよ、ほらあの豪さうに見せ掛けようとしてゐる小さな將校ですよ。』

イッポリートは又噴き出したが、その笑ひの隙間からかう言つた。

『所があなたは、露西亞美人は佛蘭西美人に劣ると仰しやつたぢやありませんか、少し實地に當つて見なくちやあなりませんよ』

先に行き着いたピエールは内輪の人のやうに、アンドレイ公爵の書齋へ通つた。そしていつもの習慣で、直ぐ長椅子に寢そべり乍ら、棚から手當り任せに書物を取り出し（それはシーザー手記であつた）肘を突いて眞中邊から讀みに掛つた。

『君はマドモワゼーユ・シェーレルに對して何といふ事をしたのだ？　あの女は今屹度病氣を起してるよ。』書齋へ入り樣アンドレイ公爵はかう言つて、小さな白い手を擦つた。

ピエールは長椅子の軋む程體をすつかり後ろへ捩ぢ向けて、アンドレイ公爵に自分の生き〳〵した顏を見せ乍ら、微笑を含んで片手を振つた。

『いや、併しあの僧正は非常に面白い人ですね。只少し見當違ひな解釋をするけれど……僕の意見では、永久平和も不可能ぢやありません、併し何と言つたらいゝか分らないですが……但し政治的權力の平均を手段とするんぢやありません……』

アンドレイ公爵はこんな抽象論に興味を持つてゐないらしく、

『いけないよ。mon cher（モン シェル）、單に考へただけの事を、何處でも出放題に話すのはよくないよ。え、

何うだね、いよいよ何かやつて見る事に決めたかい？　近衛騎兵か、それとも外交家かね？』暫く無言の後アンドレイ公爵はかう訊ねた。

ピエールは足を膝の下に敷きながら長椅子の上に坐つた。

『いや實はねえ、僕未だ何にも分らないんです。何方も厭なもんですからね。』

『併し早く何かに決めなくちや！　お父さんが待ち兼ねてゐるんぢやないか。』

ピエールは十の年から羅馬教僧侶の家庭教師をつけて外國へ遣られ、二十歳の時まで向うで過した。彼が莫斯科（マスクワ）へ歸つた時、父は僧侶を解雇して青年にかう言つた。『今度はお前彼得堡（ペテルブルク）へ行つて、よく觀て選擇しろ。俺は何にでも贊成する。そら此處にヴシーリィ公爵へ宛てた紹介狀と金が有る。すつかり何もかも書いて寄越せ、俺は萬事に就けてお前の力杖だから。』で、ピエールは一身の方向を擇んでゐるのだが、未だ三ケ月といふもの何もしないでゐる、此の選擇の事をアンドレイ公爵は言つたのである。ピエールは額を撫でた。

『あの人は共濟組合員（同胞主義と均等主義の基礎の下に精神修養を目的とする宗派）に相違ない。』と彼は言つた。あの人といふのは今夜アンナの許で見た僧正の事なので。

『そんな事はみんな下らん事さ、』と又もやアンドレイ公爵は彼を押し止めた。『それよりか實際方面の事を話した方がいゝよ——君は近衛騎兵に入つた事が有るかね？』

『いゝえ、ありません。併し僕かういふ考へが浮んだから、あなたにお話しようと思つたんです。目下ナポレオンを向うに廻して戰爭が始まつて居るでせう。若しこれが自由の爲めの戰ひなら、僕も承知です、僕は眞つ先に立つて軍務に就きます。併し英吉利や墺太利を助ける爲めに、世界最大の偉人を敵にするのは……それはよくないです。』

アンドレイ公爵はピエールの此の子供らしい言葉に肩を縮めて、そんな馬鹿々々しい事に返辭をする譯に行かぬ、といふやうな顏附をして見せた。併し實際の所かういふ無邪氣な問に對しては、アンドレイ公爵が言つたやうに答へる外、何とも仕樣が無かつたのである。

『若しみんなが自分の信念のみに依つて戰爭したら、戰爭といふ物もなかつたらうね。』と彼は言つた。

『それこそ本當に結構ぢやありませんか。』とピエールは言つた。

アンドレイ公爵はにやりと笑つた。

『それこそ結構だといふのは、大きに道理かも知れない。併しそんな事は決してあるまいよ。』

『ぢやあなたは何の爲めに戰爭に出るんです？』ピエールが訊いた。

『何の爲め？　僕も知らない。さうしなきやならないからさ。が其の他に、僕が戰爭に出るのは……』と彼は一寸間を置いて、『僕が出る譯は、今此處で僕の送つてゐる生活が――此の生活が

僕の氣に合はないからだ。』

七

次の間で女の服がさら〳〵と鳴り始めた。不意に目の醒めたやうに、アンドレイ公爵は急に體を奮ひ起した。そして彼の顏はアンナ・シェーレルの客間で見せたのと、丁度同じやうな表情を帶びて來た。ピエールは長椅子から足を下した。公爵夫人リーザが入つて來た。彼女はもう別な內着をつけてゐたが、これも同じやうに優美で爽やかなものであつた。アンドレイ公爵は立ち上つて、慇懃に安樂椅子を妻にすゝめた。

『わたくしよくさう思ひますの。』せか〳〵と忙しさうに安樂椅子へ腰を下しつゝ、彼女は例(いつ)もの通り佛蘭西語で話し出した。『何故アンナさんは結婚しないのでせう？　あなた方殿方はみんな馬鹿ですわ、あの人と結婚なさらないなんて。何うぞ腹を立てないで下さい。だけど全くあなた方は女といふ者が、丸で分つてゐらつしやらないんですわ。モッシウ、ピエール、あなたは隨分議論家ですのねえ。』

『僕はご主人といつも議論ばかりしてゐるんですよ。併し分りませんねえ、何故公爵は戰爭に出られるんでせう。』ピエールは公爵夫人に向つてかう言つた。普通青年が若い女に對する時必ず附

物になつてゐる、遠慮といふものが彼には少しもなかつた。

公爵夫人はぎくりとした。察する所ピエールの言葉は彼女の急所を衝いたものらしい。

『え、、それをわたくしも申すんですよ！』と彼女は言つた。『何故男の人は戰爭なしに生きて行かれないんでせう？　わたくし分りません、何うしても分りません。そして又何故女は何にも欲しがらないのでせう、全くわたくし達は何にも要りませんの。ね、何うぞあなた審判官になつて下さい。わたしいつも良人に申すのですよ。此處で伯父さんの副官をしてゐるのは、本當に何より立派な位置ですつて。皆が良人の名を知つてゝ、そして尊敬して下さるんですものねえ。先達てもアプラークシンさんのお宅で聞いてゐますと、ある女の方が C'est ça le fameux prince André?（あの人が有名なアンドレイ公爵ですか）つて訊いてゐました。えゝえゝ、本當ですとも』と彼女は笑ひ出した。『何處へ行つてもこんな風に待遇されてゐますの。良人は侍從武官にだつて譯なく成れるんでございます。御存じでもありませうが、皇帝陛下も大變優しいお言葉を良人に掛けて下すつた事がございます。わたくしアンネットさんとも話した事ですけど、それは譯なく運びがつく事ですの。あなた何とお考へでございます？』

ピエールはアンドレイ公爵の方を眺めたが、此の會話が彼の氣に入らないのを見て取つて、何にも答へなかつた。

『何時あなたは御出發ですか？』と彼は訊いた。

『あ、、あの出發の事を言つて下さいますな！　わたくしはそんなことを聞き度くございません。』と公爵夫人はアンナの客間でイッポリートに話したと同じやうな、氣まぐれなふざけた調子でかう言つた。それが此の家庭的團欒の中では（ピエールも殆ど其の一員であつた）、如何にも不似合に聞えるのであつた。

『今日ね、わたくしふいと考へましたの、今にかうした懷しい關係を、すつかり絶つて了はなければならないと考へると・・・それにねえ、アンドレイ』彼女は意味深く良人に瞬きして見せた。

『J'ai peur, j'ai peur!』（わたしは恐ろしい、わたしは恐ろしい）とリーザは脊中を慄はせ乍ら囁いた。

良人はぢつと彼女を見詰めたが、其の樣子はまるで此の部屋の中に自分とピエールの他、未だ誰か別な人が居るのに今始めて氣がついて、ぴつくりしたと云ふやうな風であつた。で彼は冷やかに慇懃な調子で訝るやうに妻に話し掛けた。

『お前何がそんなに恐いんだね、リーザ？　わたしには何うも分らないね。』と彼は言つた。

『まあ、あんな風に男の方はみんな利己主義者なんですわ、みんな！　御自分の好奇で、譯も分らない事にわたしを振り棄てゝ、一人ぽつちで田舍へ押し籠めようとなさるんですもの。』

『お父さんと妹と一緒だよ、忘れちやいけない。』アンドレイ公爵は低い聲でかう言つた。

『何うせわたしのお友達が居なければ、一人ぼつちも同じですわ…それだのにわたしに、恐がつちやいけないんで…』

彼女の調子はもう愚痴つぽくなつてゐた。そして吊り上つた上唇は、彼女の顔に嬉しさうな陰を付けないで、獣めいた栗鼠のやうな表情を與へた。彼女はピエールの前で、自分の懐姙の話をするのは不躾だと考へて口を噤んだが、要點はこれ一つの中に含まれてゐたのである。

『それにしてもわたしには分らないね de quoi vous avez peur (何を一體お前は恐れるんだらう)』レイド公爵アンは妻から目を放さず、ゆつくりした調子でかう言つた。

公爵夫人は顔を赤くして、やけに兩手を振つた。

『Non Ander (ぬーあんどれい、ア)わたしの言ふのは、あなたが大層お變りなすつたといふ事なんですの……』

『醫者はお前に早く寢ろと言つたぢやないか。』とアンドレイ公爵は言つた。『お前行つて寢たら何うだね』

夫人は何とも答へなかつたが、薄い髭のある唇が不意にぴくりと慄へた。アンドレイ公爵は立ち上つて肩を竦め、部屋の中を歩き出した。

ピエールはびつくりしたやうな無邪氣な顔付をして、公爵と夫人とを交るぐ眼鏡越しに眺めてゐた。やがて立ち上らうとでも思つたのか、一寸身を動かしたが、又考へ直してゐる樣子であつた。

『此處にピエールさんがゐらつしやるからつて、何も構ふ事はございません。』不意に夫人がかう言つた。と、彼女の美しい顔は急に弛んで、今にも泣き出しさうな澁面(じうめん)に變つた。『わたし前からあなたに言ひ度かつたんですの、アンドレイ、何故あなたはわたしに對して、そんなに變つてお了ひなすつたんですの？　一體わたしが何をしたのでせう？　あなたは軍隊へお入りになるのに、少しもわたしを可哀さうだとは思つて下さらないんですもの。何ういふ譯ですの？』

『Lise(リーズ)！』アンドレイ公爵は只かう言つたばかりである。

此の一言の中には哀願と威嚇があつたが、それよりも夫人自身が後で後悔するぞ、といつたやうな訓戒が響いて居た。けれども彼女はせか〳〵と言葉を續けた。

『あなたはわたしをまるで病人か、小兒扱ひになさるんですもの。わたしすつかり分つて居ますわ。あなたは一體半年前も矢張りそんな風でしたでせうか？』

『リーズ、わたしは止して呉れつて頼んでるんだよ。』一層表情に富んだ語氣でアンドレイ公爵はかう言つた。

ピエールは此の問答の間に段々と昂奮の度を增して來た。彼は立ち上つて公爵夫人の方へ近附

いた。察する所、彼は此の悲みの様を見るに忍びないで、自分迄泣き出し度くなつたのであらう。

『氣をお落ち着けなさい、奥さん。それはあなたにさう思はれるだけなんです。何故と言つて、僕誓つて申しますが……僕自身にもさういふ經驗があるからです……何故……何ういふ譯つて……いや、失禮しました、僕は此の際用の無い他人ですから……いや、氣を靜かにお持ちなさい……左樣なら……』

アンドレイ公爵は其の手を取つて引き止めた。

『いや待ち給へ、ピエール君。公爵夫人は親切な人だから、君と此の一晩を過す悦びを、僕から奪はうなどゝはしないよ。』

『いゝえ、良人は自分の事しか考へてゐないんでございます。』夫人はもう怒りの涙を怺へ切れないでかう言つた。

『リーズ。』もう我慢が出來ないぞと云ふ事を示す位の邊まで調子を上げて、アンドレイ公爵はそつけなくかう言つた。

公爵夫人の美しい顏の腹立たしげな栗鼠のやうな表情が、急に人を惹き附けるやうな、同情を呼び醒すやうな恐怖の表情に變つた。彼女は額越しに美しい眼で良人を眺めたが、丁度垂らした尻尾を忙しげに、弱々しく打ち振る犬のやうな、臆病な從順しい表情がその顏に現れた。

『Mon Dieu, mon Dieu!』(神樣々々) と夫人は呟いて、片手に着物の襞を抓み乍ら、良人に近附いて額を接吻した。

『お休み、リーズ。』他所々々しく慇懃に妻の手を接吻し乍ら、アンドレイ公爵は立ち上つてかう言つた。

八

二人の友は默してゐた。何方からも話を始めようとしなかつた。ピエールはアンドレイ公爵を見詰めてゐるし、公爵は小さな手で額を擦つて居た。

『食事に行かう』彼は立ち上つて戸口の方へ向ひ乍ら、溜息と共にかう言つた。

彼等は新しく造作された優美で贅澤な食堂へ入つた。ナプキンから銀製の器、陶器、硝子類に至る一切の物が、新夫婦の家庭によくある特殊な新しさの陰を帶びてゐた。食事の半ば頃アンドレイ公爵は頰杖をついた。そして以前から何か胸に溜めてゐた物を、不意に言つて了はうと決心した人のやうに、神經的な苛立たしげな表情を浮べて話し出した。ピエールは今迄彼の顏にこんな表情を見た事がなかつた。

『君、決して、決して結婚なぞし給ふな。僕は君にかう忠告して置く。君が自分でもう何もか

もし盡したと考へる迄は、又君の選擇した女に對する愛がなくつて、其の女の眞相をはつきりと見拔く迄は、必ず結婚するものぢやないよ。でないと、君は手酷い取り返しの附かぬ失望に陷るから。もう何の役にも立たぬ爺になつてから結婚するんだね……でないと君の有つてゐる優れた物、高潔な物が、すつかり亡びて了ふ。さうだよ、さうなんだよ！　そんなびつくりしたやうな顔をして、僕を見なくてもいゝぢやないか。若し君が何か自分の前途に期待してゐるなら、やがて君は一歩毎に悟らされるだらうよ――もう一切のものは終りを告げ、戸を閉されて、殘るものは只社交界の客間ばかり、而も其處では宮廷勤めの下司や馬鹿者と、同じ床板の上に立たなければならないのだからな……。』

彼は力を籠めて片手を掉つた。

ピエールは眼鏡を外した。それが爲めに彼の顔の相が變つて、なほ人が好さゝうに見えて來た。彼はびつくりしたやうに友を見詰めた。

『僕の妻は、』とアンドレイ公爵は語を次いだ。『立派な女だ。あれは自分の名譽といふ事に就いては、安心して一緒に暮せる女の一人だよ。あゝ、併し仕樣がない、僕はも一度未婚時代に歸る爲めには、何んな犧牲だつて惜みはしないんだがなあ！　僕は君一人だけに初めてこんな事を打ち明けるんだよ。何故つて僕は君が好きなんだから。』

かう言つた時のアンドレイ公爵は、あのアンナ・シェーレルの家で、安樂椅子にぐつたり凭れ掛つて目を細め乍ら、齒と齒の間から佛蘭西語を押し出すあのボルコンスキイと比べて、先程よりも餘計似た所が少くなつた。彼の乾いた顏の筋肉は一つ〳〵神經的に顫へてゐた。以前生命の火が消えたやうに見えてゐた彼の目は、今や鋭く明るい輝きに燃え立つた。平常生氣が無いやうに見えるだけ、今のやうな殆ど病的な感激の瞬間に於ける彼の樣子は、尙一層精力的に思はれるのであつた。

『君は何故僕がこんな事をいふか分らないだらう。』と彼は續けた。『實際これは一つの立派な人生史だからね。君はよくボナパルテと其の功業を說くが、』と彼は言つた。その癖ピエールはボナパルテの事など言つた事もないのだ。『君はボナパルテと言ふけれど、併しボナパルテも一生懸命に働いて、一歩々々自分の目的に近附いてゐる時は自由だつた、目的より他何もなかつたのだ――だから彼は其の目的を達した。所が一旦女に關係すると、まるで釘附にされた囚人同樣、一切の自由を失つて了ふ。さうなると人は、自分の中に在つて希望と力になつてゐた一切の物を、只重荷のやうに感じて、悔恨の爲めに責め苛まれるのだ。客間、陰口、舞踏會、虛榮、無意味な瑣事――かうした魔法の圈が四方から取り圍んで、僕はその中から逃れる事が出來ないのだ。僕は今戰爭に出掛けようとしてゐる、それは未曾有の大戰爭だ。所で僕は何にも知らないから、何の

役にも立ちやしない。Je suis très aimable et très caustique（僕は非常に愛嬌のある男だが、又非常に皮肉屋なんだよ）』と彼は語り續けた。『だからアンナさんの所でも皆が僕に傾聽するのさ。あれが又馬鹿々々しいお仲間なんだけれど、妻だのあの女達は、これがなくては生きて居られないんだからね。一體あゝした toutes les femmes distinguées（すべての卓越したる婦人達）や、それから一切の女といふものが、何んなものかといふ事が君に分つたらなあ……僕の父がいふ事は本當だよ。利己主義、虚榮心、暗愚、そして萬事に就いてのやくざな加減――それが女なんだよ。それがありの儘の正體をさらけ出した女なんだ。社交界に出てゐる所を見れば、何か有るやうな氣がするけれど、何にも、何にもありやしない！　全く君結婚し給ふな、結婚しちやいけない。』とアンドレイ公爵は言葉を結んだ。

『僕はあなたが自分で自分を無能とし、自分の生活を傷けられた生活と考へてゐらつしやるのが、何だか可笑しく思はれますよ。あなたにはすべてがあるんです、すべてが先の方に有るんですよ。そしてあなたは　：』

彼はあなたが何であるか言はなかつた。併し彼が如何に友を尊敬し、如何に多くを其の未來に期待してゐるかは、彼の語調が證明して居た。

『何故公爵はあんな事が言へるのだらう！』とピエールは考へた。ピエールは公爵を目として、あらゆる完成されたるもの、模範のやうに思つてゐた。つまりそれは公爵が、ピエールの持つてゐないすべての資質を、最も完全に兼ね備へてゐたからである。それらの資質を一言に言ひ現すには、意志の力といふ語が一番近かつた。あらゆる階級の人に對して、平然と應對する事の出來る能力、非凡なる記憶力、博學（彼は多くの書を讀んで一切の事を知り、一切の事に就いて理解を持つてゐた）、それから又何よりも貴い勞働と研究の能力、かういふアンドレイ公爵の資質に對して、ピエールは常に驚異の目を瞪るのであつた。又屢々アンドレイ公爵の空想的哲學的能力（ピエールは殊にかうした傾向をもつて居た）に缺けてゐる事が、ピエールを驚かすのであつたが、それとても彼は短所とは思はず力だと感じた。

何んなに仲のよい、美しい打ち解けた關係に於ても、阿諛とか賞讃とかいふものは、車輪の進行に油の必要なやうに、是非なくてはならないものである。

『Je suis un homme fini』（僕は完了した人間だ）とアンドレイ公爵は言つた。『僕の事なんぞ何も言ふがものはありやしない。それよりか君の事を話さうぢやないか。』暫く默つてゐた後、自ら慰めるやうな想念にほゝ笑み掛け乍ら、彼はかう言つた。

此のほゝ笑みはそれと同じ瞬間にピエールの額にも輝いた。

『ぢや、僕の事を何と言つたらいゝんです？』とピエールは口を開けて、呑氣な愉快さうな微笑を作つた。『僕は一體何でせう？　Je suis un bâtard（僕は一箇の私生兒です）』と言つて彼は不意に眞紅になつ

egotistic!
現し、僕他ノテノ
人間性

た。彼はこれを言ふのに非常な努力をしたものらしい。『San nom, san fortune.（名譽もなければ財産もありません）。併し仕様がありません、全く……』併し彼は何が全くなのか言はなかつた。『僕は當分自由だからいいです。只僕は何を始めたらいゝのか、どうしても分りません。僕は眞面目にあなたと相談しようと思つてたんです。』

アンドレイ公爵は人の好い眼附で彼を眺めた。併し其の友達思ひの優しい眼附にも、矢張り自己の優越感が現はれて居た。

『君は僕に取つて貴い人なんだ。それは主として君一人だけが、今の社會に在つて生きゝ〳〵した人間だからなんだ。君は幸福だよ、何でも好きな道を擇み給へ。そんな事は何うだつていゝのさ。君は何處に居たつて幸福なんだ。只一つ言ひ度いのは、もう今後クラーギン（アシーリイ公爵）の息子等の所へ行つて、あんな生活を送るのはよし給へ。實際あゝした道樂や輕騎兵氣取りの寛潤だては君にちと不似合だよ。』

『何うしろと言ふんです、あなた』とピエールは肩を竦めながら言つた。『Les femmes, mon cher, les femmes（女ですよ。あなた、女ですよ。）』

『分らないね。』とアンドレイは答へた。『Les femmes comme il faut（しつけのよい婦人）それは別問題さ。併しクラーギンの Les femmes, les femmes et le vin（女、女と酒）——これは何うも分らない。』

ピエールはヴシーリイ・クラーギン公爵の許に寄留してゐるので、よく息子アナトーリの放逸な生活の仲間入をした。アナトーリといふのは父ヴシーリイ公爵が、身持を直させる爲めに、アンドレイ公爵の妹と結婚させようと考へてゐる、あの息子の事なのである。

『まあ聞いて下さい。』恰も思ひ掛けない幸福な想念が頭に浮んだかの如く、ピエールはかう言ひ出した。『眞面目な話なんですが、僕ずつと前からさう考へてるんです。あんな風の生活を送つてゐては、僕考へる事も決める事も出來ません。頭は痛むし金はなしですからね。今夜アナトーリに呼ばれてゐるんだけれど、僕行きませんよ。』

『それぢや以後決して行かないといふ誓を立て給へ！』

『誓ひますとも！』

九

ピエールが友の許を辭したのは、もう夜の一時過であつた。それは六月の彼得堡によくある白夜であつた。ピエールは眞直に家へ歸る積りで辻馬車に乘つた。けれども次第に家へ近付くにつれて、彼は此の夕方か朝に似た夜を、安らかに寢附く事の出來ないのをしみ〴〵と感じた。がらんとした往來はずつと向うの方まで見透された。今夜はアナトーリの所で例の歌留多の集りがあ

つて、それが濟んだら通常酒盛が始まり、其の後はピエールの好きな或る遊びで終る事になつてゐる。ピエールは道々此の事を思ひ出した。

『クラーギンの所へ行つたら面白いだらうなあ。』と彼は考へた。

併し直ぐに彼はアンドレイに立てた誓――以後決してクラーギンの所へ行かぬといふ誓を思ひ浮べた。が普通ぐうたらといはれる人達に間々ある慣ひで、彼は自分に馴染の深いあゝした放恣な生活を、もう一度だけ經驗したいといふ慾求が堪え難くなつて、到頭出掛ける事に決心した。すると直ぐにかういふ考へが浮んだ―アンドレイに誓つた言葉などは何の意味も持つて居ない。何故なれば、未だアンドレイよりも先にアナトーリに今夜行かうと誓つたから……で、到頭彼は考へた――若し明日にでも自分が死んで了ふか、さなくば潔白不潔白の穿鑿をする餘裕の無いほど、異常な事件が自分の身に起ると假定したら、あゝいふ誓の言葉は皆確とした意味を持たぬ、一種條件的なものになつて了ふではないか。かうした風の推論は屢々ピエールの腦中に生じて、一切の決心や豫想を形なしにして了ふのであつた。彼はクラーギンの所へ出掛けた。

アナトーリの住んでゐる近衛騎兵聯隊に近い、とある大きな家の車寄せに乘り附けると、彼は明るい階段を上つて行つて、開け放してある戸口へ入つた。控室には誰も居なかつた。只あき壜やマントや上靴などが轉つてゐるばかり、酒の匂がぷんと鼻をついて、遠い話し聲や叫びが聞

えて來る。

勝負も晩餐も終つたが、客は未だ散らずにゐた。ピエールはマントを脱ぎ捨てゝ、第一の部屋に足を踏み入れた。殘肴の亂れてゐる中で一人の從僕が、誰も見てゐないと思つて、飲みさしのコップを内所で干してゐる所であつた。三つ目の部屋からどたばた騒ぐ音、笑ひ聲、聞き覺えのある叫び聲、そして熊の唸る聲などが聞える。八人ばかりの青年が開け放した窓の傍に、心配らしく集つて居たが、三人の者は熊を對手に騒いでゐた。一人が熊の鎖を取つて引き廻し乍ら、他の者を嚇してゐるのであつた。

『俺はスチーヴンスに百ルーブリ賭ける！』と一人が怒鳴つた。

『用心しろ、とても勝てないぞ！』と今一人が叫んだ。

『僕はドーロホフに賭ける！』と又一人の者が怒鳴つた。『おいクラーギン、審判しろよ。』

『ようミーシュカ（熊の異名）を打つちやつて了へ、今賭をやつてるんだぜ。』

『一息に飲れよ、でないと敗けつちまふよ。』と又一人が怒鳴つた。

『ヤーコフ、壜を持つて來い、ヤーコフ！』と主人公自ら叫んだ。彼は脊の高い美男子であつたが、胸の眞中を開けた薄い襯衣一枚きりで、群集の只中につッ立つて居た。『諸君、待ち給へ。これはペトルーシャ（ピヨートルの愛稱）と言つて、僕の親友だ。』彼はピエールの方へ向いてかう言つた。

今一人脊は餘り高くないが、うすい空色の目をした男が、是等の醉つ拂ひらしい聲の中に交つて、只一人驚く程しつかりした調子で窓の傍から叫んだ。『此處へ來てよく賭を見て呉んな！』これはドーロホフといふセミョーノフスキイ聯隊の士官で、アナトーリと一緒に住んでゐる、有名な賭博打ちの暴れ者であつた。

『何にも分らないね。一體何うしたんだい？』

『待ち給へ。此の男は醉つてないぞ。おい壜を寄越せ。』アナトーリはかう言ひ乍ら卓からコップを取つてピエールに近附いた。

『先づ第一に飲めよ。』

ピエールは一杯々々とコップを干して行き乍ら、再び窓の傍に集つた醉客の群を額越しに眺め、その話聲に耳を傾けた。アナトーリは彼に酒を注ぎ乍ら、ドーロホフが丁度此の場に居合せた英國水兵のスチーヴンスと、賭を始めた次第を物語つた。それはドーロホフが三階の窓に、足を外側へ垂して腰掛けた儘、ラム酒を一壜飲み干さうといふのである。

『さあ、すつかり飲んで了へ！』アナトーリはピエールに最後の一杯を勸め乍ら言つた。『さもないと放さないぞ！』

『いやだ、もう欲しくない。』アナトーリを突き放しながらかう言つて、ピエールは窓の傍へ寄

つた。

ドーロホフは英吉利人の手を捉へて、主にアナトーリとピエールに聞えるやうに、はつきりと一語々々分け乍ら、賭の條件を說明して居た。

ドーロホフは髮の渦を卷いた、うすい空色の目を持つた中脊の青年であつた。年は二十五、一般步兵將校の習はしで鬚を立てゝ居なかつたので、彼の顏の中で一番見事な點——口がすつかり見えてゐた。此の口の線は著しく纖細に屈曲してゐた。上脣の眞中が鋭い楔形をなして、ぐつと下脣に食ひ込み、兩隅には何時も一つ宛何か嚴のやうな物が刻まれて居た。かうしたすべてのものが强い、傲慢な、そして怜悧さうな眼附と一緒になつて、氣を付けて此の顏を見ずに居られないやうな印象を與へるのであつた。ドーロホフは何の緣戚もない、あまり金を持たぬ男であつた。けれどアナトーリが年に幾萬といふ金を使ふにも拘はらず、彼はアナトーリと同居して、アナトーリ其の他の知人が、彼をアナトーリ以上に尊敬する程の地位を作つたのである。ドーロホフはすべての勝負に出掛けては、殆ど常に勝を占めてゐた。彼は何んなに飲んでも、決して頭腦の明晰を失ふ事がなかつた。クラーギンもドーロホフも、當時彼得堡の亂暴者、道樂者仲間で名物男であつた。

ラムの壜は運ばれた。外へ突き出た窓の斜面へ坐るのに邪魔な窓枠は、二人の從僕が毀して外

しに掛つた。彼等は周りの人々が横口を出したり、怒鳴つたりするので、恐しくせか〳〵して臆氣づいた樣子であつた。

アナトーリは持前の勝ち誇つたやうな顏附をして窓へ近寄つた。彼は何か毀して見度くなつたので、二人の從僕を押し退けて窓枠を引つ張つたが、それは彼の意に從はなかつた。彼は硝子を打ち破つた。

『おい君やつて見ないか、力持。』彼はピエールにかう言つた。

ピエールが横木に手を掛けてうんと引くと、樫の窓枠はめき〳〵と音を立て、曲つて了つた。

『みんな引つ剝して呉れ。さうしないと、手でも掛けるやうに思はれるから。』とドーロホフが言つた。

『英吉利人が威張つてるぜ……え？……いゝだらう？』とアナトーリが言つた。

『いゝなあ。』ピエールはドーロホフを見乍らかう言つた。此方は兩手にラムの壜を以て窓の傍に近寄つた、そこからは空の明りと、朝燒けの一緒になつた光が見えた。

ドーロホフはラムの壜を手にして窓の上に飛び上つた。『聞き給へ！』と彼は窓仕切の上に立つて、部屋の方へ振り向き乍ら叫んだ。一同はしんとした。

『俺は賭をする（彼は英吉利人に分るやうに佛蘭西語で言つた。が此の言葉は大して上手でな

かつた。）俺は五十ィムペリアール（露國の十五ルーブリ金貨）で賭をする。お望なら百にしようか。』と彼は英吉利人に向つてかう附け足した。

『いや、五十だ。』と英吉利人は答へた。

『宜しい、五十ィムペリアール――で俺は口から壜を放さずにラム酒を飲んで了ふ。窓の向う――ほら此處ンところへ坐つて（と彼は屈み込んで、穴の向うに突き出た壁の斜面を指さした）、そして何にも摑まらないで飲むんだ……さうだね？』

『大いにさうだ。』と英吉利人が言つた。

アナトーリは英吉利人の方へ向いて、其の燕尾服の釦を摑へた儘、上の方から見下すやうにし乍ら（英吉利人は脊が低かつた）、英語で賭の條件を繰り返し始めた。

『待てよ、』ドーロホフは自分の方へ注意を引く爲めに、壜で窓を叩き乍ら怒鳴つた。『待て、クラーギン、聞き給へ。若し誰か俺と同じ事をする者があつたら、俺は百ィムペリアール出す。分つたか？』

英吉利人は點頭いたが、此の新しい賭に贊成するのかしないのか、一向分らなかつた。アナトーリは何時迄も英吉利人を放さなかつた。此方はしきりに點頭いて、すつかり呑み込んだといふ事を知らせてゐるのに、しつこくドーロホフの言葉を英語に譯して聞かせるのであつた。此の晩歌

留多に負けた近衛の輕騎兵――痩せた若い青年が窓に攀ぢ上つて、體を突き出し乍ら下を眺めた。

『う！……う！……う！……』彼は歩道の石だゝみを見下し乍らかう言つた。

『氣を附けえ！』と叫んでドーロホフは此の輕騎兵を窓から突き下した。此方は拍車をからませて無樣な恰好をし乍ら、部屋へ飛び下りた。

取る時都合のいゝやうに壜を窓仕切りへ置いて、ドーロホフは用心深くそつと窓の向うへ下り始めた。足をぶら下げて兩手で窓の端を支へ乍ら、彼は加減を計つて位置を定め、一寸左右に體を動かして見て壜を取つた。もうすつかり邊りが明るくなつてゐるのに、アナトーリは蠟燭を二本持つて來て、窓仕切の上に立てた。白い襯衣（シャツ）を着たドーロホフの脊中と、其の渦を卷いた頭とが、兩側から照し出された。一同は窓の傍に群れをなした。英吉利人が一番前に立つてゐた。ピエールは只ほゝ笑むのみで何も言はなかつた。一座の中で一番年取つた一人が慴（おび）えたやうな、同時に腹立たしげな顏付で前の方へ進み出て、ドーロホフの襯衣を捉まへようとした。

『諸君、馬鹿々々しいぢやないか。ドーロホフは落ちて死んぢまふぜ。』此の幾分分別のありさうな男が言つた。

アナトーリは彼を引き留めた。

『觸つちやいけない、君は却つてドーロホフをびつくりさせて、あれを殺すやうなもんだぞ。

うむ？……そしたら何うする？……うむ？』

ドーロホフは又兩手を支へて居住ひを正し乍ら振り向いた。

『若し誰かまだ俺の傍へ寄る奴があつたら、』と食ひしばつた薄い唇の間から、ぽつり〳〵と言葉を發しつゝ、彼はかう言つた。『俺は其奴を此處から突き落すぞ。さあ！……』

『さあ！』と言つて彼は又向き直り、兩手を下げて壜を取つて、口のほとりへ持つて行つた。

そして頭を後ろへ反らし乍ら、重心を取る爲めに空いた手を上へ差し上げた。硝子のかけを拾ひに掛つた一人の從僕は、腰を屈めた儘立ち止つて、ドーロホフの背中と窓から眼を放さなかつた。

アナトーリは目を睜つて棒立になつてゐた。英吉利人は唇を突き出し乍ら横の方から眺めてゐた。此の賭を止めようと試みた男は部屋の隅へ走つて行つて、壁の方へ顏を向けた儘、長椅子の上に横になつて了つた。ピエールは手で顏を隱した。弱々しい微笑が置き忘られたやうに顏の上に殘つてゐたが、それは只恐怖を表すのみであつた。一同靜まり返つてゐた。ピエールが手を目から放して見ると、ドーロホフは前と同じ姿勢で坐つてゐたが、只頭が後の方へ反り返つて、渦卷いた髪の毛が襯衣の襟に觸る位になつて居た。そして壜を持つた手が次第に高く上つて顫へてゐる所は、如何にも苦しい努力をしてゐるやうであつた。壜の酒は大分減つて來たらしく、段々と上の方にあがつて、頭を後ろへ押し曲げた。

『何だつてこんなに長いのだらう？』とピエールは考へた。彼にはもう半時間以上も經つたやうに思はれた。不意にドーロホフは背中を一寸動かした。そして其の手が神經的に顫へ出した。これだけの微動も、斜面に坐つてゐる體全體を動かすのに十分であつた。彼の體はずり下つて、手と頭は烈しい努力をし乍ら、段々ひどく慄へ出した。片々の手は上へ上つて窓仕切りを捉まへようとしたが、又下へおりた。ピエールは再び目を閉ぢて、もう決して二度と開けまいと誓つた。突然彼は周圍がざわめき出したのを感じた。ちらと目を開けて見ると、ドーロホフは窓仕切に立つてゐたが、其の顔は蒼褪めてゐたけれど愉快さうであつた。

『空だよ！』と彼は壜を英吉利人に抛り出した。此方は巧みにそれを捕まへた。ドーロホフは窓から飛び下りたが、その口から烈しいラムの匂がした。

『立派々々！豪いぞ！成程大した賭だ！こん畜生！』など、いふ叫び聲が方々から聞えた。英吉利人は金入を取り出して金を數へ始めた。ドーロホフは眉を顰めて默つてゐた。ピエールは窓へ飛び上つて、

『諸君！誰か僕と賭をするものはないか？僕もあれと同じ事をするぞ。』と不意に彼は叫んだ。

『いや僕賭はいらない、さうだ。壜を取つて來るやうに吩附けて呉れ。僕はやる……吩附けて呉れ。』

『やらせろ！やらせろ！』とドーロホフは微笑を含みながら言つた。

『君何を言ふんだ？氣でも違つたのか？誰が君にそんな事をさせるものか。君は階子段の上でも眩暈がするんぢやないか。』と四方から言ひ出した。

『僕飲んで了ふ、ラムの壜を寄越せ！』ピエールは醉つ拂ひらしい斷乎たる手附で、卓を叩き乍らかう喚いて、窓の外へ這ひ出した。

人々は彼の手を摑まへたが、非常な腕力を持つてゐる彼は、自分の傍へ近付くものを遠くまで突き飛ばした。

『駄目だ、それぢや決してあの男をへこませる事は出來ない。』とアナトーリが言つた。『待て、僕が騙してやるから。おい、僕が君の賭の對手になる。併しそれは明日だ。今夜はこれから皆で一緒に＊＊＊へ行かうぢやないか。』

『行かう！』とピエールは怒鳴つた。『行かう！……そしてミーシュカも連れて行くんだ。』

かう言つて彼は熊を捕まへて、抱いたり擡げたりしてから、熊と一緒に部屋の中をくるくる廻り初めた。

一〇

ヴシーリイ公爵はアンナ・シェーレルの夜會で、ドルベツカーヤ公爵夫人の一人息子のために約

束した事を實行した。彼に關する請願は皇帝に上奏せられた。そして彼は、一般の例を破つて、セミョーノフスキイ聯隊附の少尉補として、近衛師團に編入せられた。併しクトゥゾフの副官若しくは屬官としての任命は、ドルベッカーヤ夫人のあらゆる奔走請願に拘らず、遂に成功しなかつた。アンナの夜會があつて間もなく、夫人は莫斯科に住んで居る裕福な親戚ロストフ家へ歸つた。此の家には夫人自身も逗留してゐるし、彼女の尊敬する一子ボーレンカ（ボリイスの愛稱）も、幼い時からここで生ひ立つて人となつたのである。ボリイスはつひ此の間普通師團で任官したばかりなのに、又直ぐ近衛の少尉補に轉任する事となつた。近衛師團はもう八月十日に出動したので、目下支度の爲め莫斯科に居殘つてゐる彼も、師團がラジヂーロフへ着く迄に追ひ附かねばならなかつた。

ロストフ家ではナタリヤ――母と妹娘の命名祝日であつた。ボーヴルスカヤ街にある、莫斯科でも有名な伯爵夫人ロストヴの宏壯な住宅へ、祝辭を齎らす馬車の群が、朝から絶間なしに入つたり出たりした。伯爵夫人は美しい長女と共に客間に坐つて、後から入り代り立ち代り訪れる客を迎へてゐた。

伯爵夫人は當年四十五になる、顏の痩せた東洋典型（タイプ）の婦人であつたが、十二人も子供を持つた爲めに、やつれたやうな風であつた。衰弱の爲めに動作や言葉の緩慢なのが、何となく彼女に物物しい重みを與へて、尊敬の念を起させるのであつた。ドルベッカーヤ公爵夫人は内輪の人とし

て其の席に坐つて、來客の案内や話對手の手傳ひをしてゐた。若い人達は來客の應接に携はる必要のない所から、奥の方の部屋に引つ込んでゐた。伯爵は來客を送つたり迎へたりして、一同を晩饗に招待するのであつた。

『わたしとしても、又お祝を受ける當人達から言つても、實に、實に感謝に堪へん次第であります、ma chère（或は）mon cher（共に我が親愛なる人よの意）』と彼は自分より身分の高い人に對しても低い人に對しても、些かの區別も些かの陰影（ニュアンス）もなく、此のマ、シェール若しくはモン、シェルを連發するのであつた。『宜しうございますか、是非晩饗にいらしつて下さい。でないと私を侮辱なさる事になりますよ、モン、シェル。家族全體に代つて心からお願ひ申しますマ、シェール。』

彼は美しく剃り上げた、肉付のいゝ愉快さうな顏に同じやうな表情を浮べ、同じやうに固い握手をし、幾度も幾度も會釋を繰り返し乍ら、是等の言葉を少しの省略も、少しの變更もなしに述べるのであつた。一人客を送り出すと、伯爵は未だ客間にゐる人達の方へ歸つて行つた。そして安樂椅子を引き寄せて、生活といふものを心得、且つそれを樂しむ人に特有の顏附をし乍ら、若い者のやうに兩足を擴げて、手を膝の上に置いた。そして意味ありげに體を搖り乍ら、時には露西亞語、時には頗る拙い癖にお得意の佛蘭西語で天氣模樣の想像をしたり、對手の健康を訊ねたりした。そして疲れてはゐるけれど、義務の遂行には固い人らしい樣子をして、禿げ頭に疎らな胡

麻鹽の毛を撫で付け乍ら、更に控室へ見送りに出て、又晩餐に招待するのであつた。

時には控室から歸りしなに、花部屋と給仕部屋を通り抜けて、大理石作りの大きな廣間へ寄つて見る。其處では給仕等が八十人前の卓(テーブル)に卓布を掛けたり、銀の器(うつは)や陶器(すとものの)を運んだり、卓を並べたり、模樣のある絹の卓布を擴げたりしてゐる。伯爵はそれ等の樣子を見乍ら、家事を一切取り捌いてゐる、貴族生れのドミートリイ・ヴシーリエヂッチを呼んで、『い、か、い、か、ミーチェンカ、萬事手落のないやうに氣を附けろよ。さうだ〳〵。』と言ひ乍ら滿足さうに大きな卓を見廻して、『大切なのは飾りだからな。さう。さう。』と彼は得意げに吐息をつきながら、又客間へ去つた。

『カラーギナの奥さまがお孃さまと御一緒に!』伯爵夫人が外出の時お伴(とも)を勤める從僕が、客間の戸口へ入り乍ら低音でかう取り次いだ。伯爵夫人は一寸考へて、良人の肖像のついた金の嗅煙草入を取つて匂をかいで見た。

『此の訪問にはもう弱つて了ふ』と彼女は言つた。『ぢやもう其の方一人でお終ひにしよう。隨分氣取り屋さんだけれど。通してお呉れ。』と彼女は沈んだ聲で從僕に吩咐けた。その調子はまるで『もう勝手に腹に足る迄打ちのめして下さい!』とでも言ふやうであつた。

脊の高い、肥つた、高慢らしい顏附をした婦人が、顏の丸いにこ〳〵した娘を連れて、衣摺れの音をさせ乍ら、客間へ入つて來た。

『Chère comtesse, il y a si longtemps.....elle a été alitée la pauvre enfant.....au bal des Razoumowsky.....et la comtesse Apraksine.....j'ai été si heureuse (まあ伯爵夫人、本當にお久し振りでございました……あの方はお可哀さうに床に就いてらつしやるんでございますよ……ラズーモフスキイさんのお宅の舞踏會で……そしてアプラクシン伯爵夫人も……わたくしも仕合せでゐます……)』

など、いふ賑かな女の聲が互に對手を遮り乍ら、衣擦れの響や椅子を動かす音と入り交つて聞えた。そして只最初の沈默を機(しを)にして立ち上り、着物をしゆつ〳〵鳴らし乍ら、『Je suis bien charmée; la sante de mamane.....et la comtesse Aprakine (大變面白うございました……お母樣の御健康は……又アプラクシン伯爵夫人が……)』とか何とか言つて、又着物を鳴らし乍ら控室へ出て、毛皮外套(ユウバア)かマントを着て立ち去る——といふ只是れだけの爲めのみに、通常人々の交換するやうな會話が始つた。やがて話題は當時莫斯科市中で重なる噂の種となつてゐた有名な金持で、エカチェリーナ女帝時代の美男子老ベズーホフ伯の病氣と、アンナ・シェーレルの夜會で無作法な眞似をした、其の庶子ピエールなどの事に移つた。

『わたくしはあの伯爵がお氣の毒でなりません。』と客のカラーギナ夫人は言つた。『あの方は健康が大變お悪い上に、今度は又息子さんの爲めに苦勞をなさる、もうあの方の壽命も長くはありませんね!』

『何でございますか?』と伯爵夫人は客の言ふ事が分らない振をしてかう言つた。けれど其の實彼女はもう十五度ばかりも、ベズーホフ伯爵の苦勞の原因を聞かされてゐるのであつた。

『今の教育はあれでございますからね！　おまけに留學までした人なんですけれどもねえ。』と女客は言つた。『あの息子さんは自分の氣儘にしろと言ふ事で、今迄彼得堡に居たのですが、恐しい事を仕出來しましてね、警察の護衛を受けて彼得堡を追放されたんでございますの。』

『まあ！』と伯爵夫人は訊いた。

『あの人はお友達の選擇が悪かつたのでございます。』とドルベッカーヤ公爵夫人が傍から口を入れた。『ワシーリィ公爵の息子さんと、あの人と、それからドーロホフとかいふ人と三人で、本當にお話にもならない事を仕出來したんですの。そして二人共其の報いを受けました。ドーロホフは奪官の上兵卒に落されますし、ベズーホフの息子さんは莫斯科へ送り出されたのです。アナトーリ・クラーギンはお父さんが何うやら揉み消しましたが、矢張り彼得堡はお構ひになつたさうでございます。』

『まあ一體その人達は何をしましたの？』

あの人達は全く追剝でございますよ、殊にそのドーロホフと申しますのが。』と女客は言つた。『あれはマリヤ・イヴーノヴナ・ドーロホヴといふ立派な御婦人の息子さんですが、本當に何といふ事をしたものでせう？ 想像がおつきになりますか？ 其の人達が三人で何處からか熊を手に入れまして、それを自分達と一緒の馬車に乘せて、女優の所へつれて行つたのでございますよ。巡査さ

んが取り鎭めに駈けつけますと、みんな掛りで巡査さんを摑まへて、熊の上に背中合せに結へ附け、モイカの濠へ追ひ込んださうでございます、熊が泳ぐと巡査さんは其の上で・・・』

『其の巡査の恰好はよかつたでせうな、マ、シェール。』と伯爵が腹を抱へ乍ら叫んだ。

『まあ、何といふ恐しい事でございませう！　笑ふどころの騒ぎではございませんよ、伯爵。』

けれど夫人達自身もひとりでに微笑した。

『やつとの事で其の氣の毒な巡査さんを助けたさうですけれど、』と客は語り續けた。『キリール・ヴラヂーミロヰッチ・ベズーホフの息子さんにしては、何といふ賢い巫山戯やうでございませう！』と彼女は附け足した。『大變よく育つた怜悧な方だといふ噂でございますがねえ。まあ大抵留學などの御利益は、みんなさうしたものでございます。何うか此處でも此の人の財産など眼中に置かないで、誰も構ひ附けなければ宜しいがと存じますよ。わたくしも此の人を紹介しようといふ方が有りましたけれど、斷然お斷り致しました。宅には娘達もゐますからね。』

『何うしてあなたは、其の息子さんをそんなに金持のやうに仰しやるのでございますか？』聞かない振をしてゐる令孃達を避けるやうに身を屈め乍ら、伯爵夫人はかう訊ねた。『だつてあの方のお子さんは、みんな奥樣のお腹ぢやございますまい。多分・・・ピエールさんも私生兒でございましたらう。』

客は手を振つた。

『あの方には妾腹のお子さんが二十人くらゐもございませうよ。』

ドルベッカーヤ夫人は察する所、社交界に於ける自分の關係や知識を知らせ度いが爲めらしく、又もや話に口を入れた。

『所がかういふ譯なんですの。』彼女は意味ありげに同じく半ば呟くやうにかう言つた。『ベズーホフ伯爵の評判は隱れもない事でございます…あの方は自分の子供の數さへ忘れてゐらつしやるでせうよ。けれどあのピエールさんは祕藏子なんでございますの。』

『あの老人は全く綺麗な方でしたねえ。』と伯爵夫人は言つた。『未だつい昨年の事でしたけれど！　あれ以上美しい男の方を見た事がありません。』

『今はあの方も大層變りましたよ。』とドルベッカーヤ夫人が言つた。『そこで、わたくしが言はうと思つたのはかうなんですの。奥樣の方から言へば、第一の相續人はヴシーリイ公爵でございます。けれどピエールさんはお父さまの大の氣に入りで、教育にも力を入れて貰ふし、陛下に宛てた上奏文も書いて貰つてゐますから…若しあの方が亡くなれば（あの方は今大變お惡いのですから、みんなそれを覺悟してゐます。それにドクトルのロルランも彼得堡から參りました）、其の時はあの大身代が誰の手に入るか分りませんですよ。ピエールさんでせうか、ヴシーリイ公爵

でせうか？　四萬人の百姓に何百萬といふお金でございますからねえ。わたくしはよく存じてゐます。ヴシーリイ公爵が御自身わたくしに聞かして下すつたのですから。それにベズーホフ伯爵はわたくしに取つて母方の又伯父に當りますの。それでボーリャの洗禮もあの方がして下さいました。』彼女は此の事實に何の價値をも認めないやうな語調で言ひ足した。

『ヴシーリイ公爵は昨日莫斯科へいらつしやいましたよ。何でも檢閲にお出掛けなさるさうでございます。』と客が言つた。

『左樣でございます、けれども entre nous（此處きりの話ですが）』と公爵夫人は言つた。『それは口實でございますの。あの方がいらしつたのは、つまりベズーホフ伯爵が大變お惡いといふので、其のお見舞なんでございます。』

『けれども、シェール、實にいゝですね。』と伯爵は言つたが、母なる客が自分の言葉を聞いてゐないのに氣が附くと、今度は令孃達に向つて、『其の巡査の恰好は嘸面白かつたでせうな。』

と彼は巡査の兩手を振る樣子を仕方で見せて、肥つた體を大きく搖り乍ら、よく響く低音（バス）でからゝと笑つた。それは常によく食ひ、よく飲む人にのみ聞かれる笑であつた。『それでは何うぞ是非共晩餐にお出で下さい。』と彼は云つた。

一

沈默が續いた。伯爵夫人は氣持よくほゝ笑み乍ら客を眺めた。とは言へ『若しあなたが立ち上つてお歸りになつても、決して殘念には存じません。』といつた心持を隱さうともしなかつた。客の令孃は相談するやうな目付で母の顏を眺め乍ら、着物を直し始めた。と不意に次の間から、入口の戸へ向けて走つて來る四五人の男女の足音と、椅子を突き飛ばしたり、倒したりする騷々しい物音が聞えた。と思ふ間もなく、部屋の中へ十三ばかりの女の子が、短いレースの袴で何か包み乍ら駈け込んで、部屋の眞中に立ち止つた。察する所、彼女は無考へで一生懸命に走つてゐる中、こんな遠い所まで飛び込んで了つたものらしい。それと同時に戸口の所へ眞紅な襟の制服を着た大學生と、若い近衞の將校と、十五ばかりの女の子と、短い上衣を着た頰ぺたの赤い丸々した男の子が現れた。

伯爵は飛び上つて、よろ〳〵しながら兩手を擴げて、駈け込んだ女の子を抱き寄せた。

『あゝ、ナターシャか！』と彼は笑ひ乍ら叫んだ。『お祝の本尊です！　マ、シェール、お祝の本尊です！』

『Ma chère, il y a un temps pour tout（ねえお前、何事でもそれぞれ時といふものがあります）』と伯爵夫人は恐い顏をし乍ら言

つた。『あなたがいつも甘やかしなさるからですよ。エリー、（イリヤーの佛語風の發音）』と彼女は良人に向つて言ひ足した。

『Bonjour, ma chère, je vous félicite（今日は、お孃さん、お祝ひを申します）』と客は言つた。『何といふ可愛いお子さんでせう』今度は母夫人の方へ向き乍ら附け足した。

目が黑くて口の大きい、美しくはないけれど生き〳〵した女の子は、餘り早く走つた爲めに、小さな子供らしい肩を着物の陰でひく〳〵動かしてゐた。黑い渦を卷いて後ろに溢れた髮、露はな細い手、レースの袴に甲の開いた靴を穿いた小さな足などを見てゐると、彼女が今丁度世俗の所謂、『娘はもう子供でないが、子供は未だ娘にならない』といふ可愛い年齡に達してゐる事が分つた。彼女は父の手から脫け出して母の方へ走つて行つた。そして其の嚴つい言葉には少しも注意を向けないで、眞赤になつた顏を母のレースの婦人外套に隱して笑ひ出した。彼女は袴の下から人形を取り出して、千切れ〴〵に何か言つては笑ふのであつた。

『ほら？……人形が……ミーミイが……ほら。』

ナターシャはそれから先が言へなかつた（彼女は何かかも可笑しく思はれたのである。）彼女は母の胸に倒れて、大きな聲でから〳〵と笑ひ頽れた。一同は——氣取つた女客さへつい我れともなしに笑ひ出した。

『さあ、あつちィお出で〳〵、其の不具者を持つて！』母夫人はわざと怒つたやうに娘を突き退けながらかう言つた。『これがわたしの乙娘でございます。』と今度は客の方へ向いた。

ナターシャは一寸其の顔を母のレース織の頸巻から放して、笑ひ泣きの涙の隙から母の顔を打ち仰いだが、又直ぐに顔を隠して了つた。

此の家庭團欒の舞臺面を見せ附けられた女客は、一寸お愛嬌に其の仲間へ入らなければなるまいと考へた。

『ねえお孃さん』と彼女はナターシャに向つてかう言つた。『此のミーミーさんはあなたの何に當りますの？　屹度娘さんでせう？』

小兒同志の會話へお義理に口を入れた客の調子が、ナターシャの氣に入らなかつたので、彼女は何にも答へないで、眞面目に客の顔を見詰めた。

其の間に若い連中（ドルベツカーヤ夫人の息子なる士官のボリース、伯爵の長子ニコライ、伯爵の姪に當る今年十五のソーニャ、末子のペトルーシャ）は、みんな客間の中に席を取つた。そして未だ彼等の顔面筋肉の一本々々に躍動してゐる活氣と喜悅とを、禮讓といふ節度の中に抑へ込まうと努めて居るらしかつた。察する所、あゝして慕地に此處へ走つて來る前に、奥の間で彼等の交換してゐた會話は、此の客間に於ける他人の蔭口や、時候の挨拶や、伯爵夫人アプラクシン

の話より、ずつと愉快なものであつたに相違ない。時々彼等は互に顔を見合せて、やつとの事で笑を怺へてゐた。

二人の青年、卽ち大學生と將校は幼い頃からの友達で、年齡も同い年、そして二人とも美男子であつたけれど、互に似た所と言つては少しもなかつた。ボリースは脊の高い、髪の亞麻色をした、輪廓の纖細に整つた、落ち着いた美しい顔立の青年であつた。ニコライは脊の餘り高くない、髪の渦を卷いた、顔の表情の明け放しな若人であつた。其の上脣にはもう黑い髭が見え、顔全體に突進的な感激性が表はれてゐた。ニコライは客間に入るや否や眞赤な顔をした。多分何を言はうかと考へたけれど、適當な言葉を發見しなかつたものらしい。ボーリスは反對に直ぐ頓智の才を現はして、落ち着いた冗談まじりの口調で、自分は此の人形のミーミイを若い娘の時分から知つてゐて、其の頃は未だ鼻も缺けてゐなかつたが、彼が記憶してから五年の間にすつかりお婆さんになつて、頭蓋骨に一杯ひびが入つて了つた、などと語つた。語り終つて彼はナターシャを見た。ナターシャはくるりと彼に脊を向けて弟の方を見ると、ペトルーシャは目を細くし乍ら、聲も立てずに體を搖り〳〵笑つてゐた。と、もう堪らなくなつて飛び上り、素敏こい足に有りたけの力を籠めて、大急ぎで部屋を駈け出して了つた。ボリースは笑はなかつた。

『あなたも矢張りお出掛けなさる筈でしたね、おつ母さん！　馬車が要るでせう？』微笑を帶

びて母の方へ向き乍ら、彼はかう言つた。

『あゝ、早く行つて支度するやうに吩附けてお呉れ。』ほゝ笑みながら母は言つた。

ボリースは靜かに戸口を出て、ナターシャの後を追つた。肥つた男の子――ペトルーシャは自分の仕事を搔き廻されたのを口惜しがるやうに、腹立たしげに二人の後から駈け出した。

一二

伯爵夫人の長女と(此の人はもう妹より四つ年上で、萬事大人のやうに振舞つてゐた。)客の令孃を除けると、若い人達で部屋に殘つたのは、ニコライと姪のソーニャであつた。ソーニャはほつそりとした小造の黑髪女で、柔い眼眸は長い睫で陰を附けられ、濃い黑髮は編まれて二重に頭を卷いてゐる。そして顏や手――殊に瘠せて優美な、筋の浮いて見える細い手と、頸の皮膚は黃味を帶びてゐた。滑らかな動作や、柔く靭やかな小さい四肢や、幾分狡猾で控へ目な擧動などは、未だ充分整はぬ乍らも、大きくなつてからの立派さが想ひ遣られるやうな、美しい猫の子を連想させるのであつた。見た所彼女は、微笑を以て一座の會話に對する興味を現すのを、禮儀だと考へてゐるらしい。併し何時とはなしに彼女の眼は濃く長い睫の下から、處女らしい熱情の溢れた尊敬の色を以て、近く軍隊に入らうとしてゐる從兄の方を眺めてゐた。で彼女の微笑は只の一分間

も、人の目を欺く事は出來なかつた。子猫が此處に坐つたのは、只前よりも一層元氣よく飛上つて、從兄と遊ぶ爲めのみであつた。早く自分達もボリースとナターシャのやうに、二人で此の客間を拔け出すことが出來ればいゝ、とかう言ふ氣色があり〳〵と見られた。

『實はですね、マシェール』伯爵は客のカラーギナ夫人に向つて、ニコライを指さし乍らかう言ひ出した。『これの友達のボリースが將校に任官したので、友情として友達を捨てる譯に行かぬと言つて、大學も老人のわたしも打つちやつて、軍隊に入らうとしてをるんですよ、マシェール。もう官文書記錄所では、任官の場所も決めてるんですよ。これが一體友情といふものでせうかね?』と伯爵は問ひ掛けるやうに言つた。

『さやうですね、でも宣戰の布告があつたさうでございますから。』と客は言つた。

『それはもう前から話があつたのです。』と伯爵は言つた。『そして又此の後も話があつて、又其の次にもあつて、それでお終ひなんですよ、マシェール。これが一體友情でせうか?』と又同じ事を繰り返した。『これは輕騎兵に入らうとしてゐるのです。』

客は何と言つてい、か分らないので只頭を振つた。

『決して友情の爲めぢやありません。』ニコライはかつとなつて、まるで自分に取つて恥づべき誹謗でも避けるやうに、顏を反け乍ら答へた。『決して友情ぢやありません。只單に軍務に對する

天職を感じたからです。』

かう言つて彼は從妹と客の令孃の方を振り向いた。すると二人の女は贊成するやうな微笑を浮べて、其の目を迎へた。

『今日わたし共へバヴログラード輕騎兵聯隊の、シューベルト大佐といふ方が晩餐に見えます。今丁度暇暇で當地に滯在してをられるのですが、此の人がこれを連れて行つて下さる事になりました。いやはや何とも仕方がありません。』多くの悲しみを以て購つたらしい事柄を、肩を縮め乍ら冗談のやうに伯爵は言つた。

『だから僕はもう言つたぢやありませんか、お父さん。』と息子は言つた。『若し何處迄も僕を手放し度くないとお思ひでしたら、僕家に殘ります。併し僕は自分にもちやんと分つてます。僕は軍隊以外何處にも適當しない人間なのです。僕は外交家でもなければ官吏でもありません。だつて自分の感じた事を隱す事の出來ない性分なんですもの。』美しい青春の媚びを浮べながら、絕えずソーニャと客の令孃を眺め〳〵、彼はかう言つた。

小猫は吸ひ寄せられたやうに彼を見詰め乍ら、何時でも猫の本性を表はして跳ね廻りさうな樣子を示した。

『まあ、まあよろしい！』と老伯爵は言つた。『すぐむきになるんだからなあ。あのボナパルトの奴が、みんなの頭を滅茶々々に搔き廻して了つたんだ。みんなナポレオンが中尉から皇帝になつた事ばかり考へてゐる。あゝあ、仕樣がない。』カラーギナ夫人の冷笑的な微笑には氣も附かず、彼はかう附け足した。

大人連はボナパルトの事を話し出した、カラーギナ夫人の令孃ジューリイは若いロストフに向つて、

『此の間の金曜日に、あなたがアルハーロフさんへいらつしやらなかつたので、本當に殘念でございましたわ。わたしあなたがゐらつしやらないと、全く詰らないんですのよ。』と彼女は優しくほゝ笑み乍ら言つた。

持ち上げられて嬉しくなつた青年は、若々しい媚を含んだ微笑を浮べ乍ら、彼女に近く席を替へて、絕えずにこ〳〵してゐるジューリイと差し向ひで話を始めた。我れともなしに浮んだ此の微笑が嫉妬の刃となつて、赤い顏をしてわざとらしくほゝ笑んでゐるソーニャの胸を貫いた事には、彼は少しも氣が附かなかつた。話の途中彼はふとソーニャの方を振り向いた。彼女は一念籠めた毒毒しい眼附で彼を眺めたが、湧き來る涙をやつとの事で怺へ乍ら、唇に空々しい微笑を浮べて立ち上ると、部屋を出て了つた。ニコライの元氣附いた色は忽ちにして消え失せた。彼は話の切れ目を待ち兼ねて、興醒めな顏をしながらソーニャを探しに部屋を出た。

『あの若い人達の祕密が白い絲で縫ひ合されてる事は何うでせう！（註―隱し方の拙きを言ふ）』ドルベッカーヤ公爵夫人は、出て行くニコライを指さし乍らかう言つた。『Cousinage dangereux voisinage（從兄妹同志は危險な隣り同志ですね）』と彼女は附け加へた。

『さう。』若い人達と共に客間へ射し込んだ太陽の光りの消えた時、伯爵夫人はかう言つた。それは丁度誰にも問ひ掛けられた譯ではないけれど、常に彼女の心を占めてゐる問題に對して、解答するやうな調子であつた。『今はあの子等を見ても悅ぶ事はなくて、何といふ苦しみや心配の多い事でせう！　全く今は樂しみよりも心配の方が多い位ですの、しよつちう恐れてばかり居ります！　今が丁度女の子に取つても男の子に取つても、一番危險の多い年頃でございますからねえ。』

『萬事教育次第でございますよ。』と客の夫人は言つた。

『えゝ全くさうでございます。』と伯爵夫人は語を續けた。『今迄わたくしは有難い事に子供等の友達として、皆から信用を受けてゐますの。』子供は親に對して祕密がないものと考へてゐる、多くの親達の迷ひを繰り返しつゝ、夫人はかう言つた。『わたしは何時でも娘達の一番の Confidente（相談相手）になれると存じます。ニコーレンカはあの烈しい氣性ですから、多少惡戲をする事があるかも知れませんけれど、（男の子はこれが無くては立ち行きませんからねえ）、それでも今仰しやつた彼得堡の人達のやうな事はございません。』

『さうだ、みんな、みんないゝ子供達だ。』と伯爵は相槌打つた。彼は何時でも面倒なこぐらかつた問題を解決するのに、此の『いゝ』を持ち出すのがお決りであつた。『今度だつてほら、輕騎兵を志願したぢやないか！　何を其の上に望む事があるかね、マシェール？』

『お宅の小さいお嬢さんは何て可愛い方でせう。』と客は言つた。『まるで火藥のやうでございますね。』

『さうです、火藥です！　わたしにそつくりですよ！』と伯爵は言つた。『それに何といふ聲でせう。自分の娘の自慢ぢやありませんが、全く唱ひ手になれますよ。第二世サロモニイです。家では伊太利人を一人傭つて教へさしてゐます。』

『早過ぎはしませんでせうか？　あの年頃に習ふのは聲の爲めに惡いとか申しますが。』

『いゝえ何う致しまして、なんの早過ぎるものですか？』と伯爵は言つた。『ではわたし達の母親時代の人が十二三で嫁に行つたのは、あれは何うしたものでせう？』

『今あの子はもうボリースに戀をしてるんでございますからね！　何といふ子でせう！』伯爵夫人はボリースの母の顏を見て、靜かにほゝ笑み乍ら、常に其の心を占めてゐる想念に答へるやうにかう言つた。『ところでねえ、若しわたくしがあの子を嚴重に監督して、いろんな事を禁めて了つたら、それこそあの子達は内緒で何を仕出來すか分りません、夫人は接吻の事を言つたので

ある。だけど今の所、わたくしはあの娘(こ)の一言一行みんな存じてゐます。あの子が夕方になるとわたくしの所へ走つて來て、すつかり話して呉れますの。若しかしたら、甘やかし過ぎるのかも知れませんね。けれど全くの所、此の方がよさゝうでございますの。わたくし姉の方は嚴重に育てましたけれど。』

『え、、わたしは丸で別な育て方をされましたわ。』美しい姉妹のゼーラがほゝ笑み乍ら言つた。

けれども此の微笑は普通の人に見られるやうに、ゼーラの顏を彩らなかつた。反對に彼女の顏は不自然になつて、從つて不快に感じられた。長女のゼーラは美人でもあるし、賢くもあるし、學問も立派に出來れば教育も行き届き、聲も快い響を持つてゐた。そして彼女の言つた事は、理に適つて場所柄にも合つてゐた。けれど不思議にも一同の者は——伯爵夫人もカラーギナ夫人も、何故ゼーラがこんな事を言つたのだらうと、驚いたやうに彼女の方へ振り向いて、一種の間の惡さを感じたのである。

『何處でも上のお子さんには苦心なさいますよ、何か非凡なものに仕上げようと思ひまして ね。』と客の夫人は言つた。

『ぢや別に隱し立てもしませんが、全く家内はゼーラに隨分力を入れたですよ。』と伯爵は言つた。

『それで結果はどうです！　御覽の通りい、娘が出來上りました。』讃めそやすやうにゼーラに瞬(まばた)きをして見せ乍ら、彼はかう言ひ足した。

客は立ち上つて晩餐に來る事を約し乍ら辭し去つた。

『まァ何といふ作法だらう！　隨分坐り込んだもんだねえ！』伯爵夫人は客を見送つてからかう言つた。

一三

ナターシャは客間を駈け出したけれど、花部屋迄しか來なかつた。此處で彼女は立ち止り、客間の話聲に耳を傾け乍ら、ボリースの出て來るのを待つて居た。彼女はもうじれつたくなつて來て、とんと足踏をし乍ら泣き出しさうになつた。それは只ボリースが今直ぐ來て呉れないからと云ふだけに過ぎなかつた。と、餘りのろくもなければ又餘り早くもない、嗜みのよい青年の足音が聞え始めた。ナターシャは急に花の植わつた桶の間に駈け込んで身を隱した。

ボリースは部屋の眞中に立ち止つて邊りを見廻し、軍服の袖から埃を拂ひ落すと、姿見に近寄つて自分の美しい顏を眺め初めた。ナターシャは息を潜め乍ら、今度は何をするだらうと隱れ家から窺つてゐた。彼は暫く鏡の前に立つてゐたが、やがて微笑して出口の方へ歩き出した。ナター

シャは呼び止めようかと思つたが、又考へ直して、『少し探さしてやらう』と獨り言ちた。ボリースが出て行くや否や、又一方の戸口からソーニャが眞赤な顔をして、涙の際に何やら腹立たしげに呟き乍ら入つて來た。ナターシャは其の方へ駈け出して行き度いといふ發作的の欲望を壓へて、矢張り自分の隱れ家に殘つて居た、丁度隱れ簑の中から世間の出來事を眺めるやうな工合に。ソーニャは何やら呟き〳〵、頻りに客間の戸口を振り返つて見た。戸の中からはニコライが出て來た。

『ソーニャ！　一體何うしたの？　そんな事があつてい、ものかね？』彼女の傍へ走り寄りながら、ニコライはかう言つた。

『何でもないの、何でもないの、打つ棄つて頂戴！』とソーニャはしやくり上げた。

『い、や、僕何故だか知つてる。』

『さう、御存じなら結構だわ。さあ早くあの方の所へいらつしやい。』

『ソーニャ！　たつた一言聞いて呉れ！　そんな邪推の爲めに僕を苦めた上、自分まで苦めるつて法があるものかね？』ニコライは彼女の手を取り乍らかう言つた。

ソーニャは自分の手を振り放さうともしないで、泣き止んで了つた。ナターシャは身動ろぎもせず息を凝らして、目を輝かせ乍ら隱れ家から窺つてゐた。『今度は何をするだらう！』と彼女は考へた。

『ソーニャ！　僕は世界をそつくりやらうと言はれても欲しくない！　お前は僕の爲めにすべてなんだもの。』とニコライは言つた。『僕それを證明して見せる。』

『わたしあんたがそんな言ひ方をなさると厭なのよ。』

『ぢや言はない、ね、堪忍してお呉れよ、ソーニャ！』と彼はソーニャを引き寄せて接吻した。

『まあ、本當にい、わねえ！』とナターシャは思つた。ソーニャとニコライが部屋を出て行つた時、彼女も續いて其處を出て、ボリースを呼んで來た。

『ボリース！　此方イいらつしやい。』と彼女は意味ありげな狡い顔付をして言つた。『わたしあんたに一寸言ひ度い事があるの。』と言つて、彼女はボリースを花部屋の中の、さつき自分が隱れてゐた所へ連れて來た。

ボリースはほゝ笑みながら其の後に隨つた。

『其の一寸てのは何？』と彼は訊ねた。

ナターシャは少しれて邊りを見廻した。そして植木桶の上へ抛り出された人形が目に附くと、それを兩手に取り上げた。

『此の人形を接吻して頂戴。』と彼女は言つた。

ボリースは注意深く優しい眼附で、彼女の生き〳〵した顔を眺めたが、何にも答へなかつた。

『お厭？　ぢや此方ィいらつしやい。』と言つて、ナターシャは花の間を尙奥深く入つた。そして人形を抛り出し乍ら、『もつと傍へ、もつと！』と囁いた。

彼女は兩手で若い將校の袖口を摑へた。其の赤くなつた顏には得意と恐怖の色が見えた。

『わたしを接吻するのはお厭！』額越しに對手を見上げ乍ら、興奮の餘り泣き出さないばかりの樣子で、聞えるか聞えないか位に囁いた。

ボリースは赤くなつた。

『何てあんたは可笑しな人でせう！』と言つて、彼は段々と對手の方に屈みかゝるやうにし乍ら、いよ〳〵顏を赤くした。が此方からは何も仕掛けないで待つてゐた。

ナターシャは不意に桶の上に飛び上つた。するとボリースより脊が高い位になつた。と不意に細い露はな手を、男の首より少し上の邊に卷いて抱きしめた。そして頭を一振りして髪を後ろに拂ひのけると、其の儘彼の唇の眞上に接吻したのである。

彼女は植木鉢の間をくゞつて今一方の側へ出た。そして頭を垂れ乍ら立ち止つた。

『ナターシャ』とボリースは言つた。『あなたも知つてるでせう、僕はあなたを愛してゐます。けれど……。』

『あなたわたしに戀してて？』とナターシャは遮つた。

『え、戀してます。けれどね、何卒今……のやうな事はしないで下さい……もう四年……その時僕はあなたに結婚を申し込みますから。』

ナターシャは一寸考へて、

『十三、十四、十五、十六……』と細い指を折つて勘定し乍ら『い、わ！　それでお終ひなんでせう？』

歡喜と安心のほゝ笑みが其の生き〳〵した顏を照した。

『お終ひです。』とボリースが言つた。

『何時までも？』とナターシャが言つた。『死ぬ迄も？』

かうして彼女は男の手を取つて、幸福に顏を輝かし乍ら、二人並んで靜かに長椅子部屋へ行つた。

一四

伯爵夫人は訪問客の爲めに疲れ切つたので、もう誰にも面會せぬ旨を言ひ渡し、只お祝に來た人は必ず晩餐に招待するやうにと、玄關番に命じた。伯爵夫人は幼な友達のドルベツカーヤ公爵夫人と、二人切り差し向ひで話し度かつた。彼女は公爵夫人が彼得堡から歸つて以來、ろく〳〵

顔も見なかつたのである。アンナ・ミハーイロヴナは例の涙つぽい、けれども氣持のいゝ顔をして、伯爵夫人の安樂椅子に近々と寄り添つた。

『わたしあんたに何もかも打ち明けて了ひます。』とドルベッカーヤ夫人は言つた。『もうわたし達の古いお友達は少くなつて了ひましたねえ。それだから尙更わたしはあんたの御親切を有難く思ふんですよ。』

かう言つてドルベッカーヤ夫人は、エーラの顔を見ると言葉を切つた。伯爵夫人は友の手を握りしめた。

『エーラ、』見受けた所、あまり氣に入りでなささうな長女の方を向いて、伯爵夫人はかう言つた。『何うしてお前は何に附けても考へがないのだらうね。お前が此處に居たつて邪魔になるばかりだのに、それに氣が附かないんですか？　妹の所へ行くか、それとも……』

美しいエーラはまるで侮辱を感じたらしい樣子もなく、嘲るやうに微笑した。

『もつと早くおつ母さんがさう言つて下すつたら、わたし直ぐ出て行きましたのに。』と言つて自分の部屋の方へ赴いた。

けれども長椅子部屋の傍を通りかゝつた時、其の中で二つの窓の傍に對偶的に腰掛けた、二組の少年少女に氣が附いた。エーラは立ち止つて蔑すむやうに薄笑ひした。ソーニャはニコライの

傍近く坐つて居た。ニコライは自分が始めて作つた詩を、彼女の爲めに書いてやつてゐる所であつた。ボリースとナターシャは別の窓の下に坐つてゐたが、エーラが入ると急に默つて了つた。ソーニャとナターシャは罪人のやうな、併し幸福らしい顔をしてエーラを見上げた。

（是等の戀する少女を見てゐると、樂しい感激を覺えるものである。併しエーラの心には彼等の樣子が、あまり快い感じを呼び起さなかつたらしい。

『わたし何度言つたか知れませんよ。』と彼女が言つた。『わたしの物を使つちやいけないつて。あんた方には自分の部屋があるぢやありませんか。』

かう言つて彼女はニコライからインキ壺を奪つた。

『今直ぐ、今直ぐ。』彼はペンを突つ込み乍らかう言つた。

『あんた方は何でも突拍子な事をするのが十八番ねえ。』とエーラは言つた。『客間へどたばた走つて來たりなんかするものだから、みんなあんた方の爲めに間の惡い思をしましたよ。』

彼女の言つた事が全然尤もであつたにも拘はらず――いや尤もであつた爲めかも知れぬ――誰も彼女に返辭しないで、四人とも只互に目交せするのみであつた。エーラは手にインキ壺を持つた儘、部屋の中に何時迄もぐづぐゝして居た。

『それにあんた方の年頃で一體何んな祕密があるんでせう――ボリースとナターシャだつてさ

うだわ。みんな詰らない馬鹿々々しい事よ！』

『それが姉さんに取つて何うした言ふの、ゼーラ？』とナターシャは小さな聲で辯護するやうに言つた。彼女は此の日常にも增して、すべての人に親切で優しくなつたやうに思はれた。

『本當に馬鹿々々しい。』とゼーラは言つた。『わたしあんた方の爲めに極りが悪くなるわ。祕密つて一體何ですの・・・』

『人は誰だつて各々祕密があつてよ。わたし達も姉さんとベルグさんの事なんかにおせつかいしませんからね。』とナターシャは熱くなつて言つた。

『わたしもさう思ふわ、おせつかいなんか出來ないでせう。』とゼーラは答へた。『何故つてわたしのする事には、何一つ悪い事なんかある筈がないんですもの。わたしはおつ母さんに言ひ附けて上げるわ。あんたがボリースと何んな附合ひ方をしてるか・・・』

『ナターリヤ・イリーニチナ（ナターシャの正式の呼方）は僕に對して、立派な附合ひ方をしてゐらつしやいますよ。』とボリースが言つた。『僕少しも不平なんか有りません。』

『お止しなさいな、ボリース、あんたは本當に外交家ねえ（外交家といふ言葉は當時の子供達の間に、一種特別な意味を附けられて大流行であつた）。厭になるわ。』とナターシャは侮辱されたやうな慄へ聲で言つた。『何だつて姉さんはうるさくわたしを付け廻すんでせう！　姉さん、これは

何うしたつてあんたに分りつこないわ。』彼女はゼーラに向つてかう言つた。『何故つてあんたは今迄一度も人を愛した事がないからよ。あんたには情といふものがないんだわ。あんたはマダム・ド・ジャンリよ（これはニコライがゼーラに與へた綽名で、非常に侮蔑的なものとされてゐた。）あんたは人にいやな思をさせるのが一番樂しみなのよ。姉さんは勝手に幾らでもベルグさんの御機嫌を取つたらい、わ。』彼女は早口にかう言つた。

『でもね、わたしはお客樣の前で、若い男の人を追つ駈け廻すやうな事はしませんからね・・・』

『到頭望み通りになつたね。』とニコライが口を入れた。『みんなにいやな事ばかり言つて、すつかり興を醒して了つた。さあ子供部屋へ行かうぢやないか。』

四人の者は物に驚いた小鳥の群のやうに、立ち上つて部屋を出て行つた。

『わたしがいやな事を言はれただけで、わたしは誰にも何も言やしないわ。』とゼーラは言つた。

『マダム・ド・ジャンリ！　マダム・ド・ジャンリ！』と笑ひ乍ら囃し立てる聲が戸の外から聞えた。

一同を苛立たしい不快な心持にして了つたゼーラは、見受けた所、今あんな事を言はれた爲めに格別氣色を損じた樣子もなく、姿見に近附いて襟卷と髪を直した。自分の美しい顔を眺めてゐる彼女は、一層冷やかに落ち着いて來たやうであつた。

客間では會話が續いた。

『Ah, chère』と伯爵夫人は言つた。『わたしの生涯でも tout n'est pas rose（すべてがバラの花ではありません）。わたしよく分つて居ます、今のやうな暮しの仕方では家の財産も長くは持ちません！　それもこれもあの倶樂部と、主人の人のいゝ爲めです。田舍に引つ込んでも、些つとも骨休めにはなりやしません。やれ芝居だ、やれ獵だのつて、それはまあ大變なんですもの。だけどわたしの事なんか言つたつて仕方がありません。一體あんたは何うしてすつかりあんな風に拵へ上げたんですの？　わたしはよくあんたのやり方を見て驚くんですよ、アンネット、何うしてあんたは其の年になつて、やれ莫斯料、やれ彼得堡と飛び歩きながら、大臣方や其の他有名な人達の所へ出掛けて、いろんな人に應對する事が出來るんでせう、全く驚きますね！　え、何うしてあんなに巧く行つたんですの？　わたしなぞは到底もあんな事出來やしませんよ。』

『いゝえね、あんた、』とドルベッカーヤ夫人は答へた。『あんたには何うかしてそんな事を知らせ度くないものですよ。全く崇拜と言つていゝ位愛してゐる一人息子を連れて、何の賴りもない寡婦（やもめ）暮しをするのは、何んなに苦しい事でせう。自然何んな事でも習ひ覺えて了ひます。』と幾分誇りを感じながら公爵夫人は語を續けた。『わたしの經驗がいろんな事を敎へて呉れたんですの。若し今の頃株といはれるやうな人達に、會はなければならぬ用事が出來たら、わたしは princesse

une telle（何々と申す一公爵夫人）某様に御面談致し度く』といつたやうな手紙を書いて、辻馬車を傭つて自分で二度でも三度でも四度でも、わたしの望みを遂げる迄何度でも押し掛けて行きます。わたしは人が何と思はうと構やしません。』

『だけどあんたは何うして、誰にボリースの事を賴んだんですの？』と伯爵夫人が訊ねた。『あんたの息子さんはもう近衞の將校だのに、ニコールシカは見習士官で出て行くんですよ。だつて誰も運動する人が無いんですもの。あんたは誰に賴んだんですの？』

『ワシーリィ公爵ですよ。あの方が大變親切にして下すつてねえ。すぐにすつかり呑み込んで皇帝に上奏して下すつたんですの。』自分の目的を達する爲めに、何んな屈辱を忍ばなければならなかつたか、と云ふ事を忘れて了つて、ドルベッカーヤ公爵夫人は歡喜に餘る聲でかゝり言つた。

『何んなですのワシーリィ公爵は、年を取りましたか？』と伯爵夫人は訊いた。『わたしルミャンツェフさん所のお芝居以來、あの方にお目に掛らないんですよ。多分わたしの事も忘れてらつしやるでせうね。Il me faisait la cour（あの方は一頃わたしの後を追ひ廻したもんです）』と伯爵夫人は昔を想ひ出してほゝ笑んだ。

『矢つ張り昔の儘ですよ。』とドルベッカーヤ夫人は答へた。『みんなに愛嬌を振り撒いてゐます。Les grandeurs ne lui ont pas tourné la tête du tout（名譽な地位もあの人を逆上させなかつた樣ですよ）。』公爵夫人、わたし

はあなたの爲めに實に輕少なお務めしか出來ないのを、非常に殘念に存じますが、併し何でも仰しやつて下さい。」とこんなに言はれるんですの。いゝえね、あの方は全く立派な親切な方ですよ。けれどねえナタリィ、わたしが何んなにボリースを愛してるか、あんたよく知つて下さるでせう。わたしはあの子の幸福の爲めには、何んな事だつてして遣り度いんですけどねえ、わたしの境界は全く酷いんでしてね。』と公爵夫人は憂を含ませ乍ら聲を潜めた。『全く酷いんでしてね、わたしは本當に恐しい破目に落ちてるんですの。わたしの不仕合せな身の上のために、持つて居た物をすつかり磨り耗らして了つて、もう二進も三進も動かないんです。こんな事を言つても、あんたは本當にしないでせうけれど、わたしの手許には à la lettre（文字通り）十カペイカのお錢もないんですよ。わたしは何うしてボリースの仕度をして遣つたらいゝのか……（と彼女はハンカチを出して泣き始めた）。わたし何うしても五百ルーブリのお金が入り用なのに、今二十五留札がたつた一枚しかないんですの、わたしの境遇はこんなのですよ……今の所たつた一つの望みはベズーホフ伯爵だけなんです。若しあの方が自分の名附け子を助けてやらう――だつてあの方がボーリャの洗禮をして下すつたんですものね――あの子の補助費として何程か殘して遣らう、といふお氣が無かつたら、わたしの心配も無駄になつて了ひます。わたしはあの子の仕度をして遣るお錢も無い事になります。』

伯爵夫人は涙ぐんで、無言の儘何やら思ひ廻らしてゐた。

『こんな事罪かも知れませんけれど、わたしいよつちう考へますの、』と公爵夫人は言つた。『あのベズーホフ伯爵はたつた一人身のお暮しなのに……あゝいふ莫大な財産を持つてゐらつしやる……まあ一體何の爲めに生きてらつしやるんだらう？　あの方に取つて生きるといふ事は苦しみだが、ボーリャはこれから生活を始めようといふ體だから……などとねえ。』

『あの方は屹度ボリースに何かお殘しなさるでせう。』と伯爵夫人が言つた。

『さあ何うですかね chère amie（親愛なる友よ）全體金持だの貴族だのつてものは、恐しい利己主義ですからねえ。だけど、わたしはこれからボリースを連れて行つて、眞直にかう〳〵だと打ち明けます。わたしの事なんぞ勝手に何とでも考へさして置きませう。これで息子の運が決るんですもの（と公爵夫人は立ち上つた）。今二時ですね、四時には御飯でせうから、それ迄に歸つて來ます。』

時間を利用する彼得堡の實際的な婦人の態度で、ドルベツカーヤ公爵夫人は息子を呼びに遣つて、二人連れで控室へ出た。

『ちや行つて來ますよ。』彼女は戸口まで見送りに出た伯爵夫人にかう言つた。『わたしの成功を祈つて下さい。』と息子を憚るやうに彼女は小聲で言ひ足した。

『あなたベズーホフ伯爵の所へいらつしやるんですか。』同じく控室へ出ようとして伯爵は食堂

から聲を掛けた。『もし伯爵の容體がいゝやうだつたら、ピエールさんを晩餐に呼んで下さい。あの人も以前よく家へ遊びに來て、子供等と舞踏なんかしたもんですよ。是非呼んで下さい。一つ見て見ませう、今夜タラス(料理人)が何んな立派な腕を振ふかね。あれの言草だと、オルローフ伯爵の所でも、今夜家でするやうな晩餐會は、今迄一度も無かつたさうですよ。』

一五

『ねえ、ボリース、』二人を乘せたロストフ伯爵夫人の馬車が、轍の響を消す爲めに藁を敷きつめた町を通り拔けて、ベズーホフ伯爵家の廣い邸内に入つた時、ドルベツカーヤ夫人は息子にかう言つた。『ねえ、ボリース』と母は古い外套の下から手を伸して、息子の手の上に置き乍ら、『何うか成る可く愛想よく、そして萬事に氣を付けてお呉れな。キリール・ヴラヂーミロヰッチ伯爵は何と言つてもお前の名附親なんだから、お前の將來の運はあの方一つで何うとも決るんですよ。よくそれを覺えて、ねmon chère、そして出來るだけ愛想よくしてお呉れ。』

『こんな事をして、屈辱以外に何か得るものがあるとしたらね…』と息子は冷かに答へた。『併し僕は約束したんだから、お母さんの爲めに曲げて其の通りにします。』

誰かの馬車が車寄せに止つたのは分つてゐる癖に、玄關番は親子の樣子を見て(二人は取次も

頼まず、兩側の壁龕に据ゑてある彫像の列の間を通つて、眞直に硝子張りの玄關へ入つたのである)、意味ありげに夫人の古い外套を眺め乍ら、令孃か伯爵か何方に會ひ度いのかと訊ねた。伯爵に會ひ度いのだと聞くと、閣下は今容體が惡くて、誰にも面會なさらぬ由を告げた。

『ぢや僕等は歸つてもいゝでせう。』と息子は佛蘭西語で言つた。

『Mon ami(これお前)』と母は祈るやうに言つて息子の手に觸つた。恰もこれ一つが彼を和めたり、興奮さしたりする力を持つてゐるかのやうに。

ボリースは口を噤んだ。そして外套を脫がないで訝かしげに母の顏を眺めた。

『ねえお前さん。』とドルベツカーヤ夫人は、玄關番に向つて優しい聲で言つた。『伯爵がご重態だといふ事はわたしも知つて居ます、わたしが來たのも其の爲めなんだから…わたしは親族のものですよ…わたしは決して御迷惑なんか掛けやしません…わたしは唯クラーギン公爵に目に掛り度いんだからね。公爵は此處に御逗留なんだらう。何うか一寸取り次いで頂戴。』

玄關番はむづかしい顏をして二階に通ずる紐を引き乍ら、くるりと背中を向けた。

『ドルベツカーヤ公爵夫人がヴシーリイ公爵に御面會です。』二階から駈け下りて、階段の突き出た所から顏を覗けた取次に向つて、彼はかう叫んだ。取次は長い靴下に短靴をはいて、燕尾服を着込んでゐた。母は染め直した着物の襞を直し乍ら、壁に嵌め込んである一枚硝子のヱネチア式

姿見を一寸眺めて、踵の耗つた靴で階段の毛氈を踏み乍ら、おめず臆せず二階へ上つて行つた。

『Mon ami, vous m' avez promis（ねボリース、お前わたしに約束しましたよ）』又興奮さすやうに一寸息子の手に觸り乍ら、彼女はかう言つた。

息子は伏目勝ちに柔順しく母に隨つた。

二人はとある廣間に入つた。其處からは一つの戸口を通じて、ヴシーリイ公爵に當てがはれた室へ行かれるやうになつて居た。

親子が部屋の眞中に進んで、丁度二人が入ると同時に駈け出して來た老從僕に、道を訊かうと思つてゐる途端、とある扉の青銅の把手がくるりと廻つて、天鵞絨の外套に勳章を一つだけ附けた不斷着のヴシーリイ公爵が、髪の黑い美男子を見送つて出て來た。此の人は彼得堡で有名な佛蘭西の醫師ロルランであつた。

『C'est donc positif?（そんなら、それはもう確かですね？）』と公爵が言つた。

『Mon prince, errare humanum est, mais（公爵、併し「間違ひは人間に附き物」ですからね、併し）』と醫師は Errare 云々の拉丁語を自國の佛蘭西風に發音し乍ら答へた。

『C'est bien, c'est bien（よろしい、よろしい）』

ドルベッカーヤ夫人親子が目に入ると、ヴシーリイ公爵は醫師に別れの會釋をして、無言の儘

訝しげに二人の方へ近寄つた。息子は不意に母の目の中に、深い悲しみの色が現れたのに氣附いて、一寸微笑した。

『本當に飛んだ悲しい時に、お目に掛るやうな廻り合せになりましたねえ、公爵……それで、あの御病人の御容體は如何でございますか？』公爵が冷たい輕蔑したやうな目附で、自分を見据ゑてゐるのに氣も附かないやうな風で、夫人はかう言つた。

ヴシーリイ公爵は不審さうな、合點が行かぬと言つた樣子をして夫人を見詰めた後、それから又ボリースに視線を轉じた。ボリースは恭しく會釋したが、ヴシーリイ公爵はその會釋に答へないで、ドルベッカーヤ公爵夫人の方へ振り向いた。そして彼女の問に對して一寸頭と脣を動かして、病人に關しては殆ど希望のないことを示した。

『まあ、さうでございますか？』とドルベッカーヤ夫人は叫んだ。『まあ、何といふ悲しいことでございませう！　考へるのも恐しい位でございます……これはわたしの息子でございますが、』と彼女はボリースを指し乍ら附け足した。『あなたにぢきゝお禮を申し上げ度いと言ひますので。』

ボリースは今一度恭しく會釋した。

『全くでございますよ。あなたがわたくし共の爲めに盡して下さいました事は、わたくし母として決して忘れはいたしません。』

『わたしもあなたをお悦ばせする事が出來て、大變嬉しいです、アンナ・ミハーイロヴナ。』とヴシーリィ公爵は襯衣の襞を直し乍ら言つた。彼得堡なるアンナ・シェーレルの夜會の時から見ると、此の莫斯科で自分の保護してゐるドルベッカーヤ夫人を、一人だけ前に置いた今の彼は、身振にも聲にも一層遙かに物々しい、勿體ぶつた樣子を示してゐた。

『まあ努力して勤務を勵み、鴻恩に背かないやうになさい。』と彼はボリースに向つて嚴かに附け加へた。『わたしも大變嬉しいです……君は今此處で休暇を貰つてゐるんですか？』と持前の氣の無い調子で言つた。

『命令を待つて新しい任地へ出發する積りでゐます、閣下。』公爵の剌々しい調子に對する憤懣も、强ひて『閣下』と談話を交へ度いといふ希望の色も見せず、只落き着き拂つて恭しくボーリスが答へたので、公爵はぢつと彼を見詰めた。

『君はおつ母さんと二人暮しですか？』

『わたしはロストーヴ伯爵夫人の所にゐます。』と言つて彼は又、『閣下』と附け足した。

『あのナタリヤ・シンシナと結婚したイリヤー・ロストフでございます。』とドルベッカーヤ夫人は言つた。

『知つてます、知つてます。』とヴシーリィ公爵は例の一本調子な聲で言つた。『わたしは何うしても分りませんよ、何うしてナタリヤさんはあんな Our mal-laiché（汚らしい熊のやうな男）と結婚したんでせう。Un personnage complétement stupide et ridicule（本當に間の抜けた滑稽な男ですよ）それに賭博打ちだといふ話ですな。』

『Mais très brave homme, mon prince（けれども大變いい人ですよ公爵）』悲しげにほゝ笑み乍らドルベッカーヤ夫人はかう言つた。それは丁度「ロストフ伯爵はさういふ批評をされても仕方がありませんが、まあ氣の毒な老人ですよ、容赦して上げて下さい」と願ふやうな工合であつた。『お醫者樣は何と仰しやいますか？』暫く無言の後公爵夫人から訊ねた。すると、又しても其の泣き出しさうな顔に、深い悲しみの色が現れた。

『殆ど望みはありませんね。』と公爵は言つた。

『わたくしは今一度伯父さまにお禮が申し度いのでございます。わたくしもボーリャも色々お世話になりましたから。C'est son filleul（あの方はこの子の名附親でございます）』と彼女は言ひ足した。まるで此の事實が非常にヴシーリィ公爵を悦ばすに相違ない、と信じてゐるやうな調子で。

ヴシーリィ公爵は顔を顰めて考へ込んだ。ドルベッカーヤ夫人は、彼が自分をベズーホフ伯爵の遺言に關する競爭者として、恐れてゐるのを見て取つたので、急いで彼を安心させにかゝつた。

『若しわたくしが眞底から、伯父さまを愛し又尊敬して居ませんでしたら、こんな事をお願ひ

するのではございません。』と彼女は特殊な自信が有るらしく、無造作に此の『伯父さま』といふ言葉を發音した。

『わたくしはあの方の御氣性を呑み込んでゐます。あの方は立派な、しつかりした方でございますが、併し今伯父さまにお附きしてゐらつしやるのは、姪御さん達ばかりでございませう…あの方達は何分未だお年が若うございますからね…』と彼女は首を傾けて小聲に附け足した。

『それに公爵、伯父さまはあの最後の義務をお果しになりましたでせうか？　此の最後の幾分間は實に貴いものでございましてねえ！　若しあの方の御容體がそんなにお悪いのでしたら、それより悪い事はございますまいけれど、是非萬一の用意だけはおさせ申さなければなりません。わたくし達女と申すものは（と彼女は優しい微笑を浮べた）、そんな風のお話の仕方を、何時でもよく存じてゐるのでございますよ、公爵。わたくし是非伯父さまにお目に掛らなければなりません。それはわたくしに取つて隨分苦しい事ではございますが、もうわたくしは苦しみに馴れて了ひましたから…』

公爵はアンナ・シェーレルの夜會で感じたと同樣に、此處でもこのドルベッカーヤ夫人を振り放すのは難かしいと感じたらしかつた。

『アンナ・ミハーイロヴナ、今面會なさるのは伯爵に取つて苦しくはありますまいか。』と彼は言

つた。『いつそ晩まで待たうぢやありませんか。醫者達も其の頃が危いと言ひましたから。』

『ですけれど公爵、今此の時を待つ譯に參りません。まあ考へて御覽なさいまし、il y a va du salut de son âme.....Ah! c'est terrible（今伯父さまの靈魂が救はれるか救はれないかといふ場合でございますよ。あゝ本當に恐しい）、これは基督敎徒の義務でございます。』

と內側の方から戸が開いて、伯爵の姪に當る令孃の一人が入つて來た。氣むづかしげな冷たい頰、足に較べて釣合の取れぬ程恐ろしく長い胴。

ヴシーリイ公爵はその方を振り向いた。

『何うですか、伯爵は？』

『矢張り同じでございますよ。ですがまあ一體あなた方は何ういふお積りでございますの、あんなに騷騷しく…』令孃は見馴れぬ女だといふ樣子をして、ドルベッカーヤ夫人を尻目に掛け乍らかう言つた。

『あゝ、わたくしは未だあなたに、お近附を願つた事がございませんでしたねえ。』とドルベッカーヤ夫人はさも幸福らしい微笑を浮べつゝ、輕々と伯爵の姪の方へ駈け寄つた。『わたくしは伯父さまの御看病のお手傳ひに上りました。さぞ御心配でございませうね、お察し申します。』同情に堪へぬと言つた風に目を剝き出し乍ら、彼女はかう附け足した。

令嬢は何にも答へず、につこりともしないで出て了つた。ドルベッカーヤ夫人は手袋を取ると、占領した陣地を動かないで安樂椅子に席を取り、ヴシーリイ公爵に自分の傍へ腰を掛けるやうにすすめた。

『ボリース！』と彼女は息子を呼び掛けてほゝ笑んだ。『わたしは伯爵——伯父さまの所へ行くから、お前は暫くピエールさんの所へ行つておいで。そしてロストフ家の招待を言ひ忘れてはいけませんよ。ロストフ家からあの方を晩餐に招待してゐるのでございますが、多分あの方はお見えになりますまいねえ。』と彼女は公爵に訊いた。

『いゝえ、それ所ではありません。』大分不機嫌になつたらしい公爵はかう言つた。『Je serais très content si vous me débarrassez de ce jeune homme（あなたがあの男を連れてつて下されば、わたしも肩が抜けて大變嬉しいですよ。）彼方に居ます。』

伯爵は一度もあれの事を訊ねた事がありません。』

と彼は肩を竦めた。從僕はボリースを階下へ連れて下りると、今度は又別な階段を傳つて、ピートル・キリーロヴヰッチ（ピエールの本名）の所へ案内した。

一六

ピエールは彼得堡で立身の方法を講ずる暇もなく、實際暴行の廉を以て莫斯科へ退去を命ぜら

れたのである。ロストフ伯爵の客間で出た話は事實であつた。ピエールは全く警官を熊に縛りつけた事件に關係してゐた。彼は二三日前此の地へ到着して、何時もの如く父の家に入つた。彼は此の事件が莫斯科ぢうに知れ渡り、常々彼を好まぬ周圍の婦人達が此の機會を利用して、父の心を苛立たせるに相違ないと豫想して居たが、兎に角彼は到着の日に父の居間へ出掛けて見た。何時も從妹の公爵令嬢達に占領されてゐる客間へ入ると、早速其處に居合した令嬢に挨拶した。令嬢は三人であつた。其の中二人は刺繍臺に向ひ、一人は本を讀んでゐた。一番の姉は綺麗な色艶をした、顔の嚴つい、胴の長い（例のドルベッカーヤ夫人の前へ出て來た）令嬢であつた。聲を出して書物を讀んで居たのは此の人である。二人の妹は何方も血色のいゝ美しい令嬢であつたが、互に恐しくよく似てゐるので、妹の脣の上にほくろがなかつたら、一寸見分けが附かない位であつた。此の二人は刺繍をしてゐた。ピエールは是等の令嬢達に、まるで死人か黑死病患者のやうに迎へられた。一番上の姉は讀書の聲を送切らして、びつくりしたやうな眼附で無言に彼を眺めた。ほくろのない妹も姉と同じ表情を浮べた。ほくろの爲めに一層美しく見える末の妹は、氣性の賑かな可笑しがりやなので、もう早速滑稽な舞臺面を豫想したのであらう、思はず浮んだ微笑を隱す爲めに、刺繍臺の方へ屈み込んで了つた。彼女は毛糸を下の方へ引つ張つて、模樣でも調べるやうな恰好をして屈み乍ら、やつとの事で笑ひを押し堪へた。

『Bonjour, ma cousine. Vous ne me reconnaissez pas?（御機嫌よろしう、あなた僕がお分りになりませんか）』とピエールが言つた。

『わたしあんまり宜くあなたが分り過ぎる位でございます、全く分り過ぎますの。』

『伯爵の御病氣は何うですか。僕お目に掛つていゝでせうか?』と訊ねたピエールの調子は何時もの通り無器用であつたが、併し狼狽したやうな所はなかつた。

『伯爵は肉體的にも精神的にも苦んでゐらつしやいます。そしてあなたは伯爵の精神的な苦しみを增す爲めに、色々御心配下さいましたやうですね。』

『僕、伯爵にお目に掛つていゝでせうか。』とピエールは重ねて訊いた。

『さうですね! 若しあなたが伯爵を殺すお積りなら——すつかり殺して了ふお積りでしたら、お逢ひになつても宜しうございませう。オリガ、伯父樣に差し上げる肉汁（スープ）が出來てるか何うか、行つて見て御覽なさい。もう直きに時間ですよ。』と彼女は言ひ足した。それは自分達が伯父を慰める爲めにこんなに忙しくして居るのに、ピエールは唯父を心配させる事にのみ忙しさうだ、といふことをピエールに思ひ知らせる爲めであつた。

オリガは出て行つた。ピエールは姉妹（ふたり）の顏を見乍ら、一寸の間立つてゐたが、やがて會釋をしてから言つた。

『それでは僕自分の部屋へ歸つてゐます。逢へるやうになつたら何うぞ知らせて下さい。』

彼が外へ出ると、ほくろの有る妹のよく響く、けれども餘り高くない笑ひ聲が後ろに聞えた。

次の日にヴシーリィ公爵がやつて來て、伯爵邸に落ち着いた。彼はピエールを呼び寄せてから言つた。

『Mon cher. 若し君が又此處で彼得堡でやつたやうな事をすれば、君の最後は非常によくないよ。わたしが君に言ひ度い事はこれ切りだ。伯爵の病氣は非常に重い、が君は決して逢ふ譯には行かないよ。』

それ以後誰もピエールに構ふ人がなかつた。彼は一日二階の居間で只ぼんやり時を過した。ボリースが入つた時、丁度ピエールは部屋の中を歩き廻つてゐた。時々隅の所へ來ると立ち止つて、まるで目に見えぬ敵を劍で刺すやうな、恐しい身振を壁に向つて試み乍ら、眼鏡越しに鋭く睨（ね）め附けた。それから又譯の分らぬ事を言つたり、肩を縮めたり、兩手を擴げたりし乍ら、こと〳〵歩き始めるのであつた。

『L' Angleterre a vécu（英吉利はもう運の盡きだ）』彼は眉を顰め何物かを指しながらかう言つた。『ピット（一七五九—一八〇六有名なる英國の宰相）は國民及び民權に對する謀反者として……その……宣告を受ける』

彼は此時自分がナポレオンとなつて、危險なカレー海峽の渡航に成功し、最早ロンドンをも占

領したやうに空想し乍ら、これからピットに對する宣告を讀み上げようとした一刹那、入つて來る一人の美しい、すらりとした若い將校が目に入つた。彼は自分の歩みを止めた。ピエールが莫斯科を去つたのは、ボリースが十四歳の少年のときだつたので、すつかり彼を見忘れてゐた。併しそれにも拘らず、彼は持前のせつかちな嬉しさうな樣子で、ボリースの手を取り乍ら、親しげに微笑した。

『あなた、僕を覺えてゐらつしやいますか？』氣持のい、微笑を浮べつ、、ボリースは落ち着き拂つて訊いた。『僕は母と一緒に伯爵をお訪ねましたが、伯爵はあまり御壯健でないやうですね。』

『さうです、壯健でないやうです。皆が心配ばかりさせるものですから。』矢張り未だ此の青年が誰か想ひ出さうと苦心しながら、ピエールはかう答へた。

ボリースはピエールが自分を覺えてゐないのを感附いたが、名乘を上げる必要もないと思つたので、少しも當惑を感じる樣子もなく、眞直に對手の目を見詰めて居た。

『ロストフ伯爵が今晩あなたにお出でを願ひ度いとの事です。』ピエールに取つてばつの惡い、可成り長い沈默の後に彼はかう言つた。

『あゝ！　ロストフ伯爵！』とピエールは嬉しさうに叫んだ。『ぢやあなたはロストフ伯爵の息子さんですね、イリヤーさんですね。まあ何うでせう、僕は最初あなたに氣が附かなかつたので

すよ。覺えてゐらつしやいますか、よく僕達はジャッコー夫人と一緒に、雀が丘へ遊びに行つたものぢやありませんか……ずつと以前に。』

『あなたは思ひ違をしてゐらつしやる。』大膽な而も幾分冷笑的な微笑を含み乍ら、ボリースは悠々としてかう言つた。『僕はボリースと言つて、ドルベツカーヤ公爵夫人の息子です。又ロストフ家のお父さんはイリヤーで、息子さんの方はニコライと言ひます。そして僕ジャッコー夫人といふのは少しも知りませんでした。』

ピエールは蚊か蜂でも襲ひかゝつた時のやうに手や首を振り出した。

『あゝ、これは何といふ事だ！　僕何もかもみんな一緒くたにしてゐたつけ。莫斯科には澤山知人が有るもんだから！　で、君はボリースさんですね……やつと話が分つた。そこで君はブロン（佛國カレ附近の海濱の一州）遠征の事を何うお考へですか？　若しナポレオンが海峽を渡つたら、英國は苦しい破目になるでせう？　それに僕の考へでは、此の遠征は極めて有り得べき事ですよ。ギーリネフが遣りそこねなければいゝですがね！』

ボリースはブロン遠征の事を知らなかつた。彼は新聞を讀んでゐなかつたのである。ギーリネフといふ名前も今始めて聞いた。

『我々莫斯科の人間は政治よりも、晩餐や中傷で忙しいのです。』彼は持前の落ち着いた冷笑的

な調子でかう言つた。『僕はそんな事など知りもしなければ考へても居ません。莫斯科は何よりも一番他人の中傷に忙しい所です。』と彼は語を續けた。『今世間の人はあなたと伯爵の事を盛に話してゐます。』

ピエールは對手が後になつて、自分の言葉を自分で後悔するやうなことを言ひ出しはせぬかと、はら〳〵するやうな眼附をし乍ら、例の人の好ささうな微笑を浮べた。けれどボリースは一言々々押し出すやうな、はつきりした、ぶつきらばうな調子で、臆面なくピエールの目を見詰め乍らかう言つた。

『莫斯科の人には中傷讒誣の外仕事が無いのです。一體伯爵は誰に財産を讓るだらうと、皆そればかり氣に掛けてゐるのです。其の癖若しかしたら、伯爵は僕等の誰よりも、一番長生きされるかも知れないんですけれどね。僕も亦それを衷心から望んでゐます。』

『さうですね、全く厭な事です。』とピエールは受けた。『全く厭な事です』

ピエールは此の若い將校が自分自身に取つて、間の惡い話に落ちて行きはせぬかと、しきりにそれが心配になつて來た。

『あなたは屹度さうお思ひになるでせう。』ボリースは一寸赤くなつたが、併し聲も姿勢も變へずにかう言つた。『あなたは屹度さうお思ひになるでせう。誰も彼もみんな金持から何か貰ふ事ばり考へてゐるやうにね……？』

『矢張り思つた通りだ。』とピエールは考へた。

『僕は誤解を避ける爲め、あなたに言つて置き度い事があるんです。若しあなたが僕や僕の母をそんな人間と同じやうにお考へになつたら、それは大變な間違ひです。僕等は非常に貧乏です。併し少なくとも、自分の立場を明らかにする爲めに言つて置きますが、外でもありません、唯々あなたのお父さんが金持でゐらつしやるが爲めに、僕は自分の親戚と考へ度くないのです。僕も亦僕の母も今後無心なんか致しませんし、たとへ何か遺ると仰しやつても頂戴しない積りです。』

ピエールは長い事合點が行かなかつたが、やがて合點するといきなり長椅子から飛び上つて、持前のせっかちな無器用な恰好で、下からボリースの手を取つた。そしてボリースよりずつと餘計に顔を赤くし乍ら、羞恥と憤懣の一緒になつた心持で言ひ出した。

『それは何うも奇妙ですな！……僕は只……それに一體誰がそんな事を考へるものですか……僕はよく知つてゐます……』

けれどボリースは又彼を遮つた。

『僕はすつかり言つて了つたので、非常に氣持が良いです。多分あなたは御不快でしたらう、何うぞお許し下さい。』對手から慰められる可き立場にあり乍ら、却つて對手を慰めるやうに彼は

かう言つた。『併し僕はあなたを侮辱しやしなかつたでせうね。僕何もかもすつかり正直に打ち明けるといふ主義なんですから…所で、歸つてから何とお言託しませう？　あなたはロストフ家へ晩餐にいらつしやいますか？』

ボリースは見受ける所、苦しい義務を肩から下して、間の悪い位置から抜け出した上、却つて他の者を其の間の悪い位置に立たしたのを悦ぶらしく、再び非常に氣持のよい青年になつた。

『いや、まあお聞きなさい、』とピエールは安心して言ひ出した。『あなたは全く驚嘆す可き人です。あなたが今仰しやつたのは大變立派な事です、實に立派な事です。勿論あなたは僕といふ人間を御存じないですが…それも隨分長い間、子供の時分から會はなかつたんですからね…あなたが僕の人物を想像して…いや、僕にはあなたの心持が分ります、よく分りますよ。全く僕にはあんな事出來ませんね、氣力が無いです。が本當に立派な事でした。僕はあなたと知合になつて非常に嬉しいです。併し奇體ですね』一寸無言でゐた後にほゝ笑み乍ら言ひ足した。『あなたは僕の人物に就いて、妙な想像をなさいましたね！（と彼は笑ひ出した）。いや何でもありません。お互にもつとよく知り合ひませう、ねえ。』彼はボリースの手を握りしめた。『あなたは御承知でないでせうが、僕は未だ一度も伯爵の所へ行つた事が無いんですよ。父は僕を呼ばないんです…僕は父を人間として氣の毒に思ひます…だが仕樣もありません！』

『で、あなたはナポレオンが、巧く軍隊を渡峡させる事が出來るとお考へですか？』とボリースはほゝ笑み乍ら訊いた。

ボリースが話題を轉じようとしてゐるのを悟つたので、ピエールはそれに同意して、ブロン海峡渡航の利害を論じ始めた。

從僕が來てボリースを母夫人の方へ呼び出した。公爵夫人はもう歸り支度をしてゐたのである。ピエールはボリースとの交誼を溫める爲めに、晩餐會へ出る事を約束した。そして眼鏡越しに優しく對手の目を眺めながら、固く其の手を握つた。彼の去つた後、ピエールは又長い事部屋の中を歩き廻つたが、もう劍を以て目に見えぬ敵を刺すのは止めて、あの美しく賢く、且つ堅實な青年の事を憶ひ出してはほゝ笑んでゐた。初期の青年時代に——殊に孤獨な狀態に置かれた者によくある事だが、ピエールは此の若い將校に對して譯もない懷しさを感じて、是非彼と親しくしようと誓つたのである。

ヴシーリイ公爵はドルベツカーヤ夫人を見送りに出た。夫人は目の緣に手巾を押し當てゝ居た。彼女の顏は涙で濡れてゐた。

『恐しい事でございます、全く恐しい事でございます！』と彼女は言つた。『けれどわたくしは何んな犧牲を拂つても、自分の義務を果す積りでございます。わたくし今夜泊りに參ります。あ

の方を今の儘で打つ棄つて置く譯に參りません。一分の時も大切でございます。わたし何故お孃様方がぐずぐずしてゐらつしやるのか、合點が參りません。若しかしたら、あの方にそれとなく覺悟をおさせ申す方法を、神様がわたしに敎へて下さるかも知れません！…Adieu, mon prince, que le bon Dieu vous soutienne（左様なら公爵、神様があなたを支へて下さるでせう）』

『Adieu ma bonne（左様なら奥さん）』夫人に脊中を向け乍ら、ヴシーリィ公爵は言つた。

『本當にあの方は恐しい容體ですよ。』又親子が馬車に乘つた時、公爵夫人は息子に向つてかう言つた。『もう大方誰の顏も見分けが附かないんだからね。』

『僕ちつとも分らないんですよ、おつ母さん、伯爵とピエールさんとの關係は何ういふんです。』と息子が訊ねた。

『みんな遺言狀が知らして呉れます。その遺言狀でわたし達の運も決るんですよ。』

『だけど、何故おつ母さんはそんな事を考へるんです、伯爵が僕等に何か殘して呉れるだらうなんて？』

『まあお前何を言ふの！　あの方はあんなお金持だのに、わたし達はかういふ貧乏人ぢやありませんか！』

『だが、それでは理由が不十分ですよ、おつ母さん…』

『あゝ、本當に何うしよう！何うしよう！あの方の病氣の重い事！』と母は叫んだ。

一七

ドルベッカーヤ公爵夫人が息子と一緒に、ベズーホフ伯爵の許へ出掛けた後、ロストーヴ伯爵夫人は手巾（ハンカチ）を目蓋に押し當てた儘、長い間一人で坐つて居た。遂に彼女は呼鈴を鳴らした。

『あなた何うしたんですか。』と暫く待たされた伯爵夫人は、入り來る小間使に向つて腹立たしげにかう言つた。『一體奉公するのが厭なんですか、え？　それなら、わたしあなたに他の口を見附けて上げますよ。』

伯爵夫人は友の悲しみと零落に心を搔き亂されて、恐しく機嫌が惡かつた。それは何時も、小間使を「あなた」と呼ぶので、直ぐ分るのであつた。

『眞（まこと）にわるうございました。』と小間使は言つた。

『一寸伯爵にお出でを願つてお呉れ。』

伯爵は體を搖（ゆす）るやうにし乍ら妻の傍（そば）へやつて來た、何時もの癖で何か惡い事でもしたやうな顏付をしながら。

『ねえ、奥さん！山鳥のソーテー・オー・マデール（マデール產の葡萄酒につけた軟肉）が實によく出來たよ、マシュー

ル！わたしは一寸味き、をして見たが、タラスに千留の年俸を決めて遣つたのも決して無駄ではなかつたよ。確かに値打がある。』

彼は妻の傍に坐つて、若い者のするやうに兩肘を膝に突き乍ら、胡麻鹽の髪を指で掻き廻すのであつた。

『何の用だね、奥さん？』

『實はねえ、あなた――おや、あなた何で此處んとこをお汚しなすつたの？』と夫人は良人の胴衣を指さし乍らかう言つた。『これは屹度軟肉料理でせう』と彼女はほゝ笑みながら附け足けた。『實はね、あなた、わたしお金が要るんですよ。』

彼女の顔は悲しさうになつた。

『あゝさうか！』と伯爵は急に慌てながら紙入れを取り出した。

『わたし澤山要るんですよ、あなた、五百留要るんですの。』

かう言ひながら彼女は麻の手巾を取り出して、良人のチョッキを拭いて遣つた。

『直ぐ上げる、直ぐ上げる、おーい、誰か其處に居ないか？』と彼は叫んだ。それはまるで自分が一口呼んだなら、呼ばれた者は必ず一生懸命に急いで駈け附けるに相違ない、と固く信じてゐる人の叫び聲であつた。『おれの所へミーチェンカを寄越して呉れ！』

彼の貴族の生れで幼少から伯爵家に育てられ、今は此の家の事務を支配してゐるミーチェンカが、靜かな足取りで部屋へ入つて來た。

『實はね君、』恭しく入つて來る青年に向つて伯爵はかう言つた。『君に少し金を持つて來て貰ひ度いんだ……（と伯は考へ込んだ。）さう、七百留、さうだ。それからよく氣をつけてな、何時ものやうな破けたのや汚れたのでなしに、綺麗なのを持つて來い、奥さんに上げるんだから。』

『さうです、ねえ、ミーチェンカ、何うか綺麗なのをね。』物思はしげに吐息をつき乍ら伯爵夫人はかう言つた。

『御前、何時お屆け申したら宜しうございませう？』とミーチェンカが言つた。『御承知の通りその……いや併し御心配には及びません。』彼は伯爵が重々しくせか〳〵と息を吐き始めたのに氣がついて（それは何時も腹を立てる時の前兆だつた）、急いでかう言ひ足した。『わたしはつひつかりしまして……只今お屆け申しませうですか？』

『さうだとも、さうだとも、直ぐ持つて來い。そして奥さんにお渡ししろ。』

『あのミーチェンカは家の寶物だよ。』青年が立ち去つた時、伯爵は微笑し乍ら言つた。『あの男に任せたら出來ないといふ事は無い。わたしは出來ないなんて事が大嫌ひでね、何でも出來なくちやいけないよ。』

『あゝほんとにお金ですね、あなた、お金ですね、此のお金の爲めに、何れだけ世の中に悲しい事が起ることでせう！』と伯爵夫人が言つた。『でもあのお金は何うしても要りますから…』

『お前は有名な浪費者だからな。』と言つて伯爵は妻の手を接吻し、又書齋へ歸つて行つた。

ドルベツカーヤ公爵夫人がベズーホフ伯爵の許から歸つて來た時、もう伯爵夫人は新しい紙幣で五百留の金を、手巾の下に隱して待つてゐた。ドルベツカーヤ夫人は、伯爵夫人が何やらそはゝしてゐるのに氣が附いた。

『で、あんた、何うでしたの？』と伯爵夫人が訊ねた。

『まあね、大變容體が重いんですよ！　すつかり見違へて了ひました。そりやァお惡いんですの、全くお惡いんですの。わたしほんの一寸伺つただけで、一口も話し掛ける譯に行きませんでした。』

『アンネット、後生だから辭退しないで頂戴。』伯爵夫人は不意に赤くなつてかう言つた。その樣子がもう餘り若くない、瘠せた物々しい顏に比べて、奇妙な對照をしてゐた。彼女は手巾の下から金を取り出した。

ドルベツカーヤ夫人は何事かといふことを察した。そしてもう脊を屈めて、必要な瞬間に對手を抱き締める用意をした。

『これはわたしからボリースに…軍服を縫はせる足し前にね。』

ドルベツカーヤ夫人はもう彼女を抱いて泣いて居た。伯爵夫人も同樣に泣き出した。二人は自分達が互に仲善しで親切な事を思つて泣いた。又二人は自分達——幼馴染の友達が、こんな金など、いふ賤しい物に心を惱ましてゐる事や、又自分達二人の青春が過ぎ去つた事などを思つて泣いたのである。併し彼等の涙は快い涙であつた…

一八

ロストーヴ伯爵夫人は娘達を伴れて、大勢の客と一緒に客間に坐つてゐた。伯爵は男客を自分の書齋へ誘つて、常々好んで蒐めてゐる土耳古パイプを並べて見せた。時々彼は客間へ出て、「未だお見えにならんか？」と訊いた。彼は社交界で le terrible dragon（恐しい龍）と綽名を唱はれてゐる、マリヤ・ドミートリエヴナ・アフロシーモヴを待つてゐるのであつた。此の人は財產や名譽などでなく、一徹な氣象と無遠慮な飾りけのない態度で有名であつた。マリヤ・ドミートリエヴナの名は皇族の間にも知られてゐるし、莫斯科彼得堡ぢうにも知れ渡つてゐた。兩都では內々彼女の亂暴を嘲笑ひ乍ら、其の言行を驚きを以て語り傳へるのであつたが、それでも矢張り世間では一人の例外もなく、彼女を尊敬し且つ恐れた。

煙草の煙の充ち満ちた書齋では、詔勅を以て宣せられた戰爭と招集の話が榮えてゐた。詔勅は未だ誰も讀んだ者がないけれど、それが發表された事は皆知つて居た。伯爵は煙草を燻らせ且つ談じてゐる二人の客に挾まれて、圓腰掛に坐つてゐた。伯爵自分は煙草も喫まねば話もしなかつたが、首を左右に交る〳〵傾げ乍ら如何にも滿足さうに、煙草を喫んでゐる客の樣子を眺めてゐた。そして自分で嗾し掛けて始めさした二人の話を聞いてゐた。

話し合つてる客の中一人は文官であつた。皺の多い膽汁性の瘠せた顏は綺麗に剃り上げられ、服裝はまるではいからな青年のやうであつたが、もう老境に近い年恰好である。內輪の人のやうに兩足を圓腰掛に載せた儘、横咬へにした琥珀のパイプを口の中へ深く入れて、ぐい〳〵と煙草を吸ひ込んでは眉を顰めてゐた。これは伯爵夫人の從兄に當る老寡夫のシンシンで、莫斯科の社交會で毒舌家の噂が高かつた。彼は自分が今對座してゐる男と口を利くのを、特別のお慈悲だと考へてゐるらしかつた。今一人は生き〳〵した血色のい、近衞將校で、顏の手入れも申分なく、髮も美しく搔き上げ、上衣の釦をきちんと掛けてゐたが、口の眞中に琥珀のパイプを咬へて、ばら色の脣で輕く煙を吸ひ込み乍ら、今度はそれを小さな圈にして美しい口から吹かすのであつた。これはセミョーノフスキイ聯隊の中尉ベルグといつて、ボリースを連れて一緒に同じ聯隊に出掛けようといふ男であつた。ナターシャが姉のヱーラを擁まへて、お婿さんと言つてからかつたのは此

の男である。伯爵は此の二人の間に坐つて、注意深く耳を傾けてゐた。大好きなボストン（カルタ遊びの一種）の勝負を除けて、伯爵の何よりも愉快な仕事は、聽手の位置に立つといふ事であつた。殊に巧く話し好きを二人拉して來た時などは、尙更であつた。

『時に君どうです mon très honorable（我が最も尊敬する） アリフォンス・カールリッチ』シンシンは露西亞獨特の碎けた言廻しと、優雅な佛蘭西の語句を絢ひ交ぜながら（それが彼の特色であつた）、やゝ笑ひを帶びた調子でかう言つた。『Vous compter vous fais des rentes sus l'état——君は隊の月給から決つた金でも積まうといふお考へなんですか？』同じ事を更に露西亞語に直しながら訊ねた。

『いゝえ、ピョートル・ニコライッチ、僕は唯騎兵は步兵に較べて非常に損だ、といふ事をお話し致かつたのです。まあ今の僕の狀態を考へて見て下さい……』

ベルグの話し振りは恐しく正確で落ち着いて、慇懃であつた。彼の話題は何時も自分一身の事だけに限られてゐた。自分に直接關係のない事が話題に上つてゐる時は、彼は常に落ち着き拂つて沈默を守つてゐる。而も其の場合間の惡い心持を自分にも感じなければ、他人にも感じちせないで、幾時間でも續けて沈默を守つてゐる事が出來た。が一旦會話が彼一箇の上に及ぶや、彼は直ぐに長々と、如何にも滿足さうに話し始めるのであつた。

『僕の狀態を考へて見て下さい、ピョートル・ニコライッチ、若し僕が騎兵隊にゐたら、四ケ月に

二百ルーブリより以上は貰へません、假令んば中尉になつたとしてもですよ。所で今僕は二百三十ルーブリ貰つてゐます。』彼はシンシンと伯爵を交るゞ〳〵眺め乍ら、嬉しさうな愉快らしい微笑を浮べてかう言つた。それはまるで彼の成功は他人に取つても、常に重なる希望目的でなければならぬ、と信じて疑はないかのやうであつた。

『それにですね、近衛へ移つてから、僕は多少目に立つ場所へ出た譯なのです。そして近衛歩兵の方では休暇もずつと多いのです。それから又考へて見て下さい、僕が二百三十留の金で、何うして暮しを立てゝるかお分りになりますか？　而も僕は多少貯金もしてゐれば、親父にも仕送りをしてゐるんですよ。』

『バランスが決つたのですね、Comme dit le proverbe（諺にも言ふ通り）獨逸人は燧石から油を取るさうですからね。』口の隅から隅へパイプを咬へ直し乍ら、シンシンはかう言つて、一寸伯爵に瞬きして見せた。

伯爵は大聲にからからと笑つた。他の人達もシンシンが何やら話してゐるのを見て、傍へ聞きにやつて來た。ベルグは對手の冷笑的な、氣のない調子にも氣が附かないで、自分が近衛に移されたお蔭で、學校時代の僚輩よりも一歩先きに出た事や、戰爭のとき中隊長が殺されたら、自分が中隊での故參將校として容易く中隊長になり得る事や、中隊でも人々に好かれてゐる事や、父が

自分に滿足してゐる事などを長々と語り續けた。ベルグはかう云ふ話をし乍らすつかりいゝ氣持になつて、他の人にも又それ〴〵自分自身の興味があるといふ事は、考へても見ないやうな風附であつた。併し彼の言ふ事は悉く愛嬌があつて、眞面目で、罪がなく、其の子供らしい利己主義の無邪氣さは誰の目にも明瞭だつたので、彼は到頭聽手の毒氣を拔いて了つた。

『いや、君は騎兵でも、歩兵でも、何處へ行つても持てますよ。これはわたしが豫言して置きます。』とシンシンは輕く對手の肩を敲いて、圓腰掛から足を下し乍らかう言つた。

ベルグは嬉しさうに微笑した。伯爵は立ち上つて客間へ出た。客人達もそれに續いた。

それは丁度集つて來た客達が、食事の招待を心待ちにして長い會話も始めないけれど、決して食卓に就くのを待遠がつてゐないといふ事を見せる爲めに、彼方此方動き廻つて默り込まないのを義務と心得てゐる、晩餐會の前によくある一時であつた。主人側の人達は戸口の方を眺めては、互に時々目交せをする。此の目附に依つて客人達は、主人側が待つてゐるのは何だらう、定刻に遲れた大切な親族か又は用意の出來ない食物か、とそんな事を想像して見るのであつた。

ピエールは食事のすぐ前にやつて來て、先づ最初に打つ突つた安樂椅子に、無器用さうな恰好で腰を掛けたが、それは室の眞中で一同の通り路の邪魔になつた。伯爵夫人は彼に何か話させよ

うと試みたが、彼は誰か探し出さうとするやうに、無邪氣な顏付で眼鏡越に邊りを見廻すのであつた。そして伯爵夫人の問に對しては至極簡單に返事した。彼は端(はた)の者に取つて非常に氣詰りであつたが、自分ではそれに氣が附かなかつた。例の熊に關する一件を知つてゐる多數の客は、此の大きなよく肥つた、從順しさうな男を珍しげに眺めた。そしてこんな物臭さうな從順しい男に、何うしてあんな亂暴な事が出來たかと不思議に思つた。

『あなた近頃此方へおいでになりましたか?』と伯爵夫人が訊ねた。

『Oui, madame (さうです奥さん)』と彼は邊りを見廻し乍ら答へた。

『あなた良人(たく)にお會ひになりましたか。』

『Non, madame (いえ奥さん)』彼は全く用のない時にほゝ笑んだ。

『あなたはつい近頃まで巴里にゐらしつたさうでございますが、全く面白うございませうねえ。』

『實に面白いです。』

伯爵夫人はドルベッカーヤ夫人と目交せした。此方は此の青年の相手をしてくれと賴まれたのだと悟つて、彼の傍近く坐りながら父伯爵の話を始めた。併し彼は伯爵夫人に對した時と同じやうに、彼女に對しても極めて簡單な言葉で返事をした。客人達は各々(めいく)お互に對手をし合つてゐた。

『ラズーモフスキイさん……彼處は愉快でございました……あなたは大變お綺麗でございます……アブラクシン伯爵夫人……』などといふ聲々が方々で聞えた。伯爵夫人は立つて廣間の方へ行つた。

『マリヤ・ドミートリエヴナでゐらつしやいますか?』といふ夫人の聲が廣間から聞えた。

『その通り。』といふ粗(あら)い女の聲が答へたが、それに續いてマリヤ・ドミートリエヴナが客間に入つて來た。

令孃達ばかりか夫人達も、ずつと年取つた人を除いてみんな立ち上つた。マリヤ・ドミートリエヴナは五十ばかりの老婦人であつたが、半白の頭を肥えた體の上に高く反らし乍ら、客人達を見廻した。そしてたくし上げるやうな手附で、悠々と其の廣い袖を直した。彼女は何時も露西亞語で話をした。

『奥さんと子供さんに命名日のお祝を申します。』と彼女は大きな太い、あらゆる音響を壓迫するやうな聲で言つた。

『何うです、罪作りのお爺さん。』彼女は自分の手を接吻する伯爵に向つてかう言つた。『多分莫斯科は退屈でせうね? 犬を追ふ處が無いから? 本當にあんた何うします、あゝして子供達が大きくなつて行くのに……』と彼女は令孃達を指さした。『否でも應でもお婿さんを探さなくつちやな

りませんからねえ。』

『え、何うしました、うちの哥薩克(コサック)さん(彼女はナターシャをかう呼んでゐた)』何の恐れげもなく嬉しさうに近寄つて、自分の手を、接吻するナターシャを優しく撫で乍ら彼女はかう言つた。

『お轉婆だつて事は承知してゐるけれど、それでもわたしは此の子が好きだ。』

彼女は大きな婦人袋(リチキュール)から梨形した琥珀の耳環を取り出して、命名日の悦びに眞赤な顔を輝かしてゐるナターシャに手渡しすると、直ぐ彼女に脊を向けてピエールに對した。

『おゝ〳〵! お前さん! 此方へおいでなさい。』彼女はわざと小さな細い聲をしてかう言つた。

『おいでなさいと云ふのに、お前さん・・・』

と彼女は恐ろしい顔附をして、袖を又高くたくし上げた。ピエールは無邪氣な目附で、對手の顔を眼鏡越しに窺ひ乍ら近附いた。

『もつとお寄り、もつとお寄りなさい。わたし一人だけは、お前さんのお父さんが日の出の勢のときに、何時も思つた通り向きつけに言つて上げたものだが、お前さんに言つて上げるのは神樣のお吩咐です。』

彼女は一寸言葉を切つた。人々は今のは單に前置きに過ぎないと感じたので、これから何んな事を言ひ出すかと、待ち設け乍ら默つてゐた。

『結構ですよ、何にも言ふがものはありません! 結構な坊つちやんです! ・・・お父さんは死ぬか生きるかと云ふ病氣だのに、此の人は熊に巡査を縛りつけてふざけ廻つてる。恥かしい事ですよ、お前さん、恥かしい事ですーいつそ戰爭にでも行つた方がましだ。』

彼女は又くるりと向きを變へて、やつとの事で笑を押しこたえる伯爵に手を差し出した。

『時に何うです、もう食事をしては、もう頃合らしいぢやありませんか?』とマリヤ・ドミートリエヴナは訊ねた。

伯爵とマリヤが先頭に立つて進んだ。次に伯爵夫人が輕騎兵聯隊長に伴はれて行つた。此の人はニコライと一緒に、隊の後を追つて出掛ける筈になつてゐる大切なお客樣であつた。ドルベッカーヤ公爵夫人はシンシンと一緒に、又ベルグはエーラに手を差し出した。始終にこ〳〵してゐるジューリイ・カラーギナは、ニコライと共に食卓へ進んだ。續いて其の他の組が長くなつて廣間を練つて行つた。子供達や家庭教師等は對手なしに、一人づつ一同の後に隨つた。侍僕等が動き始め、椅子がが た〳〵鳴り、樂隊席で音樂の響が起り、來客はそれ〴〵席に就いた。やがて伯爵家のお抱へ樂隊の演奏は小刀(ナイフ)と肉叉(フォーク)の響、客人達の話聲、侍僕等の靜かな足音に代つた。食卓の一方の端には主人公たる伯爵夫人、其の右にはマリヤ・ドミートリエヴナ、左にはドルベッカーヤ公爵夫人その他の女客が居並んだ。今一方の端には伯爵、其の左には輕騎兵大佐、右にシンシ

ン其の他の男客が席を取つてゐた。それから長い食卓の一方の側には稍年長の青年達――ゼーラとベルグ、ピエールとボリースなどが並んで腰掛けた。其の反對の側には子供達と家庭教師等が並んだ。

伯爵は酒の瓶や硝子器や果物を盛つた鉢の蔭から、妻の顏と其の水色リボンの附いた室内帽子を眺め乍ら、一生懸命に隣席の客人達に酒を注いでゐたが、其の際自分の杯の事も忘れはしなかつた。伯爵夫人も矢張り主婦としての義務を忘れずに、鳳梨(パイナップル)の蔭から意味ありげな視線を良人に投げた。其の禿げた頭と顏の色の赤さが、胡麻鹽の毛に對してくつきりと目立つて見えた。女客の席では會話が平調に進んだが、男客の側では話し聲が次第々々に高くなつて行つた。特に輕騎兵大佐は盛に飲み且つ食つて、段々と顏を赤くし乍ら大きな聲で喋るので、到頭伯爵が彼を他の客の模範と稱した位である。ベルグは優しい微笑を浮べ乍ら、愛は地上の物でなく天上の感情である、などゝゼーラと語り合つた。ボリースは新しい友達のピエールに席上の客の名を敎へ乍ら、向き合つて坐つてゐるナターシャと時々顏を見合せた。

ピエールは自分に取つて新しい顏を見廻し乍ら、餘り多く語らず只頻りに食べた。最初二色のスープを持つて來た時 à la tortue (龜の料理)を擇んだのを手始めに、魚饅頭(フイツシユ・パイ)や山鳥に至る迄、彼は一皿の料理も一種類の酒も逃(のが)さなかつた。酒はナプキンに包んだ瓶に入れたのを、侍僕が何か大祕

密でも洩らすやうに、そつと隣席の客の肩の蔭から突き出して、『ドレイマデーラ』とか、『ゼングル酒』とか『ラインワイン』とかそれ〴〵の名を言ふのであつた。彼は各々(めいく)の食器の前に置いてある四つの硝子製の杯(それには伯爵の頭文字を組合せたのが鏤めてあつた)の中、最初手に當つたのを一つ取り上げて受けた。そして次第に快さうな顏付になつて客を見廻し乍ら、滿足げにそれを飲み干すのであつた。ナターシャは彼の眞向ひに坐つてゐたが、時々ボリースの方を眺めた。それは通常十三位の女の子が、初めて接吻し合つた戀しい少年を眺めるやうな眼附であつた。此の眼附は何うかすると其の儘ピエールの方へ向けられた。すると彼は此の笑ひ上戸の、元氣のいゝ娘の眼附を見てゐる中に、自分迄が何故ともなく笑ひ度くなつて來るのであつた。

ニコライはソーニャから遠く離れて、ジューリイ・カラーギナの傍に坐つてゐた。そして又しても自然に出て來る例の微笑を浮べ乍ら、何やら話し合つた。ソーニャは晴々しくほゝ笑んでゐたが、內心嫉妬に苦められてゐるのは明らかであつた。彼女は赤くなつたり蒼くなつたりして、ニコライとジューリイの話に一心に耳を傾けて居た。女の家庭教師は心配さうに邊りを見廻して、若し誰か子供達に無禮な事でもしさうだつたら、大いに抗議を申し出よう、と意氣組んでゐるやうに見えた。獨逸人の家庭教師は食物や尾品(デセルト)や酒などの種類を、すつかり覺え込まうと努めた。それは後になつて詳しく故國の家人に書き送る爲めであつた。それゆゑ、侍僕等がナプキンに包んだ酒

の瓶を携へたまゝ、時々彼をぬきにして行き過ぎると、彼は恐しく憤慨して眉を顰めた。併しそんな酒なんぞ決して貰はうと思はない、といつた樣子を見せようと努めた。自分に酒が必要なのは別に渴を癒し度い爲めでも、又さもしい根性の爲めでもなく、只上品な好奇心の爲めだといふ事を、誰一人了解して呉れないのが彼は口惜しかつた。

一九

男客に占められた卓の一方の端では次第に話がはずんで來た。大佐はもう宣戰の詔勅が彼得堡で發表された、そして其の一部は今日急使を以て莫斯科(モスクワ)總督の許へ送られて、自分も親しくそれを讀んでみた、といふ事などを語つた。

『何だつて忌々しい、我々はボナパルトなんかと戰爭するんでせう?』とシンシンが言つた。『a déjà rabattu le caquet à l'Autriche (彼はもう墺太利の高慢の鼻を折つて了ひましたよ) 今度露西亞の番が來なければいゝですがねえ。』

大佐はでつぷりした、脊の高い、肝の强さうな獨逸人であつたが、永く軍隊に務めて來た愛國主義者だといふ事は、あり〳〵と見えてゐた。彼はシンシンの言葉にむつとした。

『何故ちうて、それはあなた。』と彼は訛りの多い發音で言ひ出した。『それは皇帝がよく御存じ

です。陛下は詔勅にもさう言うてをられます。朕は目下露西亞に迫れる危難を拱手して見るに忍びず。皇國の安全と其の威嚴、同盟軍の神聖……』と彼は何故か『同盟軍』といふ言葉に特別力を入れて言つた。丁度此の中に事件の要點が含まれてゞもゐるかのやうに。

で彼は軍人式に精嚴犯す可からざる記憶を辿つて、詔勅の冒頭の數句を繰り返した。『而して堅實なる基礎の上に歐羅巴の平和を築かんとする、朕の唯一にして必然なる目的希望は、玆に朕をして皇軍の一部を邊疆の外に動かし、此の希望の貫徹に必要なる、新しき條件を制定するに決せしめたり。』

『まあかういふ譯ですよ、あなた、』彼は鹿爪らしい恰好をして洋杯(コップ)の葡萄酒を飲み干した。そして同意を求めるやうに、伯爵の方を振り向き乍ら言葉を結んだ。

『Connaissez vous le proverbe (あなたかういふ諺を御承知ですか) エレーマよ、エレーマよ、お前は家にぢつとして、紡(つむ)錘でも磨いたら好からうに。』シンシンは顏に皺を寄せてほゝ笑み乍らかう言つた。『これは今の露西亞にお誂へ向です。こんな時にスヴーロフ(有名なるロシヤの元帥一七三〇—一八〇〇)でもゐるといゝのですが、それさへ滅茶々々にやられて了つたんですからね、à plate couture (全くですよ)、所で今露西亞の何處にスヴーロフがゐますか? Je vous demande un peu (一寸伺ひ度いものですね)。』しつきりなしに露西亞語から佛蘭西語に飛び移り乍ら、彼はかう言つた。

『我々は血の最後の一滴迄戰はねばなりません。』と大佐は卓を打つて叫んだ。『皇帝陛下の爲めに死ぬるのです、それで萬事結構なんです。そして理屈は出えッ來るだけ（と彼は『出來る』といふ言葉をうんと引き伸した）減すんです。』又しても伯爵の方へ向き乍ら彼は一寸言葉を切つた。『まあこんな風に老耄れの輕騎兵は考へてゐますよ。所で君、若い人は――若い輕騎兵は何んな風に考へてをられますか？』と彼はニコライの方へ向いて言ひ足した。此方はもう戰爭の話が始つてゐるのに氣が附くと直ぐ、ジューリィとの話はそつち除けにして目を睜りながら大佐を眺め、耳を聳てて其の話を聞いてゐた。

『僕は全然あなたと同意です。』ニコライは一時にぱつと顏を赤くして、まるで此の一刹那恐しい危險が身に迫つたかの如く、自暴（やけ）な一生懸命な樣子をして、皿を捻つたりコップを置き換へたりし乍らかう言つた。『露西亞人は死ぬか勝つか、何方かでなくてはならない、と僕は思ひます。』かう言つて了つた後で、彼は他の人と同樣に、今の言葉が此の場合餘り仰々しく氣障（きざ）なやうに思はれて、何だかきまりが悪くなつた。

『C'est bien beau ce que vous venez de dire（あなたの仰有つた事は大變立派でございます）』傍にゐたジューリィが言つた。

ソーニャはニコライの話してゐる間、始終全身を慄はし乍ら、耳から――耳の後ろから首迄、首から肩まで眞赤になつた。

ピエールは大佐の說に傾聽し乍ら、贊成するやうに點頭いた。

『いや中々立派だ。』と彼は言つた。

『正眞正銘の輕騎兵だ、豪い！』と大佐は又卓（テーブル）を叩き乍ら叫んだ。

『何を其處であんた方は騷いでゐるんです？』と不意にマリヤ・ドミートリエヴナの太い聲が卓（テーブル）越しに聞えた。『何だつてあんた、そんなに卓を叩くんです？』と彼女は大佐に向つて言つた。『誰を對手にあんたはさう熱くなゐるんです？　大方直ぐ目の前に佛蘭西人でもゐるやうな氣がするんでせう？』

『わたし本當の事を言つてゐるのです。』と輕騎兵は微笑し乍ら言つた。

『いや何時も〳〵戰爭の話ばかりです。』と伯爵は卓の此方の端から叫んだ。『御承知ですか、うちの息子も出掛けると言つてゐます。マリヤ・ドミートリエヴナ、息子が出征するんですよ。』

『所がわたしの息子は四人共隊にゐますよ、併しわたしはくよ〳〵しません。何事も神樣の御意（こゝろ）ですからね。何うせ煖爐（ペーチカ）の上に寢てゝも死ぬんですよ。戰爭で死ねば神樣がお惠みを垂れて下さいます。』マリヤ・ドミートリエヴナの太い聲は卓の彼方の端から、何の苦もなしに此方へ屆いた。

『それはさうです。』

それから婦人側は婦人側、男子側は男子側と、會話は再び分れ〳〵になつた。
『ほら訊けないだらう。』と小さな弟のペーチャがナターシャに言つた。『ほら訊けないだらう！』
『訊くわよ。』ナターシャは答へた。
彼女の顔は自棄半分の樂しげな決心の色を現して燃えた。彼女は向う側に坐つてゐるピエールに、目顔で以て聞いてゐろといふ心を知らせ乍ら、立ち上つて母の方へ向いた。
『お母さま！』といふ彼女の子供らしい、胸から出るやうな聲が、食卓全體に響き渡つた。
『何です？』と伯爵夫人はびつくりして問ひ返したが、娘の顔付で又惡戯だなと見て取ると、脅かすやうな打ち消すやうな素振を頭でして見せて、嚴つい顔付で片手を振つた。
會話ははたと止んだ。
『お母さま！　お菓子は何が出るの？』ナターシャの聲が今度は前より大膽になつて、途切れる事なしに響いた。
伯爵夫人は眉を顰めようとしたが出來なかつた。マリヤ・ドミートリエヴナは太い指を突き出して脅かした。
『コザック！』と彼女は聲に威嚇の調子を持たして言つた。
客の多數は此の突然な出來事を何ういふ風に採つたらいゝのかと、年長者の方を眺めてゐた。

『お前本當に酷いですよ！』と伯爵夫人が言つた。
『お母さま！お菓子は何が出るの？』もう自分の行爲は好意に解されるに相違ないと確信したナターシャは、すつかり大膽になつて氣紛れな愉快らしい聲で叫んだ。
ソーニャと肥えたペーチャとは人の陰に隱れて笑ひこけた。
『ほら訊いたぢやないの。』とナターシャは弟とピエールに囁いた。そして今一度ピエールをちらりと眺めた。
『アイスクリーム、但しお前さんにや上げない。』とマリーヤ・ドミートリエヴナが言つた。
ナターシャは何もびく〳〵する事はないと見て取つたので、マリヤ・ドミートリエヴナさへ少しも恐れなかつた。
『マリヤ・ドミートリエヴナ！何のアイスクリーム？わたし李のいやよ。』
『人參の。』
『いやよ、何んなの？　マリヤ・ドミートリエヴナ、何んなのよう？』と、彼女は殆ど喚くやうに言つた。『わたし知つて置き度いの！』
マリヤと伯爵夫人は笑ひ出した、一同の客人達もそれに續いた。皆が笑つたのはマリヤ・ドミートリエヴナの答が可笑しかつたからでなく、大膽にもマリヤ・ドミートリエヴナに向つて、あゝい

ふ態度を取り得た一少女の、勇氣と巧者さ加減を興がつたのである。

ナターシャはバイナップルのだと敎へて貰ふ迄後へ退かなかつた。アイスクリームの前に三鞭が出た。やかて再び音樂隊の演奏が響き始まる頃、伯爵夫妻は接吻した。客達は立ち上つて伯爵夫人に祝辭を述べ、卓越しに伯爵、其の子供達、次にお互同志乾盃をした。再び侍僕等が馳せちがひ始め、椅子ががたく鳴つて、客人達は以前と同じ順序で(但し以前よりずつと赤い顔をして)客間と伯爵の書齋へ歸つた。

二〇

やがてボストン用の卓が持ち出されて、組も分けられた。そして伯爵の客は長椅子室と圖書室の二所に分れて陣取つた。

伯爵は扇で歌留多を撒いて居たが、何時もの癖として食後に襲うて來る睡魔を、やつとの事で壓へ付け乍ら、事々に笑ひ興ずるのであつた。青年達は伯爵夫人にそゝのかされて、ピアノと竪琴の傍へ集つた。そしてジューリィが一番に人々の乞ひに任せて、竪琴で小さな曲にヴリエーションを付けて彈いた。それが濟むと彼女は他の娘達と一緒になつて、樂才を以て知られてゐるナターシャとニコライに、何か唱つて吳れと言ひ出した。ナターシャは人人から大人のやうに扱はれる

のが、得意らしい樣子であつたが、それと同時に又臆ぢけづいた。

『何を唱ひませうねえ?』と彼女が訊ねた。

『「泉」がいい。』とニコライが答へた。

『ぢや早くしませう。ボリース、此方へいらつしやいな。』とナターシャは言つた。『おやソーニャは何處?』彼女は振り返つて、友達が部屋に居ないのを見ると、急いで探しに駈け出した。

ソーニャの部屋に駈け込んだが、其處にもゐなかつたので、ナターシャは子供部屋へ走つて行つた——が其處にも亦ソーニャは居なかつた。『あの女は廊下のトランクの上にゐるのだ。』とかうナターシャは感付いた。廊下のトランクの上はロストフ家の娘達が嘆きの場所であつた。果してソーニャはふはゝくした薔薇色の着物を着た儘、皺だらけになるのも構はずに、トランクの上に敷いてある、乳母の汚い縞の羽布團に俯伏しに身を投げて、指で顏を隱しながらしやくり上げて泣いて居た。露はな小さい肩がぴりくと顫へてゐる。如何にも命名日らしく一日生きくとして居たナターシャの顏は不意に變つた。目がじつと据わつて、それから廣い頸がぴくりと慄へ、脣の兩隅が下つた。

『ソーニャ! あんた何うしたの……一體、一體何うしたの? うーう……!』

とナターシャは大きな口を擴げて、すつかり醜い顏付になつた儘、譯も分らず、只ソーニャが泣

くからといふだけの理由で、赤ン坊のやうにわつと泣き出した、ソーニャは頭を擡げて返事をしようとしたが聲が出なかつた。そして餘計に顔を埋めて了つた。ナターシャは青い羽布團に腰を掛けて、友を抱き乍ら泣くのであつた。ソーニャはやつと元氣を出して起き上り、涙を拭き乍ら話し始めた。

『ニコーレンカはもう一週間經つたら出征なさるでせう。もう……命令が……下つたのよ……ニコーレンカが自分でわたしにさう仰しやつたわ……わたし決して泣く筈ぢやなかつたんだけれど……（と彼女は手に握つてゐた紙きれを出して見せた。それはニコライに書いて貰つた詩であつた）。わたし決して泣く筈ぢやなかつたんだけれど、あんたにも……誰にも分りはしないでせう……あの人の心が何んなかつて事は……』

彼女はニコライの心が立派だと云つて、又もや泣き出した。

『あんたはいゝわねえ……だけどわたし羨みはしなくつてよ……わたしはあんたが好きなの、そしてボリースも矢張り好きなの。』と幾分元氣を出して彼女は語つた。『あの人は優しい人ね……あん方には別に邪魔がないからいゝわねえ。所がニコライはわたしの從兄（クヂン）でせう……それには何うしても……大僧正のお許しが要るでせう……だけどそれは到底も駄目なんですもの。それに若しお母様が（ソーニャは伯爵夫人を母のやうに思つてさう呼んでゐた）……お母様はわたしがニコライの出世の邪魔をする、わたしには情（じやう）といふものがない、わたしは恩知らずだと仰しやるの。わたしはもう本當に……（と云つて十字を切つた）わたしはお母様を始め、あんた方をみんな愛してゐるのよ。只ゼーラさんだけ……あゝ何故でせう？　わたしあの方に何をしたんでせう？　わたしはあんた方みな樣を有難いと思つて、何でも悅んで犧牲にし度いと思つてゐるんだけれど、わたしには何にもないんですもの……』

ソーニャはそれ以上言ふ事が出來ないで、又もや顔を兩手と羽布團の中に隱して了つた。ナターシャは慰めに掛つたが、友達の悲しみが何れ程重大な意味を持つてゐるかを、充分に悟つたのは其の顔付に見えてゐた。

『ソーニャ！』恰も從姉の悲しみの眞の原因を見拔いたやうに、不意に彼女は言ひ出した。『屹度ゼーラが何かあんたに言つたんでせう、御飯の後で？　さう？』

『えゝ、この詩はね、ニコライが自分で書いて下すつたのよ、そしてわたしもう一枚別に寫したの。そしてわたしが卓の上に載せといたのを、ゼーラさんが見付けて、それをお母様に見せると仰しやるんですもの。それから未だかう仰しやつたわ——お前は恩知らずだ、お母様は決してニコライとお前を一緒にさしては下さらない、ニコライはジューリィと結婚するんだつて……ねえ、あんたも知つてるでせう、あの人は一日ジューリィさんと……ね、ナターシャ？　何ういふ譯なの？』

と言つて彼女は前よりも尙烈しく泣き出した。ナターシャは彼女を起して抱き緊め乍ら、涙の隙にほゝ笑みつゝ慰め始めた。

『ソーニャ、あんたエーラのいふ事なんか本當にしないがいゝわよ。ねえ、本當にしないがいゝわ、え、覺えて、？　何時だつたか長椅子部屋で、ニコーレンカと三人で話したぢやないの。ほら、晩御飯の後でね？　三人で先のことをすつかり決めたでせう。わたし何んな風だつたかもう覺えてないけれど、ねえ、本當に何もかもすつかり善くて、何もかもすつかり思ふ通りになつたぢやないの。ほらシンシン伯父さんの兄さんも、從妹と結婚なすつたぢやないの？　それにあんたとわたし達は二從姉妹ですもの。そしてボリースもそれは大して難かしくないつて言つたわ。あのねえ、わたしあの人にみんな話して了つたのよ。あの人は全く賢い、いい人なんですもの。』とナターシャは言つた。『あんた、ソーニャ、泣かないで頂戴、い、子だから、よう、ソーニャ（と彼女は笑ひ乍ら接吻した）。エーラは意地惡よ、あんな人打つ棄つといたらいゝのよ。何もかもみんな巧く納つて了ふわ、姉さんもお母さんに言ひ附けやしなくつてよ。そしてニコライはジューリイさんの事なんか考へたこともないわ。』

かう言ひながら彼女は友達の頭に接吻した。ソーニャは起ち上つた。美しい小猫は元氣附いて來て、其の目は輝き出した。さうして今にも直ぐ尻尾を一振して柔い蹠で飛び上り、小猫に適はしく毬を對手にじやれ出しさうな氣配を示した。

『あんたさう思つて？　本當？　神樣に誓つて？』

彼女は手早く着物や髪を直し乍らかう言つた。

『本當だわ！　神樣に誓つてよ！』ナターシャは友の編髪の下から溢れ出た、固い一束の毛を撫で附けて遣り乍らかう言つた。さうして二人は更に笑ひ出した。

『さあ行つて「泉」を唱ひませう。』

『唱ひませう。』

『覺えてるでせう、あの肥つたピエールさん、ほらわたしの向つ側に坐つた人——本當に可笑しな人よ！』不意にナターシャは立ち止り乍らかう言つた。『わたし全く面白いわ。』

とナターシャは廊下を駈け出した。

ソーニャは羽布團の毛を拂つてから、例の詩を骨の飛び出した首へ押し附けるやうにして內懷へ隱し、輕い樂しげな足取で顏を赤くし乍ら、ナターシャの後から長椅子室を指して廊下を駈け出した。客の所望に依つて、若い人達は『泉』の四部合唱を試みて、非常に皆を滿足さした。それからニコライは新しく練習した歌を唱つた。

心地よき月明の夜
胸に描くぞ幸深けれ――
世界に猶も我が上をば
思ひ續くる人のありと！
而して君は艶なる手を
黄金の琴に動かしつゝ
いとも切なる和音もて
己が傍に我を呼ぶと！
扨日二日經ば天國來べきに…
さはれ否！我が友は生きてあらなく

彼が未だ最後の數句を唱ひ終らない中に、もう廣間では若い人達が舞踏の仕度にかゝり、樂隊席では足踏の音がして、樂手達は咳拂をし始めた。

ピエールは客間に坐つてゐたが、シンシンが外國歸りの人と見掛けて、彼に取つて面白くもない政治談を持ちかけた。やがて他の人も其の仲間に加つた。樂隊が演奏を始めた時、ナターシャは客間へ入つて、眞直にピエールに近寄り乍ら、赤い顏をして笑ひ〳〵かう言つた。

『お母さまがあなたに踊つて頂けつて申しました。』

『僕は何うも間誤つきさうで心配ですが、』とピエールは言つた。『併しあなたが僕の先生になつて下さるなら…』

かう言つて彼は自分の太い手を低く下げ乍ら、瘠せた少女に差し出した。

各々の組が位置を定め、樂手が調子を合してゐる間、ピエールは小さな對手と並んで腰を掛けた。ナターシャは外國歸りの大人と一緒に踊るのだと思ふと、嬉しくつて堪らなかつた。彼女は一人の令孃から預かつた扇を手にして居たので、思ひ切り氣取つた恰好をして（まあ何時何處で習つて來たものだらう）、煽いでゐる扇越しに微笑しながら、自分の對手と話して居た。

『まあ何うでせう、何うでせう！御覽なさいまし、御覽なさいまし。』伯爵夫人は廣間を通りすがりにナターシャを指さしつゝかう言つた。ナターシャは赤くなつて笑ひ出した。

『あらお母さま何うしたの？大きにお世話さま！何もびつくりなさる事はなくつてよ！』

三度目の蘇格蘭曲の中頃に、今迄伯爵やマリヤ・ドミートリエヴナや、其の他重立つた客や老人連の、勝負を闘はしてゐた客間の椅子がが〳〵と鳴つて、疲れた人々は伸びをしたり、紙入や

金入を衣嚢へ藏つたりし乍ら、廣間の戸口に現はれた。眞先に出たのはマリヤと伯爵で、二人共愉快さうな顔をしてゐた。伯爵は舞踊で見るやうな、妙にふざけた丁寧な恰好をして、手をくるりと延し乍らマリヤに差し出した。彼はつと身を伸したが、其の顔は一種特別な若々しい狡さうな微笑に輝いた。彼は樂手達に向つて手を鳴らし、合唱席の方へ向いて第一のヴィオリンにかう叫んだ。

『セミョーン！ダニーロ・クーボルを知つてゐるか？』

それは伯爵が未だ若い頃に好んで踊つた舞踏であつた。（ダニーロ・クーボルといふのは實は英吉利舞踏の一節である。）

『一寸お父さまを見て頂戴！』ナターシャは大人と踊つてゐる事をすつかり忘れて、渦を卷いた頭を膝に附く程屈め乍ら、持前の響の高い笑ひ聲を廣間一杯に漲らしつゝ、かう叫ぶのであつた。

實際廣間の中にありと有る物は、喜びの微笑を浮べて此の老人を眺めた。彼は自分よりも脊の高い嚴めしい貴婦人――マリヤ・ドミートリエヴナと並んで、兩手を拍子に合せて丸く振つたり、肩をひよくひよく動かしたり、兩足を輕く踏んで捻り廻したりし乍ら、丸い顔に段々と微笑を擴げて行つて、これから踊つて見せようといふ物に、少しづゝ見物を剛らして行くのであつた。陽氣な雨垂拍子に似たダニーロ・クーボルの挑發的な音が響き初めると、廣間の扉は兩方とも――一方

は男、今一方は女の召使のにこ〳〵顔で忽ち一杯になつて了つた。彼等は大燥やぎに燥やいでゐる、旦那樣の樣子を見に來たのである。

『まあ吾家の旦那樣は！まるで荒鷲でござりまするよ！』と一方の戸口から乳母が大きな聲で言つた。

伯爵は中々上手に踊つたし、又自分でもそれを承知してゐたが、對手の方はまる切り上手に踊らうとも思はなければ、又出來もしなかつた。彼女は頑固な手をだらりと垂らし、大きな體を棒のやうにして突つ立つてゐるだけであつた（彼女は婦人袋を伯爵夫人に預けたのだ）。けれども其の嚴つい、とは言へ美しい顔だけは巧みな舞踏をしてゐた。伯爵が丸々した體全體で現はすものを、マリヤ・ドミートリエヴナは段々はつきりして來る笑顔と、ぴく〳〵と動く鼻だけで遺憾なく表現するのであつた。伯爵が次第に夢中になつて、巧みに足を廻轉さしたり飛び上つたり、思ひ掛けない形で見物を俘にすれば、マリヤ・ドミートリエヴナは一寸肩を動かしたり、手で圓を描いたり、足をとんと踏んだり、極僅かな努力で伯爵にも劣らぬ效果を奏した。人々は彼女の肥えた體と、平生の嚴つい態度に引き較べて、それ位の勞をも非常に珍重したのである。踊は次第に活氣を呈して來た。對舞者達は一寸も見物の注意を引く事が出來なかつたし、又引かうとも思はなかつた。一同は只伯爵とマリヤに氣に取られて了つて居た。

ナターシャは居合はす人々の袖を引つ張つて、お父さまを見せようとしたけれど、そんな事をしなくても、一同は二人の踊手から目も放さずに居たのである。伯爵は踊の合間々々に重々しい息を次いで、手を振り乍ら樂手達に向つて、もつと早く演奏するやうに叫んだ。伯は時に爪先で、時に踵でマリヤの周りを駈け廻り乍ら、愈々急に愈々猛に踊り狂ふのであつたが、遂に自分の對手を元の位置に向けて置いて、柔い足を後ろ向きにひよいと上げ、汗をかいた笑顔を傾け乍ら、一同の——殊にナターシャの拍手と哄笑の聲く中に、右手を圓く一廻轉さして最後の歩をした。二人の踊手は重々しく息を吐き乍ら、麻の手巾で顔を拭き〳〵立ち止つた。

『まあ、こんな工合にわたし達の若い時分には踊つたものですよ、マ、シェール。』と伯爵は言つた。

『やれ〳〵、ダニーロ・クーボルか！』重い息を長々と吐き乍ら、袖口をたくし上げてマリヤはかう言つた。

二

ロストフ家では、疲れて調子外れな音を出す樂手の演奏に伴れて、第六の英國舞踏を踊り、疲れた侍僕や料理人が夜食の支度をしてゐる時、ベズーホフ伯爵には第六回の發作が起つた。醫師

達は到底恢復の望がないと宣言した。病人には無言の懺悔と聖餐が取り行はれ、人々は臨終塗油式の準備に取り掛つて、家の中はかういふ場合に有り勝な混雜と、不安に滿たされてゐた。家の外の門陰には、伯爵の葬式の贅澤な註文を待ち受ける葬儀社共が、傍を通り過ぎる馬車から身を隱すやうにし乍ら群集してゐる。伯爵の容體を聞き合せに、絶えず使を寄越してゐた莫斯科總督は、有名なエカチェリーナ朝の貴族ベズーホフ伯爵と親しく告別する爲めに、此の晩わざ〳〵やつて來た。

壯麗な應接室は人で一杯になつてゐた。總督が病人と二人きりで、三十分ばかり過した後病室から出て來た時、一同は恭々しく席を立つた。總督は人々の禮に對して輕く答へつゝ、自分の方に注がれてゐる醫師、僧侶、親戚の人々の視線の中を、一時も早く潛り抜け度いといふ風であつた。此の二三日の中に瘠せて顏色の惡くなつたヴシーリイ公爵は、總督を見送りに出て、何やら二言三言低い聲で彼に言つた。

總督を送り出してから、ヴシーリイ公爵は只一人廣間の椅子に腰掛けて、足と足とを高々と組み合せ、膝の上に肘をつき、掌で目を閉いだ。かうして暫く坐つてゐた後彼は立ち上つた。そして何時にないせか〳〵した足取で、おど〳〵した目附で邊りを見廻し乍ら、長い廊下を通つて、一番年上の公爵令孃——伯爵の姪のゐる奥の方へ赴いた。

薄い灯に照された部屋の中の人々は、高低の一様でない囁を以て、銘々何やら話し合つてゐたが、頻死の病人の寢室へ通ずる戸がぎいと開いて、誰か其處へ入るか出るかする度毎に、ぴつたり口を噤んで、疑問と期待に充ちた目で、其の方へ振り向くのであつた。

『人間に置かれた境ひ目ですぢや。』一人の年取つた小柄な僧侶が、其の傍に坐つて無心に耳を傾けてゐる婦人に言つて聞かせた。『境ひ目がちやんと置かれてあるのでな、それを越して行く譯には參りませんて。』

『塗油式ももう手晩れでございますまいか？』と對手の僧位を附け足しながら、婦人は此の事に關して何の定見もないやうに訊いた。

『いやそれは偉大な神祕ですぢや。』幾撮みかの半白の毛が張り附けられてゐる禿頭を、つるりと一撫でして僧は答へた。

『あれは誰です？　總督だつたんですか？』部屋の今一方でこんな事を聞いてゐる。『實に若く見えますね！』

『もう六十以上ですよ？　で何ですか、伯爵はもう人の見分けが附かないんですか？　塗油式をする事になつたんですつてね。』

『わたしは七遍も塗油式をせられた人を一人知つてます。』

二番目の令孃は泣き腫らした目をして病室から出ると、醫師ロルランの傍に腰を掛けた。ロルランは卓に頰杖つき乍ら、優美な姿勢でエカチェリーナ女帝の肖像の下に坐つてゐた。

『Très beau（上天氣です）』と醫師は令孃の問に答へてかう言つた。『上天氣ですよ、お孃さん。時に莫斯科に居ると、まるで田舍のやうな氣がしますね。』

『さうでございませうか。』と令孃は吐息をつき乍ら言つた。『で、伯父樣はお水を召し上つてよろしうございますかしら？』

ロルランは一寸考へて、

『お藥を召し上りましたか？』

『はあ。』

ロルランは時計を眺めた。

『煮沸した湯を洋杯に注いで、其中へ une pincée（一撮）——と彼は細い指で une pincée の譯をして見せて——酒石英をお入れなさい。』

『三回も發作に襲はれて、命を取り留めた例はありません。』一人の獨逸醫師が拙い露西亞語で或る副官に言つた。

『實に生々した美しい方でしたがね！』と副官は言つた。『そして一體あの財産は誰に渡るんで

せう?』と彼は小聲に言ひ足した。

『望み手が發見されるでありませう。』と獨逸人は微笑し乍ら答へた。

一同は又しても戸口の方を振り向いた。戸はぎいと軋んで、二番目の令孃がロルランに敎へられた飲料を調へて、病人の所へ運んで行つた。獨逸人の醫師はロルランに近寄つて、

『若しかしたら、明日の朝まで保つかも知れませんね。』怪しい發音をし乍ら佛蘭西語でかう訊いた。

ロルランは唇を嚙みしめて、打ち消すやうに自分の鼻の先で指を嚴めしく振つて見せた。

『今夜です、決してそれより遲いことはありません。』自分が病人の容體を明確に理解し、且つ表現する事が出來るといふ、嗜みのいゝ自足の笑みを洩し乍ら、小さな聲でかう言つて其處を去つた。

その間にヴシーリイ公爵は令孃の部屋の戸を開けた。

部屋の中は薄暗かつた。只燈明が二つ聖像の前に燃えてゐるだけであつた。そして香や花の匂が心地よく薫つてゐた。部屋一杯に小簞笥や、小戸棚や、卓などが並べてあつた。衝立の陰からはふつくりした高い寢臺の白い蔽ひが見えてゐる。狆が吠え始めた。

『おや、あなたでございましたか、モン・クザン(我が從兄よ)』

令孃は立ち上つて髪を直した。其の髪は何時でも——今のやうな場合でも恐ろしく滑らかで、まるで髪も頭も一つの塊で拵へられて、其の上から漆でもかけたやうであつた。

『何でございます、何か起つたのでせうか?』と彼女は訊ねた。『わたしはもうすつかり慴えてしまひました。』

『何でもない、矢張り元の通りだ、わたしはお前に一寸話があつて來たのだよ、カチーシ(カチェリーナの佛蘭西風の呼方)』公爵は令孃の立ち上つた安樂椅子へぐつたりと腰を下し乍らかう言つた。『だけどお前恐しく暖めたものだね。』と彼は言つた。『さあ、此處へお坐り。causons(お喋りしよう)』

『わたしは又何か起つたのではないかと思ひまして。』令孃は持前の、何時に變らぬ石のやうに固い表情をして、對手の言ふ事を聞かうと身構へし乍ら、公爵の向ひに腰を下した。

『一寢入しようと思つたんですけれど、駄目でしたわ。』

『時に何うだね、お前。』ヴシーリイ公爵は令孃の手を取つて、例の癖でそれを下の方へ引つ張り乍らかう言つた。

察する所、此の「時に何うだね」は、それと名指さないでも二人の者にちやんと分つてゐる、或る事柄に關係してゐるらしかつた。

足に較べて吊合の取れない程長く、乾き切つて棒のやうに眞直な胴を持つた令孃は、少し飛び出した灰色の目で、興もなげにぢつと公爵を見詰めた。彼女の身振は悲哀と信服の表情とも解れれば、或はもう今にゆつくり休めるといふ希望と、疲勞の表情とも解れるのであつた。ヴシーリイ公爵は其の身振を疲勞の表情と解つた。

『ぢや、わたしはどうなんだ？』彼は言つた。『樂だとでも言ふのかね？ Je suis éreinté comme un cheval de poste.（わたしは驛遞の馬のやうにへとくだよ）だが、わたしはそれでも、お前と是非相談しなくちやならない事がある、カチーシ、而も大變重大な事なんだよ。』

ヴシーリイ公爵は口を噤んだ。彼の兩頬は神經的に交る〳〵引つ吊り始めた。それが彼の顏に不愉快な表情――社交界の客間ではヴシーリイ公爵の顏に、決して見る事の出來ない表情を與へるのであつた。其の眼附も亦平生のやうではなかつた。時には高慢な冗談らしい色を浮べるかと思ふと、時には慴えたやうに邊りを見廻すのであつた。

令孃はかさ〳〵した膏せた手で狆を膝の上に抱き寄せ乍ら、じつとヴシーリイ公爵の目を見詰めた。併し彼女はたとへ朝迄默り込んでゐるやうな事があつても、何か疑問を發して沈默を破りさうな氣配は見えなかつた。

『所でだね、我が愛すべき公爵令孃、カチェリーナ・セミョーノヴナ。』とヴシーリイ公爵は幾分

心内の暗闘に苦んでゐるらしい聲で、話の續きに取り掛つた。『今の場合には萬事とつくりと考へなくちやならないよ。將來の事だの、お前達の事だのを考へなくちやならない。わたしはお前達をみんな自分の子のやうに愛してゐる。それはお前も知つてゐるだらう。』

令孃は鈍い動きのない眼附で彼を眺めた。

『そして最後にわたしの家族の事も考へなくちやならない。』腹立しげに卓を向うへ突きやり乍ら、對手の顏を見ずにヴシーリイ公爵は言つた。『カチーシ、お前も知つての通り、お前達ァーモントフ公爵家の三人姉妹と、それからわたしの家内、此の四人は伯爵の直ぐの相續人なのだよ。いや分つてゐる、こんな事を言つたり考へたりするのが、お前に取つて何んなに苦しいかはよく分つてゐる。また、わたしだつて決して苦しくない譯ぢやない。併しお前、わたしはもう五十過ぎた體だから、何事に對しても覺悟が要る。お前知つてるかね、わたしはピエールを呼びに遣つたんだよ。伯爵は明らかにピエールの寫眞を指して、何うしても傍へ呼んで來いと言はれたんだ。』

ヴシーリイ公爵は窺ふやうに令孃を見遣つた。併し彼女は對手の言葉を考へてゐるのか、それとも只彼の顏を眺めてゐるだけなのか、少しも見當が附かなかつた。

『わたし、たつた一つ絶えず神樣にお祈りして居りますの、モン・クザン、』と彼女は答へた。『何うぞ神樣が伯父樣を憐んで、安らかに此の……世界を捨てさせて下さるやうにと……』

『さう、それはさうだが、』とヴシーリイ公爵は禿げた額を擦り乍ら、一度押し退けた卓を忌々しげに又引き寄せて、自烈たさうにかう遮つた。『併し結局…とゞの詰りはかういふ事なのだ。お前も自分で知つてるだらうが、去年の冬伯爵は遺言狀を書かれた、それで見ると、直接の相續人たる我々をさし置いて、ピエールに全財産を讓る事になつてるんだよ。』

『伯父さまが遺言狀を書かれたのが珍しい事ですか！』と令孃は平氣で言つた。『けれども、ピエールに讓るといふ譯には參りませんわ。ピエールは庶子ですもの。』

『マ・シエール』不意に卓をぴつたり引き寄せて、妙に元氣附き乍ら公爵は早口に言ひ出した。『が、若し伯爵が皇帝に上奏文を書いて、ピエールを嫡子に直すやうに請願されたら何うする？分つてもゐるだらうが、伯爵程の勳功があれば、其の請願も御裁可になるに相違ない…』

令孃はほゝ笑んだ。それは通常人が現に話してゐる對手よりも、自分の方がよく事情を知つてゐる、と思ふ時に見せるやうな微笑であつた。

『ぢや、わたしはもつとよくお前に聞かして上げよう。』ヴシーリイ公爵は彼女の手を取りながらかう言つた。『上奏文は未だ呈出されないけれど、もうちやんと書いてある。そして皇帝も其の事を御存じなんだよ。問題は只其の上奏文が消滅したか何うか、と言ふだけの事なんだ。若し消滅してなかつたら、もう萬事休すだ。』ヴシーリイ公爵は萬事休すといふ言葉の中に、如何なる意

を含ましたかを知らせる爲めに嘆息した。『伯爵の死後書類の調査となつて、遺言狀と上奏文が發見され、それが皇帝に送られる。すると伯爵の請願は必ず裁可されるに相違ない。さうするとピエールは嫡子として、一切の物を讓り受けるのだ。』

『で、わたし達の分は？』令孃は皮肉にほゝ笑みつゝかう言つた。それは丁度、何んな事だつて起り兼ねないけれども、そんな事ばかりは…と言つたやうな工合であつた。

『Mais, ma pauvre Katiche, c'est clair comme le jour（だがね、カチーシ、それは白日の樣に明らかな事だよ）。』さうなればあの男一人が一切の物の相續者で、お前達はこれつから先も貰へやしないさ。ねえ、お前は知つてるなくちやならない筈だ、遺言と手紙はもう書いてあるか何うか、そして又それが消滅してゐるか何うか。若し何かの拍子で、皆がそれを忘れてゐるとすれば、お前はそれが何處にあるか知つて、探し出さねばならぬ、何故つて——』

『まあ隨分酷い事を仰しやるんですね！』令孃は嘲るやうにほゝ笑みつゝ、目の表情を變へないで遮つた。『わたしは何うせ女です。あなたのお考へでは、わたし達はみんな馬鹿者なんでせう。だけどわたし庶子が相續人となる事は出來ない、といふ事だけは存じてゐますの…Un bâtard（私生兒）』と彼女は附け足した。此の飜譯で公爵の說の無根な事を、十分に證明し得たつもりなのである。

『本當に何うしてお前にそれが分らないんだらう、カチーシ、お前のやうな利口な人に……若し伯爵が皇帝に上奏文を書いて、ピエールを嫡子と承認して頂き度いと請願したら、つまりピエールはもうピエールでなくつて、ベズーホフ伯爵なんだよ。そしたらあの男は遺言に依つて、一切の物を讓り受けるといふ事が、何うしてお前に分らないのだらうねえ。もし遺言と上奏文が消滅されなかつたら、お前は只德のある令嬢だといふ評判と、et tout ce qui ci sen suit（そしてそれから出て來る一切のもの）より外に、何等の慰藉も受ける事は出來ないんだよ。それは間違のない所だ。』

『わたし遺言狀が出來てゐる事は知つてゐますが、其の遺言狀が效力のないものだといふ事も、矢張り承知してゐますの。あなたは大方わたしを、よく〳〵の馬鹿者と考へてゐらつしやるんでせう、モン、クザン』女が何か一ツ端皮肉な抉るやうなことでも言つた積りでゐる時に、よく見せる表情を浮べながら令嬢はかう言つた。

『まあこれお前、カチェリーナ・セミョーノヴナ』ヴシーリィ公爵はもどかしげに言ひ出した。『わたしは何も喧嘩を賣りに此處へ來たんぢやないよ。お前を親身のやうに――立派な親切な、本當に親身の娘のやうに思へばこそ、お前自身の利益の爲めにわざ〳〵相談に來たんだよ。わたしは口を酸くして言つてゐるんぢやないか。ピエールの利益を圖つた上奏文と遺言狀が、伯爵の書類の中に交つてゐる以上、お前もお前の妹達も相續人ではないんだよ。若しわたしの言ふ事が本當に

ならなければ、專門家の言ふ事を本當にしな。わたしは今ドミートリィ（家附の辯護士）と話して來たけれど、あの男も矢張りさう言つてゐたよ。』

俄然令嬢の考へに何か變化が生じたらしい。薄い唇は紫色になり（目は矢張り元の儘であつたが）、聲は彼女が口を切つた時、自分でも思ひ掛けない位痙攣つてつゝ拔けた。

『それは嘸結構でせうね。』と彼女は言つた。『わたしは何も望みはしませんでしたし、今とても望んではゐませんから。』

彼女は膝から狆を拋り出して、服の襞を直した。

『あゝそれが、何もかもあの方の爲めに犧牲にした人間に、與へられる酬いなのです、感謝なのです。』と彼女は言つた。『立派ですわ！　實に結構ですわ！　わたし何にも欲しかありません、公爵。』

『さうだらう、併しお前一人ではないよ、お前には妹があるんだからね。』とヴシーリィ公爵は答へた。

併し令嬢は彼の言ふ事を聞かなかつた。

『えゝ、卑劣と羨望と僞瞞と奸計と忘恩のほか――實に〳〵無恥な忘恩のほか、わたしは此の家で何にも期待してゐませんでした。わたしそれをずつと前から知つてたけれど、一寸忘れてゐ

たんですわ……』

『お前知つてるのか知らないのか、其の遺言狀が何處にあるかつてことを？』以前よりも餘計頬を引つ吊らせ乍ら、ヴシーリイ公爵はかう訊いた。

『え、、わたしは馬鹿だつたんですわ。わたしは未だ人間といふ者を信じて愛して、自分を犧牲に迄してゐました。所が世間で成功するのは、卑劣な穢らはしい人間ばかりです。これが誰の企らみだか、わたしよく知つてゐます。』

令嬢は立ち上らうとしたが、公爵は其の手を抑へた。令嬢は突然全人類に失望した人のやうな顔附をして、毒々しく對手を眺めた。

『未だ餘裕があるよ、カチーシ、これはみんな病氣に浮かされて、腹立紛れにふいと決めたまま、其の後忘れて打つ棄らかしにしてゐたのだ。それを覺えてなくちやならない。我々の義務はねお前、伯爵の過失を匡正して、最後の苦痛を輕くして上げるといふことだ。そしてあの方が此の不公平を仕了せないやうに、氣を付けて上げなくちやならない。此の過失に依つて、二三の人達を不幸に陷れたといふ考へを抱いた儘、あの方を死なせないやうにして上げなければならない。』

『その二三の人達は、あの方の爲めにすべてを犧牲に供しました。』と令嬢は引き取つて又いきなり立ち上らうと藻掻いた、が公爵は手を放さなかつた。『それをあの方は一度だつて有難いと考

へる事が出來なかつたのです。駄目です』と彼女は溜息と共に附け足した。『わたしよく覺えて置きますわ、此の世で報いを待つ事は出來ない、此の世には德義も正義もないつてことをね。此の世では狡猾で意地惡にならなくつちや駄目なんです。』

『まあそれは今に分る、落ち着いてお呉れ、わたしはお前の美しい心を知つてるから。』

『いゝえ、わたしの心は意地惡ですの。』

『わたしはお前の心を知つてゐる。』と公爵は繰り返した。『そしてお前とかう親しくしてゐるのを嬉しく思つてゐる。だからお前もわたしに對して、同じ考へを持つて呉れるやうに望むのだ。何うぞ落ち着いて、時間のある間に parlons raison（筋道の立つた話をしようぢやないか）。其の時間は或ひは未だ一晝夜あるかも知れないし、或ひは一時間しか無いかも知れない。どうか遺言狀に就いて、お前の知つてるだけの事を聞かして呉れないか。が、何より肝腎なのは其の在所なんだ。お前は屹度知つてる筈だ。わたし達は今こそそれを探し出して、伯爵に見せなくちやならん。あの方は確かにその事をすつかり忘れてゐられるのだから、お目にかけたら破いて了ひたくなるに相違ないよ。が、わたしのたつた一つの希望は、あの方の意志を立派に果して上げ度いばかりなのだ。お前にも分つてるだらう、わたしが莫斯科へ來たのも只それが爲めのみなんだ。わたしが今此處にゐるのは、只あの方やお前達に一臂の力を添へ度いばかりなのだよ。』

『これが誰の奸計だか、わたし今こそ分りました。わたしちやんと知つてゐます。』
『それは當面の問題ぢやないよ、お前。』
『これはあなたの protégée（被保護人）の仕業です。あの小間使にするのも厭な、あなたの好きなドルベッカーヤ夫人です、あの卑劣な、蟲唾の走るやうな女です』
『Ne perdons point de temps（時間を浪費するのは止めよう）』
『いゝえ言はないで下さい！　此の前の冬あの女が此處へ潜り込んでわたし達――殊にソフィの事を、伯父様に散々惡口言つたものですから（わたし今それを口にする事も出來ません）それで伯父様が大變惡くおなんなすつて、二週間ばかりわたし達に會はうとなさらなかつた程です。其の時伯父様はあの穢らはしい遺言狀をお書きなすつたんです、わたし知つてます。だけど、わたしそれは何の意味もないものだと思つてゐました。』
『そこが大切なんだよ。何うしてお前もつと早く言つて呉れなかつたんだ？』
『伯父様が枕の下に敷いてらつしやる、モザイクの折鞄の中にあるんです。今こそ分りました。』と令孃は返事もせずに言つた。『若しわたしに何か大きな罪があるとすれば、それはあの卑劣な女に對する憎しみです。』と全く相好を變へて、彼女は殆ど喚くやうに言つた。『わたしあの女にすつかり言つてやる、すつかり！　今に其の時が來るから！』

三

かうした樣々な會話が、客間や令孃の部屋で交換されてゐる時、ピエールと（迎ひの使者がロストフ家へ來たのである）ドルベッカーヤ夫人（これは是非ピエールと一緒に出掛ける必要があると考へたので）を乘せた馬車が、ベズーホフ伯爵家の邸内に曳き込まれた。馬車の轍が窓下に敷かれた藁の上を柔かく響き始めた時、ドルベッカーヤ夫人はピエールに向つて、慰めの言葉を發したが、彼が馬車の隅で寢込んでゐるのを確めて搖り起した。ピエールは目を醒して、ドルベッカーヤ夫人の後から馬車を出たが、それと同時に、瀕死の父との對面が目前に控へてゐる事を想ひ出した。彼は自分等が正面玄關から入らずに、裏手の車寄せへ乘り附けたのに氣がついた。彼が馬車の踏み段から足を下した時に、町人らしい服裝の男が二人車寄せから壁の陰へ、こそ〳〵と駈け込んだ。ピエールが立ち止つて透して見ると、家の兩側の物蔭に未だ幾人も同じやうな男がゐた。けれどドルベッカーヤ夫人も、侍僕も、馭者も、此の男達が目に入らぬ筈はないのに、少しも注意を拂はなかつた。して見るとこれが當り前なんだな。」とピエールは獨りで決めて、ドルベッカーヤ夫人の後に從つた。
夫人はせか〳〵した足取りで薄い灯に照された、狹い石の階段を上つて行つたが、時々立ち止

つて後れ勝ちなピエールを呼んだ。ピエールは一體何の爲めに、伯爵の所へ行かなければならないのか分らなかつたが、何故自分が裏梯子から上つて行かなければならないか、といふ事は尙更以て合點が行かなかつた。けれどドルベッカーヤ夫人の忙しさうな、信ずる所ありげな樣子から推して、何うしてもかうしなくてはならないのだらう、と決めて了つた。階段の中程で長靴をかた〳〵鳴らし乍ら、バケツを提げた人達が驅け下りて、危く二人を突き飛ばさないばかりであつた。彼等は壁にぴたりと身を寄せて、ピエールとドルベッカーヤ夫人を通した。そして二人の姿を見ても、少しもびつくりしたやうな風を示さなかつた。

『此處はお孃樣方のお部屋へ行く道かえ？』とドルベッカーヤ夫人が彼等の一人に訊いた。

『さうですよ。』と僕は今こそ何をしたつて構はないと言つたやうに、圖々しい大聲で答へた。『左側の戸がさうですよ、奥さん。』

『伯爵は僕を呼ばなかつたのかも知れませんね。』と階段の平臺へ出た時ピエールは言ひ出した。『僕自分の部屋へ歸つた方が宜かあないでせうか。』

ドルベッカーヤ夫人はピエールと肩を並べる爲めに立ち止つた。

『Ah, mon ami!（まあ、あなた）』と彼女は今朝息子に試みたと同じ手附で、ピエールの手に一寸觸つた。『わたしだつてあなたに劣らず苦んでゐますよ。だけど何うぞ男らしくして下さい。』

『でも、本當に僕行きませうか？』眼鏡越に優しくドルベッカーヤ夫人を眺めつゝ、ピエールはかう訊ねた。

『Ah, mon ami!（まあ、あなた）、世間の人達があなたに對して、不公平だつた事を忘れてお了ひなさい。そしてあの方は何と言つても、あなたのお父さまだと言ふ事を覺えてゐらつしやい……若しかしたら、今臨終の苦みをしてらつしやるかも知れません。』と彼女は嘆息した。『わたしはね、直ぐにあなたが我子のやうに好きになつて了ひましたの。わたしを信用して下さいまし、ピエールさん。わたしは決してあなたの利害を忘れは致しませんから。』

ピエールは何にも分らなかつたが、何事も皆かうあるのが本當だらうといふ感じが、又前よりも餘計强くなつて來た。で彼は、もう戸を開けてゐる夫人の後に從順しく隨いて行つた。

其の戸は裏口から來る客の控室に通じてゐた。令孃付の老僕が片隅に坐つて、靴下を編んでゐた。ピエールは邸内の此の部分へ來た事もなければ、こんな部屋のある事すら知らなかつた。ドルベッカーヤ夫人は小間使が水差しを載せた盆を持つて、二人を追ひ越して行くのを摑まへて、い、子だの可愛い子だのと世辭を並べ乍ら、令孃達の健康の事など訊いてから、又暗い廊下を先へ〳〵とピエールを引つ張つて行つた。廊下に沿うて左側にある最初の扉は、令孃達の住ひに當てられた幾つかの部屋へ通じてゐた。水差を持つた小間使が取り急いで（此の家では此の時すべて

の事が急いで行はれた）戸を閉め忘れたので、ピエールとドルベッカーヤ夫人は通りすがりに、何心なく部屋の中を覗いて見た。其處では一番上の令孃とワシーリイ公爵が、近々と寄り添ひ乍ら話し込んでゐた。通り過ぎた二人の姿を見ると、公爵は苛立たしげな身振をして、急につと脊を伸ばした。令孃は立ち上つて一生懸命な力で、やけに叩き附けるやうに戸を閉め切つた。

其の身振は何時もの落ち着き拂つた令孃の態度に比べて、餘りと言へば似てゐる所が少かつたし、それにワシーリイ公爵の顏に現れた恐怖の色は、彼の物々しい平素の樣子に不似合であつたので、ピエールは立ち止つて、眼鏡越しに自分の指導者を訝しげに見詰めた。ドルベッカーヤ夫人は驚きの色を示さずに、只微かにほゝ笑んで歎息した。それは丁度、わたしもこれを豫期してゐましたの、といふ意を見せたのである。

『Soyez homme, mon ami（あなた、男らしくなさいまし）、わたしは屹度あなたの利益を守つてさし上げます。』

ピエールの物問ひ度げな眼附にかう答へて、彼女は猶足早に廊下を進んで行つた。

ピエールは何が何だか分らなかつたが、「あなたの利益を守る」といふのは何の事やら、尙更合點が行かなかつた。そして只何もかもかうあるのが本當だらう、とだけ合點したのである。廊下を通り抜けて、二人は伯爵の應接室に隣つてゐる、うつすり灯のついた廣間に出た。これはピエールが何時も表玄關から入りつけた、寒いけれど贅澤に飾られた室の一つである。併し此の部屋に

も眞中に空の湯槽が置かれてあつて、毛氈には湯の溢れた跡があつた。出會ひ頭に召使と香爐を持つた僧とが、二人の者には目も呉れず、爪先立ちで出て來た。二人はピエールに馴染の深い應接室に入つた。其處には伊太利風の窓が二つ付いて、庭園へ下る出口があり、大きな胸像とエカチェリーナ女帝を描いた、等身大の肖像畫が飾つてあつた。すべての人々は殆ど以前と同じ位置に腰掛けて、ひそ〳〵囁き交してゐた。一同はぴたりと話を止めて、泣き出しさうな蒼白い顏をして入つて來るドルベッカーヤ夫人と、頭を垂れて從順しくついて來る、肥えた大きなピエールの方へ振り向いた。

ドルベッカーヤ夫人の顏には、愈々のるかそるかの時が來たといふ自覺が現れた。彼女はピエールを傍から放さないで、事務的な彼得堡婦人の態度を以て、今朝程より尙大膽に部屋の中へ入つて行つた。自分は臨終の病人が會ひ度いといふ人を伴れてゐるのだから、自分の行動はちやんと保證されて居る。かう思つて彼女は部屋に居合す一同を、ちらと一目に見て取つたが、伯爵の懺悔僧が目に入ると、彼女は急に脊を屈めた——といふ譯でもないが、何となく不意に背丈を小さくし乍ら、小刻みな飛ぶやうな足附で僧の方へ近寄つた。そして先づ一人の、次に今一人の僧の祝福を恭しく受けるのであつた。

『有難い事に、やつと間に合ひました。』と彼女は僧に言つた。『わたし共は親族の者ですが、本

當に心配いたしました。あの若い方は伯爵のご子息でございます。』と彼女は聲を低めて附け足した。『恐しい時が參りましたね！』

かう言つて彼女は醫師に近附いた。

『Cher docteur, ce jeun homme est le fils du comte（ドクトル、此の若い方は伯爵のご子息でございます）……未だ望みがございませうか？』と彼女は醫師に言つた。

醫師は無言の儘目と肩をひょいと上へあげた。ドルベッカーヤ夫人も全くそれと同じ動作で目と肩を上げたが、其の目は閉ぢて了つて居た。そして歎息し乍ら醫師を離れて、ピエールの方へ歸つて來た。彼女は特に悲しく、そして憂しい憂愁を帶びた調子でピエールにかう言つた。

『Ayez confiance en Sa miséricorde（神様のお惠みにお頼りなさい）』と彼女は言ひ乍ら小形の長椅子を指して、坐つて待つてゐろといふ意味を悟らせ、自分は人々の注意の焦點となつてゐる例の扉の方へ、そつと音のしないやうに歩き出した。そして聞えるか聞えない位の音と共に、其の蔭に姿を隱したのである。

ピエールは萬事此の指導者の言ふが儘にならうと決心して、彼女の指し示した長椅子に向つて歩き出した。ドルベッカーヤ夫人が隱れると同時に、部屋に居合はす一同の視線が、好奇心や同情以上の或る物を以て、自分の方に注がれてゐるのに彼は氣附いた。彼は一同が目附で自分の方

を指し乍ら、恐怖とも屈從とも見える一種の表情を浮べつゝ、囁き合つてゐるのに氣附いた。人人はこれ迄嘗て無かつたやうな尊敬を彼に示すのであつた。僧達と話してゐた見知らぬ一人の婦人は、自分の席を立つて彼に坐れと勸めた。副官はピエールの落した手套を拾つて、彼に差し出した。醫師達は彼が傍を通る度に恭しく口を噤んで、彼に道を與へる爲めに片寄るのであつた。ピエールは始め其の婦人の邪魔にならぬやうに、他の席に坐る積りでゐたし、手套も自分で拾ひ、決して通り路の邪魔にならぬやう、醫師達をも避けて通る積りであつた。併し不意に彼はさうするのが、作法に適はぬ事のやうに思はれた。今夜自分は一同から待ち設けられてゐる、或る恐しい儀式を行はねばならぬ人なので、それ故自分は他人から與へられる親切を受けなければならぬのだ、といつたやうな氣持がした。彼は默つて副官の手から手套を受け取り、例の婦人の席に腰を掛け、埃及の彫像のやうな無邪氣な姿勢で、几帳面に並べた膝の上に大きな手を置いた。そしてかうなるのが本當だ、今夜は取り逆上せて馬鹿な事をしない爲めに、萬事自分の一人考へで行動しないで、自分の體を指導して呉れる人の手に、すつかり委ねて了はなければならぬと決めた。

それから二分と經たぬ中に、ヴシーリイ公爵は勳章の三つ付いた露西亞式上衣を着て、首を高く反らし乍ら、威風堂堂と部屋へ入つて來た。今朝から見ると彼は又瘠せたやうに思はれた。彼が部屋を見廻してピエールを見付けた時、其の目は何時もより大きかつた。彼はピエールに近付